IS -隊長補佐の憂鬱-

偽桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　－隊長補佐の憂鬱－

【Ｎコード】
Ｎ５９４５Ｙ

【作者名】
偽桜

【あらすじ】
「こんな壊れた僕だけど、まあまあ幸せです」

これは、少し壊れてしまったオリ主「御刻　礼衣」がＩＳ世界に転生し、ドイツ軍でゆらゆら生きていくおはなし。

一夏「……よし、なんかそれっぽくできた」
礼衣・ラウラ「「これ書いたのお前かよ！」」

※作者が初心者&割と文才がないです。
コンセプトは『毎日サクサク読めるかどうか』ですので、一話ごとが短文です。あらかじめご了承下さい。

第一話　プロローグ（前書き）

初投稿です。
テストなので若干短いです。

第一話　プロローグ

§§§§§§§§§§

ガ……ガ……ガガ……

それは心の削れる音？

ガ……■……ガ■……■…

それは心の最期の叫び。

ガ……■■■……ガ■■……■…

誰かと自分の赤いナニカで染まった体は、もう少しも動かないけれど。

■■■■■■■■■■■…■■■ガ■…■■■■■

ナミダも流せないほど、僕の心は磨り減ってしまったけれど。

■■■■■■■■■■■■■ガ■■■■■■■

それでも、最期に、叫びたい。
それが絶対聞き届けられないとしても。

■■■■■……イキタイ……■■■■■■■

§§§§§§§§§§

さて、突然で申し訳ないとは思うけれど、僕「御刻　礼衣（みとき　れい）」は転生者だ。

…オーケイ、その「いい精神病院紹介してあげようか？」みたいな目線にはもうなれているから、怒るなんてことはしない。

でも、実際記憶として頭のなかにあるんだから、仕方無いだろう？

前世で普通の高校生として生き、死ぬ直前学校内で殺し……いや、あの時の事はもう思い出したくない。
で、死後何か白髪の老人みたいなのが出てきて、テンプレの如くチート能力を貰ってこの世界『ＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜の世界』に来たって訳。

因みに貰った能力は、サプリ無しで『ヴィークル』に乗れる能力と

全体的な身体能力強化。何か「役に立つ物なら何でもいい」とか言ったらこうなった。

…というか『ヴィークルエンド』とか、妙にチョイスが渋い。おかげで生活には苦労しないし。

ま、そういう訳で、今は中学一年生の夏休みである。
せっかくの夏休みなので、僕は株取引で手にいれた某航空会社の株主優待券（配当でもらった）でドイツへ海外旅行をしている訳だ。
一人で。

…こっちの世界での両親には気味悪がられて中学に入学すると同時に独り暮らしさせられたからなあ…まあいいけど。

さて、何で僕がこんな現実逃避みたいな自己紹介を誰かに語っているかと言うと。

「……えーと」

「……ふぇ」

目の前で突然銀髪眼帯少女が泣き出したからである。
いや決して僕が泣かせた訳ではない。
簡単に流れを説明すると、

レストラン探しに路地裏に入る
←
目の前の少女が暴漢に襲われかけているのを目撃
←
ヴィーグルを使い暴漢排除
←
少女に話し掛ける
←
少女泣き出す　↑イマココ！

…訳解らん。

まあ、何か僕の言葉が何かのトリガーになったみたいだし、取り敢えず事情を聞こうとしてみる。

「あの、大丈夫？」

「……大丈夫では……ない……」

お、日本語通じた。

「…また……他の隊員に馬鹿にされる……」

『隊員』って事は、何かの組織にでも入っているのだろうか。見た感じ小柄だけど『ひみつきちごっこ』とかする年齢ではないっぽいし。

しばらく事情を聴いてみた所、何とこの少女、原作ヒロインのラウラ・ボーデヴィッヒさんらしい。まあ見たときからそんな予感はしてたけど。

…実はＩＳ自体は3巻ぐらいまでしか読んでないんだよな、僕。何か有無を言わせずこの世界に飛ばされたし。

まあ、大体の事情は理解できた。
ちょうど今は、ラウラさんが目の改造を行ってスランプに陥った時と織斑　千冬から鍛えなおされる間らしい。

この様子を見る限り酷いイジメを受けているみたいだな…
なんか今の状況も街での隠密行動の訓練中他の隊員に嵌められてこうなったみたいだし。

さーて、どうしたもんかねぇ…？
ま、どーせ助けるぐらいしか選択肢がないんだけど。

第一話　プロローグ（後書き）

初心者なので文も拙いですがよろしくお願いします。
更新はなるべく早めにする予定です。

…ヒロインとかチート能力とか全部ＡＭＩＤＡクジで決めちゃったのは秘密。

第二話　僕が軍人になった流れとか（前書き）

急展開すぎた。

…すいませんｏｒｚ

第二話　僕が軍人になった流れとか

§§§§§§§§§§§§

あかい

あかい

まあるいいけの

まんなかで

ぼくはわらう

ぼくはわらう

そうしたら

めのまえの＊＊が

あかいみずをふいたよ

§§§§§§§§§§

「それでは、御刻　礼衣さん。『シュヴァルツェ・ハーゼ』へようこそ。解らないことがあったら、気軽に私『クラリッサ・ハルフォーフ』に質問して下さいね」

…どうしてこうなった？

なんでいきなり歓迎の言葉を言われるのか流れが全く理解できない。

特に怪しいことはしてない筈なんだけどな…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

自分の身の上を言ったことで少し落ち着いたらしいラウラと僕は、その後表通りのカフェでケーキを食べていた。
いつも街に出るときは訓練で来ることがほとんどで、あまり外で食べたことのないらしいラウラは周りをきょろきょろしながらバームクーヘンを頬張っている。

…周囲を警戒しているのは解るけど、ぶっちゃけ小動物みたいでかわいい。

「で、ラウラさん」

「ムグ…何だ」

何か幸せそうな顔してる。けど、

「さっき言ってたことって簡単に話してよかったの？」

「あっ…」

やっぱり…

やっぱりこう言うのって、軍の方から拘束とかされるのかな……。
早く終わるといいけど。

ま、その後当然僕はラウラさんの訓練の監視をしていたらしい人に取り押さえられ、ドイツ軍に身柄を拘束されてしまった訳で。
身体検査・尋問等々を3日間程やらされた。
ちょっと話をした監視の人に聞いてみると最初は「身元が特定できたらすぐ解放しますよー」とか言ってたのに、2日目辺りから「すいませんもう少し検査させて下さい、お願いですから！」みたいに態度が変わった。

…と言うか監視の人自体が軍服から軍服＋白衣の研究者っぽい人に替わってた気が。

で、それらが終わった直後、連れ出されていきなり軍服に着替えさせられた後いきなりさっきの様な事を言われた、と言う訳だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「質問してもいいですか」

「はいはい何でしょう、大体の事なら教えてあげますよ～。あ、流石に私のスリーサイズとかはちょっと……」

なに言ってんだこの人。

「いえ、そんなどーでもいい質問ではなくてですね…」

「どーでもいいとか言われた………」

「あー、しゃがんで地面にのの字書いてる余裕あったら質問に答えてくれません？こっちもツッコミ入れんの面倒なんで。というか本当になんで只の一般人である僕を部隊に？」

「身体能力・思考能力は遺伝子強化兵並み、しかも体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成されており、更に男性なのにＩＳ適正Ａなんてイレギュラーの何処が『一般人』なんですか。そんなこと言う口は塞ぎますよ？」

もうやだこの変態。

しっかし、そこまで調べてたのか、ドイツ軍。
多分『体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成』ってのは『ヴィークル』の副作用だろう。身体能力うんぬんも多分チート関連。しかし、

「ＩＳ適正Ａ？」

そう、これは初耳なのだ。
女性にしか扱えないＩＳは、男性には「ＩＳ適正：―（なし）」を出すはずである。

そんな質問をする僕に、

「私達だって解らないんですよ！こっちの方が理由を聞きたいぐらいです！」

いやそんなキレられても困ります。

しかし、どうやら僕がＩＳを動かせるのは（少なくとも検査上では）本当らしく、本当に動かせるなら僕をＩＳ部隊に引き込み、駄目でも特殊部隊あたりに配属させる気らしい。というか、

「あ、御刻さんの日本国籍、消しときましたから★」

…逃げ場が無くなりました。

要はあれだろう、『ドイツ軍に入らないと国籍無くなるよ？』といいたいんだろう。さっきの言葉の★の所に書いてあった。

まあどっちにしろ、入るしか無いんだろうな……

「はいはい、入ればいいんでしょう入れば。ちなみに僕の役職は？」

「あ、役職ではないですがあなたと一緒にいたラウラ・ボーデヴィッヒさんとタッグを組むことは決まりましたよ」

まあ、それは予想していた。
片や『落ちこぼれ』、もう片方は『いきなり飛び込んできたイレギュラー（しかも男性）』である。
タッグにして隔離するのは考え方としては順当だろう。

「と、いう訳で、改めまして『シュヴァルツェ・ハーゼ』ようこそ、御刻　礼衣さん」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その日の午後。

僕は本当にＩＳを動かせるかどうかを試すため、ＩＳの倉庫に来ていた。

「…えーと」

多くのドイツ軍関係者が見守る中、黒いＩＳ（量産型らしい。名前忘れた）に触れる。

触れた途端流れ出てきたモノは、

あか

あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあ朱あか
あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあか

あか赤あかあかかあ朱あかあかあかあかあかあか朱あか赤あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあ朱あか赤あかあかかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあか赤あかあかかあかあかあかあか朱あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあ朱あかあかあかあかかあか赤あかあか朱あか赤あかあかかあか赤あかあか

「グ…ぇ……アぅ……・」

いやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ

いやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダあはははっはははははははあはははははああああははははははあはははははははははっはははあははっはあはははははははははははっはははははははははあっははっははあははははっははあはっははっはははははあはあはあはははははははあはああははああはあああははあはっっはああああはああっっはああはあっはああははあはははっはははははははあはははははああああははははははははあはははははははははっはははあははっはあはははははははははははははっはははあははっははははっははあはははははははははははははははっははははははははあっははっははあははははははははあはああはああはあああははあははっっはああああはああっっははあはああはあっはああはははっはははははははあはははははああああははははははあはははははははははっはははあははっはあはははははははははははっははははははははあっははっははあはははははっははあはっははっはははははあはあはあははははははははあはああははああはあああははあはっっはああああはああっっはああはあっはあ

みんなが「なにか」いっているのがきこえる

めのまえの朱がまあるくオチテそこからみどりの根がトンデ青がのぼった

……そうか、ぼくはけっきょく

＊＊＊＊＊＊なんだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：ラウラ

「グ…ぇ……アぅ……・」

ＩＳに触れ、装着された途端、いきなりミトキが苦しみ出したのを見て、それを見ていた人々は騒ぎ始めた。

しかし、騒ぐだけで誰も近寄る人はいない。

ミトキから発せられる雰囲気が、あまりにも異常（狂気じみていた）だったからだ。

眼の焦点は全くあっておらず、息も荒い。

そして、何よりも小声で発せられている言葉があまりにも狂っていた。

不意に、そんなミトキの姿が自分に重なった。

周りからは奇異の目で見られ、誰も近寄ることのない、その姿が。

そうか、この人も『ヒトリ』なんだな、と。

そう、思ってしまった。

なら、助けてあげなければ。

どうせ、周りの皆は助けようとはしない。私にそうした様に。

だから、これは偽善。

自分が彼を助けたら彼も自分のことを助けてくれるかもしれないという、そんな思考の結果。

そう自分に言い聞かせ、私は一歩を踏み出した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ｂｒｅａｋ　ｓｈｉｆｔ

壊れかけた自分の思考を引き戻したのは、小さな温かさだった。

その原因を探そうと目線を下に送ると、僕のことを抱きしめてくれる小さなラウラさんの姿。

抱きしめ方は、まるで壊れ物を扱うように。

不意に、自分がラウラさんを助けた時のことを思い出した。

４人ぐらいの暴漢に立ちむかおうとしていたその姿は、どこか諦めたような眼をしていた。

『どうせ助けは来ない』と。

結局、僕がラウラさんを助けたのは、ただの自己満足とか同情みたいなものだったのかもしれない。

でも、今度は僕がラウラさんに助けられた。

こんな狂ったような僕を。

……そのとき、僕はこの世界で初めて、心から温かいという感覚を実感できた。

第二話　僕が軍人になった流れとか（後書き）

感想・意見等お待ちしてます。

第三話　入隊初日（前書き）

今更になって一話の前書きに誤字を見つけるという致命的なミスｏｒｚ

相変わらず微妙な文章です。

第三話　入隊初日

§§§§§§§§§§§§§§§

「なあ」

「ん？」

「来週授業参観だよな」

「そうだね」

「面倒くせえよな、高校一年生にもなって何を親に見せるんだよ。どうにかなんないかね」

「今回で最後になるよ」

「は？高校二年生でもやる筈だろ？」

「いいから、来週を楽しみに待てばいいと思うよ」

?.?.?.?.?.まだ何も終わっていない時の一幕

§§§§§§§§§§

僕がＩＳを暴走させかけた事件から、二週間程経った。

事件後一応行った動作テストではＩＳを動かせたはいいものの、ドイツとしても僕としてもあのような事を毎回起こされたのではたまったものではないので、もう一度一週間かけて身体中を検査させられ、精神鑑定等々も受けた。

しかし、結果は『全く異常なし』。

原因が解らないのではどうしようもないので、結果あの時に僕を救ってくれたラウラさんが僕の監視役兼バディとして就くことが確定しただけになったらしい。ちなみに僕はラウラさんの補佐兼バディ。

そんなこんなで、実は今日がシュヴァルツェ・ハーゼでの初仕事だったりもする。ついでに今日から軍の宿舎へ正式に住むことになった。日本からの荷物の移動は全部やってくれたみたいで、とても有難い。今日は訓練だけらしいので、『初仕事』といってもそこまで感慨があるわけではない。検査終わってからずっと自主トレしてたし。

……一度、暇だったのでヴィークル使って自衛トラップだらけの軍施設の屋上飛び回った時はかなり驚かれたな……あれやった後

ラウラは『あれが入隊したての元民間人の動きだと？じゃあ私はなんだ！』とか軽く落ち込んでたし。研究者の人たちも『あのセキュリティ網を突破しただと？それが私たちの限界だと言うか！』とか頭を抱えてた。

あ、ちなみに『現時点で世界唯一の男性ＩＳ操縦者の監視役』という大役を任されたラウラは、周囲からも一目置かれる、というか手を出しにくい状態になり、イジメはなくなったらしい。「次は実力でも他の奴らを見返してやる」って気合を入れていた。その様子がかわいかったので、つい撫でてしまったら赤面して殴ってきた。まあ避けたけど。

そんな日の朝、ラウラさんと僕が朝食を食べていると。

「なあ」

「何、ラウラさん？」

「その『さん』付けは止めてくれないか？一応、今日から正式に私とお前はタッグを組むわけだからな」

「そうするのは別に構わないけど、ならその『お前』呼ばわりもやめてくれないかな、ラウラ」

「ふむ、別に良いだろう。ミトキ」

「あー、名字で呼ぶのはなるべくならやめてほしいんだけど……」

こっちの世界での両親の事を思い出すから。あの人達が最後に向けてきた目線は、紛れもなく『バケモノ』を見る目だった。そんなもの、誰も思い出したいとは思わないだろう。

「解った、レイ」

そんな僕の心境を察してくれたのか、ラウラは特に文句も言わず了承してくれた。

あの事件があってから、すごく、といえる訳でもないがラウラの僕に対する態度は他の人に対するそれよりも柔らかくなっていた。僕としても気軽に話しかけられるのはラウラだけなので、かなり有り難かったりもする。

「そういえばさ、ラウラ」

「なんだ？」

「今日の訓練内容って何なの？」

「簡単な基礎体力訓練だけだ、多分な。」

ついでに僕の紹介もする、とのこと。

隊員は全員女性らしい。まあＩＳ部隊なら当然だが

……ラウラも居るし、心が折れるような事もないだろう、たぶん。

＝＝＝＝＝＝

ついに来たよ、シュヴァルツェ・ハーゼでの自己紹介タイムが。

今やっと原作主人公の気持ちが解った気がしないでもない。

おかしいな、なんで女子が１０人程目の前に居るだけなのにこんな冷や汗が出るんだろう。

皆さん妙に目が怖いんですけど。『獲物を見る捕食者（性的な意味ｄ……ゲフンゲフン）』みたいな。

「えーと、今日からシュヴァルツェ・ハーゼに隊員が一人増えまし

た。彼は『世界唯一の男性ＩＳ操縦者』ですが、このことは機密事項に指定されてます。表向きの役職は『ラウラ・ボーデヴィッヒ隊員の専属機体整備担当兼アドバイザー』となってますので、その辺りの詳しい事情等は後でファイルを渡すので良く読んでおいて下さい。　……あ、ちなみに彼の詳細プロフィールが入っている当たりのファイルが一つだけ紛れ込んでｍ」

「何でそんな変なことするんですかクラリッサさん！？てかそのプロフィールに情報どこから持ってきたんですか！？後皆さん急に目つきを光らせないで！怖いからそれホントに怖いから！」

急に雰囲気を変え僕のプロフィールが書いていると思われる紙を取り出そうとするクラリッサさん（何と驚いたことにシュヴァルツェ・ハーゼの隊長らしい。性格に問題がありすぎる気がする）を全力で止める。

何かとっても先行きが不安なんだけど……

「冗談です」

本当か？それにしては目がマジだった気がするんだけど。

「では、御刻　礼衣さん。自己紹介をお願いします」

この雰囲気で自己紹介かい。余計やりにくくなったよ。
まあ仕方ないか。

「御刻　礼衣です。さっき『世界唯一の男性ＩＳ操縦者』とか凄そうな紹介をされましたが、偶然そんな特性が見つかっただけの一般人ですので、特にそこら辺は気にしなくていいですよ」

「一般人は普通軍施設の屋上を生身で飛び回れるのか……？」

……うぉいラウラ。僕を孤立させたいのかい？
ほら皆さん「はあ？」とか「そんな身体能力私たちでも持っていないわよ……？」とかドン引きしているし。

まあ、当然その後の訓練では僕の周りにラウラかクラリッサさん以外の人は居なかった訳で。
……転校デビューならぬ軍隊デビュー、失敗した気がするなぁ……。

＝＝＝＝＝＝＝＝

そんな悲しい訓練終了後。

僕はクラリッサさんに呼び出しを受けていた。

「何の要件でしょうか」

一応敬語を使った方がいいらしいのでそうする。

「宿舎の部屋が決まったのと、明日研究所の方でまた検査があります」

え、まだ検査するの？もう調べられる所なんて無いと思うんだけど。

「専用機のための適性調査をするそうです。一日で終わるらしいのでそんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

ああ、そういうことか。
やっぱりデータ取りのためには専用機は不可欠だろうし、どうせなら軍の『切り札』にしたいんだろう。

「そういうことなのでちゃんと忘れないように来てください。後、これが部屋の番号と認証用の身分証です。部屋番号は覚えたらすぐに破棄して下さい。これで連絡事項は以上です」

要は自分で行け、と言うことなのだろう。

仕方なく宿舎の指定された部屋の前に行くと、そこには何故か先客が居た。

「あれ、ラウラ？」

「ああ、レイか……」

あれ、何か落ち込んでる。

「何でそんな調子悪そうなの？」

聞いてみると、

「とりあえずこれを見ろ……」

と、部屋の扉に貼られてた紙を見せてきた。

そこには、

『５３号室　御刻　礼衣

ラウラ・ボーデウィッヒ

こんやは　おたのしみ　でしょうね　ｂｙクラリッサ』

クラリッサさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！！！！！！！

第三話　入隊初日（後書き）

クラリッサさん変態淑女化。

感想・意見等々待ってます。

第四話　朝にありそうなこと（ねーよ）（前書き）

戦闘シーンまであと少し。
やっとヴィークル使いまくれる。

あと８０００アクセスと１５００ユニーク突破しました。下手な文ですが読んで頂き、本当にありがとうございます。

第四話　朝にありそうなこと（ねーよ）

§§§§§§§§§§§§§§

「本当に＊るのかい？」

「うん、そのつもりだけど」

「『＊られる前に＊る』なんて愚鈍で理想的な方法、君はやらないと予想していたんだけどな」

「それだけ追い詰められてるってことさ。失望した？」

「まさか。むしろ興味をそそられるよ。これだから人間は面白い」

「君も『一応』人間でしょ？何いってるんだか」

「何百回も『転生』してると、どうしようもなく暇になる物だよ。終いには僕みたいな『観察者（人外）』になるのがオチさ。」

『そんなものなのかな』

『そんなものさ、転生者（イレギュラー）なんて』

――――僕と彼との下らない遊戯（暇潰し）の会話

§§§§§§§§§§

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：ラウラ

部屋の前に貼ってあった張り紙についてはレイと二人で見なかった事にして、もう遅いのでとっとと寝よう、という話になったのだが。

「ラウラ」

「何だ」

「なんで裸なの？僕の精神衛生上せめて前は隠して欲しいんだけど」

「だが断る」

何でレイの精神衛生に悪いのかが理解できん。

「あー、もうどうでもいいや。おやすみ」

む、流石に『どうでもいい扱い』されるのは心外だぞ。

反論しようにももうレイは寝てしまったようなので、仕方無く私も寝ることにする。

ーーーーーーーー

布団の中で考えていたのだが、私はレイに対し少し思い違いをしていたのかもしれない。

というのも、ここ二週間で気がついたのだが、レイが私を見る視線は同類を見るような同情の目だけではなく、どこか『私にあってレイのは喪われてしまったナニカ』を羨み、私のそれを守ろうとする決意みたいなものが見え隠れしていた。

その『ナニカ』の正体だが、私の知る限りではレイの事を遠ざけた両親に関してぐらいしか思い浮かばない。しかし、私はそもそも両親がいないし、その事に関しては隠す必要もないのでレイには前に話してある。よって違う。

……そういえば、私が試験管ベビーであると言ったとき、レイは蔑む事なんてせずに『ラウラさんはラウラさんなんだから特に気にしないよ』と言ってくれた。ちょっと嬉しかった気もす・・・げふんげふん。

まあ、その『ナニカ』の正体は全く解らないが、『レイの心の闇は私よりももっと深い』という事だけは感じ取れた。
その上で私に気を遣ってくれているのだから、レイには感謝してもしきれない。

……私が、少しでもレイの心を癒せるのなら、してやらんとな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ｂｒｅａｋ　ｓｈｉｆｔ

朝が来た。

『ヴィーグル』を使えば意識のオンオフは割と容易なため、起きた直後でも頭ははっきりしている。

「……あれ」

ふと隣のベッドを見ると、ラウラはもう居ない。

もう朝食を食べに行ってしまったのだろうか、と思い、自分も急いで準備しようと布団から起き上がると。

「なんでここにいるのさ！？」

「ふぁ……？」

僕の布団の中にラウラが居ました。
しかも寝る前と同じ格好、つまり全裸で。
自分の顔が赤面していくのが解るので、『ヴィークル』に乗って急いで心拍数を調整。
急いで『足』と『手』を『動かし』、急いでベッドの上から降りたところで『身体』を『捻り』ラウラの方向へ向ける。
これで一安心だと思ったら、

「あ、れいだ～」

ラウラが素早い動きで抱きついてきた。
何とかして抜け出そうとするが、全く身動きがとれない。
どうすればいいのか迷っていると、

ガチャ。

「礼衣さん、そろそろ検査ですので急いだ方が……あ」

あ。

「おっと失礼しました。それではごゆっくり～」

バタン。

「クラリッサさぁぁぁん！誤解ですってぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

＝＝＝＝＝＝＝

「すまなかった」

朝食を食べに食堂へ歩く最中、やっと頭が起きたらしいラウラは謝ってきた。

「いや寝ぼけただけだろうし別に気にしてないけどさ、なんで僕の布団に入ってたの？」

「それが解らんのだ」

「いや解らないってどういうことさ。まさか寝ぼけたとか言わないよね？」

「レイが私を自分のベッドにに連れ込んだのでは無ければ、寝ぼけたぐらいしか可能性が無いのだが」

「マジですか」

まあいいけど。

「そういえば、レイも今日適正検査なんだろう？」

「うん、そうだけど・・・ってレイ『も』って事は、ラウラも検査するの？」

というかまだ専用機無かったのか。

「そのようだ、仮にもレイは私の専属機体整備担当と言うことになっているからな。専用機がないと怪しまれる」

ああ、そういうことか。

その後も他愛のない雑談を二人でしながら朝食を取り、施設内のＩＳ専門研究所に一緒に行った。

……なんかその様子を見た一部から「新入りの御刻　礼衣隊員

とラウラ・ボーデウィッヒ隊員が恋仲である」なんて噂が流れ始めたらしい。余り悪い気はしないけd……げふんげふん。

そんなこんなで検査会場。

僕もラウラも身体検査等々は終わっているので、何を検査するのかと話を聞いたところ。

「あ、戦闘傾向のデータ取るからとりあえず二人でテスト専用機使って戦ってみて」

……はぁ？

第四話　朝にありそうなこと（ねーよ）（後書き）

戦闘まで行けなかった・・・・・orz
ヴィークルの機能ってあんな感じで良かったんでしたっけ？

感想等々お待ちしてます。
後、もしかしたら明日と23日は投稿できないかもしれません。
詳しくは活動報告にて。

第五話　模擬戦前（前書き）

戦闘入れなかったｏｒｚ
焦って書いてしまった。

第五話　模擬戦前

§§§§§§§§§§§§§§§

「ねえ」

「何だい？」

「君は何故いつもここにいるの？学校は？」

「転生する度何回も同じ内容の授業を受けるのは苦痛だと思わないかい？それなら外で暇を潰した方がよっぽど有意義だ」

「そんなものなのかな」

「そんなものだよ、ボクの人生なんて。君も転生すれば解ると思うよ？」

「いや、遠慮しとくよ。何か大変そうだし」

「それは残念」

――――僕と彼とのいつかの会話

§§§§§§§§§§§§

「では、模擬戦のルールを説明します」

ろくに文句も言えないまま、ラウラと模擬戦をする事になってしまった。まあデータを取っていないものといえばこれぐらいしかないので、仕方ないのだが。

「シールドエネルギーの初期値は両者共に６００、武装は適当に詰め込……格納領域に様々な種類のものが入っているので、自分で自由に」

「今絶対に『適当に詰め込んだ』って言いかけましたよねぇ！？」

「気のせいです」

嘘だ。

「気のせいだろう」

え、ラウラには聞こえてなかったの？もしかして幻聴だったのか？

「あとデータの収集がメインですので、なるべく激しい戦闘は控えてください。質問はありますか？」

「「いえ」」

ラウラとハモった。割と嬉しい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そんなわけで模擬戦である。今現在、僕は知らないうちに用意されていた僕専用のＩＳスーツを着て、ドイツ軍がチューンしたラファール（なんか全体的に色が黒い以外は見た目に違いがない）を装備している。

そして目の前には今日の模擬戦の対戦相手であるラウラが、緊張した面持ちで同じ型のラファールに身を包んでいる。

「それでは、４０秒後にブザーが鳴ったら戦闘を開始してください」

オープンチャンネルでのアナウンスが入ったので、僕も『ヴィークル』に乗り、戦闘準備を整えることにした。

ちなみに僕の『ヴィークル』の操縦席は、いつもは初代ガ○ダムのコックピットみたいな感じである。しかし、ＩＳに乗った時はア○ックスみたいな全天周リニアシートみたいな形状に変化する。どうやら『ヴィークル』側でＩＳのシステム関連をうまくシームレス化しているらしく、ハイパーセンサー内で認識している範囲もちゃんと可視化してくれるみたいだ。

ほかにも、『武装一覧』を呼び出してそのまま武器をコールしたり、シールドエネルギーや各武器の残弾数、ＩＳの損傷箇所・損傷レベル等も『ヴィークル』から簡単に確認できる。

悪くなった点と言えば、ＩＳ側の生体補助機能のせいで一部の体内物質の分泌量が全く調整できなくなってしまった事ぐらいだろう。

以上前の動作テストで確認したこと終わり。

『ヴィークル』の展開が終わり次第速攻で『条件反射』のパネルを開く。

生体時計と照らし合わせながら、ちょうど試合開始と同時になり次第『マシンガン』をコールして、右に移動しつつ『ラウラ』（目標）にオートで照準を合わせ発砲できるようにプログラムする。

プログラミングが終了し、開始まであと１５．１９２５秒となったとき、ラウラの方から通信が来た。

「レイ」

さすがに返答しないのはまずいので『声』を発する。

「なに、ラウラ？」

開始まであと7秒。

「本気で行く」

あと4秒。

「奇遇だね、僕も同じことを思っていたよ」

2秒。

1。

「「それでは、始めよう（か）」」

戦闘が、始まった――――――

第五話　模擬戦前（後書き）

感想お待ちしてます。

追記

誤字見つけたｏｒｚ
修正しました。

第六話　模擬戦（前書き）

やっと戦闘入りました。
かなりテンポ悪いです。

第六話　模擬戦

§§§§§§§§§§§§

『平和は犠牲の上に成り立っている』という言葉は、皆さんも時々耳にする事があるだろう。
無論、日本人のほとんどは『平和』の側に生活している。

さて、その『平和』の中で生きている人の中で、見ず知らずの『犠牲』側の人間をいつも気にして生きている人はどれ程いるだろうか。

……恐らくは極少数しかいないだろう。自分の身の回りにそんな人間がいたら、まず偽善者（嘘つき）だと思っていい。本来そんな事をしていたら、直ぐに精神が狂ってしまう。

その点で彼は非常に不幸だ。なにせ嫌が応にもその存在を知覚しなければいけない所に、自分の平和の下にいる『犠牲』がいたのだから。

……さて、彼はどんな選択をするのか。自分の立場上干渉しにくいのがもどかしいが、これから非常に楽しく（暇潰しに）なるだろう。

――――――――――ある人物の日記から

§§§§§§§§§§§§

戦闘開始と同時に、さっき組んだ『条件反射（プログラム）』が作動。大きく右に移動しながら、ラウラに向けマシンガンを乱射。
だが流石に向こうも訓練を受けた軍人である。一瞬こちらの攻撃の早さに驚いたようだが、直ぐに持ち直し被弾を最小限に抑える。そして直ぐにマシンガンで応戦。

少し被弾しながらも回避したのだが、ここで大きな問題が発生した。

「（思考加速も使えないのか、まずいな……）」

『ヴィークル』の機能である、思考の高速化が出来ないのだ。多分ＩＳの生体補助機能辺りと干渉したのか、全く稼働しない。
当然それがなくても動く事はできるのだが、さらに悪いことにＩＳと『ヴィークル』の間に僅かな反応の遅延があるせいで、動作のコントロールが難しい。

そのせいで回避した後も更に被弾してしまい、シールドエネルギーがじわじわ削れていく。

仕方ないので『ヴィークル』でラウラの武器の向きから弾道を予測、可視化してそれを頼りに回避、攻撃を繰り返す。

しかし、それでもすべて避けきれない。

何か策はないかと『武装一覧』を呼び出すと、一つの案が思い浮かんだ。

直ぐに右手にスナイパーライフル、左手にブレードをコール。

「レイ、ふざけているのか？」

「こうでもしないと勝てないと思って、ね――――――――！」

「なっ！？」

ブレードを前方に突きだしながら加速。

流石にこんな単純な攻撃をすると思っていなかったのか、ラウラは焦ってブレードを呼び出し応戦しようとする。しかし、

「甘いよ」

ラウラがブレードを構えるのを確認し次第、僕は右手のスナイパーライフルを構え、ラウラ（目標）に発砲。

ラウラのシールドを削っていく。

「不意討ちとは、やってくれるな……」

そう言ったラウラが構えたのは、大型の荷電粒子砲。おいこっちに

はそんなの入ってなかったぞ。

とは言えあれに当たるのは不味いので、射線予測で急いで回避。

しかし、その先にいたのは。

「ラウラ！？」

「さっきの甘いという言葉、そのまま返させてもらう」

いつの間にか移動し、ブレードを構えたラウラだった。急いで回避しようにも、ＩＳの反応が遅いせいで移動できない。

仕方ないので左手のブレードで受け止めるが、押しきられそうになる。

急いで右手のスナイパーライフルを構え、照準を適当に合わせ発射。

当てることはできなかったが、体を離すことには成功したので、急いで体勢を整える。

「よくかわしたな、レイ。それが本当につい最近まで民間人だった奴の動きか？」

「誉めてくれてるのかな、それは」

「そうだが？」

「それは嬉しいな、だけど――――」

「「容赦はしない」」

二人の言葉が重なると同時に、僕はラウラに向かって突っ込み――

――――

「あ、データ採れたんでもういいですよ～」

ガタン。

「「はぁ……？」」

――――――――研究者（バカ）の介入によってＩＳが停止したせいで、唐突に試合は終わってしまった。

＝＝＝＝＝＝＝

そんな戦闘終了後、まず二人でやった事は研究者（大バカ）をぶっ飛ばす事だった。

そいつは「すいませんほんの出来心だったんですゆるしてくだｓギィァァァァァ」何て断末魔をあげていたが、そんなもの僕らの知ったことではない。真剣な戦いを邪魔した罪は重いのだ。

その後、ほかの研究者に個人的な要望（反応の遅さとか思考加速の事とか）を伝え、ラウラと一緒に宿舎に帰ることにした。

「ラウラ」

「何だ」

「さっきの勝負、いつか決着つけよう」

「そうだな、私もあんな結末では納得できん」

そう言って笑うラウラ。かわいい。

なでなで。

「ふにゃっ!?……な、撫でるなぁ！」

「あはは」

顔を真っ赤にして殴って来たので、僕はラウラに捕まらない程度にゆっくり逃げることにした。

……一方、その様子を見た他の人たちは。

「なにこの甘い雰囲気」と思ったそうな。

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：　ドイツ軍研究者のみなさん

「あの男性操縦者の方からＩＳの反応が遅いと苦情が来た」

「何？あの実験機は専用機並みに反応が速いはずだが」

「ならどうすればいいんですか！？」

「仕方ないが、『アレ』を使うしかないか……（↑使いたいだけ）」

「『アレ』をやるとか、本気ですか？」

「なるべくなら避けたかったが、まあ仕方ない……（↑ほんとはすげーヤル気）。ＶＴシステムは開発放棄だ。あんなものをダラダラ作り続けるよりも、急いで『アレ』を完成させるぞ！」

「「「「「「了解です！！！！」」」」」」

彼らがＶＴシステムの開発を全力でスルーしてまで開発しようとしたもの、それは――――――――――

――――――――――ＡＭＳ（Ａｌｌｅｇｏｒｙ Ｍａｎｉｐｕｌａｔｅ Ｓｙｓｔｅｍ）である。

第六話　模擬戦（後書き）

弟から「ＡＣＦＡネタ入れようぜ」という毒電波を受信したのでＡＭＳ搭載フラグを建てました。でもこれ以上ＡＣＦＡネタを入れすぎるのはやめます。多分しつこくなるので。

ついでにＶＴシステムがどっか逝ってしまった気がするけど気にしません。

……ヴィークルとＡＭＳってかなり相性がいい気がする。

追記：一応用語解説（ｒａｖｅｎｗｏｏｄ．ｊｐ様より転載、一部改変）

Ａｌｌｅｇｏｒｙ　Ｍａｎｉｐｕｌａｔｅ　Ｓｙｓｔｅｍ【略称】：ＡＭＳ

脳と機械の制御装置を接続し、操作を思考によって行うという次世代型アーマード・コア（ネクスト）の制御方式。
機械と行う電気信号でのやり取りを正確に処理できなければならず、使いこなすには先天的な才能（ＡＭＳ適正）を必要とする。
接続者の適性が低い場合は非常に大きな負荷がかかり、脳や神経を損傷する可能性がある。元々は身体的欠損を補うための医療技術として研究されていたが、このために民生化できなかった。
その操作速度、精密性から次世代型アーマード・コア（ネクスト）の操縦方式として採用される。

この方式でない場合、ネクストの操縦には完全に連携できる数十人のチームが必要になるらしい。
稼動部分を簡略化したりすることで負荷は低くなるようである。逆に精密すぎたり稼働部位が多い装置ほど高いＡＭＳ適正を要求されるらしい。

ちなみに本作では、「ＡＭＳ適正自体は必要ないが、ＡＭＳ関連のシステムを構築するときには個人にあわせ一つ一つ作る必要がある」という設定にします。

閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』（前書き）

今日は部活で山に登ってるのでテストもかねて予約投稿。
今回はいつも本編の上に書いてるアレの少し長めバージョンです。

閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』

＝＝＝＝＝＝＝ｓｈｉｆｔ：　ｄｒｅａｍ

これは、僕がまだ狂う前のおはなし。

彼と初めて出会ったのは、高校の入学式があった帰り道、公園での事だった。

その頃の僕は『あの事』を理解してしまったせいでかなりショックを受けていた。

ただでさえ荒んだ視界の中、公園の彼に気がついたのは、全くの偶然だろう。

なにせ彼はただでさえ目立つ筈の銀髪で、更に公園の広場のど真ん中に立っていたにも関わらず、全くと言っていいほど存在感が無かったのだから。

そんな彼にぎょっとして立ち尽くしていると、彼がこちらに気が付いたのか、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

一瞬逃げようとも思ったが、別に逃げる必要性を感じなかったのでそのまま立ち止まる事にした。

彼は僕の目の前に立つと、

「いやはや、まさか気付かれるとはね」

と言いながら笑った。

「上手く気配を消したと思ったのだけれど」

「なぜ気配を消そうとしたの？」

「なに、ほんの酔狂さ。そうした方が僕の趣味がやり易いからね」

「趣味って？」

「世界の観察。長く生きていると、そのぐらいしか楽しく思える趣味が無くなるものでね。まあもっとも、これもあまり楽しいとは思えないけど」

「『長く生きてる』と言うには、君は若すぎると思うけど？典型的な中二病かい？」

「中二病とは失礼な。僕は転生者なんだよ」

「はいはい中二病乙」

……そうは言ったものの、その後の話を聞いているとそうは思えなくなってきた。

空想の出来事にしては、あまりにも内容が細かすぎる。

結局、

「解った、信じるよ」

と言わざるを得なくなるまでに。

僕が彼に降参した後、彼は

「さて、君の話を聞かせてくれないかい？」

と話を振ってきた。曰く、

「他人の話は、僕にとって最高の暇つぶしだからね」

らしい。

一瞬話そうか迷ったが、さっきの彼の話が本当なら彼に逆らっても

どうしようもないので、僕の話をすることにする。

＝＝＝＝＝＝＝

僕の話を聞いた後、彼は

「興味深いね、君の人生は」

と一言だけ感想（？）を言った。

「久々に面白い事を聞いたよ。ありがとう」

「僕の人生はそんな扱いか……」

まあいいけど。

「明日もここに来てくれないかい？その話の続きを見たい」

「えー……」

流石にそれは嫌だ。こっちの精神が持たない。

「僕なら君を救えると思うけど?」

「なんでそんなことを?」

「なに、暇つぶしさ」

そんな事を彼は言ったが、こちらとしてはなんでもいいからすがりたい気持ちではある。
本当に彼が転生者なら、人生経験も豊富だろう。

「なら解った、明日もここに来るよ」

それが、彼と僕の始まりだった?????????

＝＝＝＝＝＝＝＝dreamend

「起きろ、レイ」

「ああ、ごめん少し寝てた」

少しうたた寝していたら、心配そうな顔をしたラウラに起こされる。

「どうした?寝ながら泣いていたぞ?」

多分『まだ普通だった頃』の夢を見たからだろうか、僕は寝ている間に泣いていたみたいだ。
……思えば、あの頃は確かに辛かったし、幸せだったとは言い難いけど、まだ楽しかった。
そしてその日々さえも、もう戻らないのは解っている。

でも、

「ねえラウラ」

「何だ？」

「こんな壊れた僕でも、幸せに生きていけるのかな」

「当然だろう？レイはレイだ。自分の幸せを見つけられる筈だ。……まあ、何処かの本の受け売りだが」

「ありがとう。それでもすごく嬉しいよ」

？？？？？少しぐらいだったら、甘えてもいいよね。

閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』（後書き）

ちなみに作者はこれが投稿される頃に山頂にいます。

感想等お待ちしてます。

第七話　越界の瞳とＡＭＳ　（ドイツ軍変態研究者の本気）（前書き）

投稿遅れたーーー！ｏｒｚ

相変わらずの駄文ですが、皆さんからのアドバイスで少しはマシになってくるかなーと思っていたり。

本当にありがとうございます。

第七話　越界の瞳とＡＭＳ　（ドイツ軍変態研究者の本気）

§§§§§§§§§§

彼の人生の話は僕の暇を潰すには十分だった。
いや、本当に興味深いのは彼自身かもしれない。
なにせ、彼は自分の下にある『犠牲』に気が付いた上、その『犠牲』に無理矢理にでも手をさしのべようとしているのにも関わらず、自己の精神を非常に危ないところではあるが安定させつつある。

……その『犠牲』が本当に救いを求めているかなんて全く気にせず。

さて、彼がそのことに気がつき、心の安定が崩れたとき、彼はどんな行動をするかな？

非常に楽しみだ。

――――――ある人物の日記より抜粋

「――――――一夏、何をやっている？」

「おっと誰かと思ったら姉さんか。驚いたよ」

「さっきから後ろにいたんだがな。で、何をしていた？」

「いや、ただの中二病小説を書いていただけさ」

「おまえは何をやっているんだ……。まあいい、風呂が沸いたので先に入っているぞ」

「はいはい」

「――――――――――ふう。危うくバレる所だったよ。まさか『前世で見た面白いものについて色々と纏めてた』なんて言えないからね。さて、『彼』は今どんな様子かな……？」

§§§§§§§§§§

中途半端に終わってしまった模擬戦から二週間後。

僕らには特に何事もなく、クラリッサさんにからかわれながらも二人で訓練を続けていた。

ラウラは頑張って訓練をしていたおかげで、部隊内の成績ランクでは一番下から上位3分の1に入るまでになっていた。

ちなみにラウラが僕の布団に入ってきたのは最初のあの日だけで、翌日からはちゃんと別の布団で寝ていた。あいかわらず全裸ではあったが。

……僕？相変わらず孤立してますよ？
ちょっと訓練中張り切って本気出したりすると毎回ドン引きされますから。

そんな日が続いたの朝のこと。
僕とラウラは、

「……状況説明ぷりーず」

「面倒なのでイヤです」

起きたら何故かドイツ軍の研究部門に拘束されていた。

「いやいや明らかにおかしいでしょこれ。何で僕もラウラも何か手術台みたいなのに縛られて乗っけられてるんですか？」

「面倒なので以下略」

未だ寝ているラウラが羨ましい。一体どんな状況か誰か説明してくれよ……

「リーダーである私が説明しよう！」

「何か変なのキターー！」

いきなり白いマントとサングラス掛けて格好つけてる良く解らない女性（多分研究グループのリーダーらしい）が現れた。何で貴女そ

んなノリノリで登場したのとか何時からスタンバイしていたとかいろいろと聞く事はあるが、今の所説明してくれそうなのは彼女一人なので黙って話を聞くことにする。

……他の研究者の方々が『ああまたか』みたいなすっげー疲れきった顔してる。お疲れ様です。

「突然だが、君達には手術を受けてもらう！」

「本当に突然ですね」

というかテンションが高過ぎです、ラウラが起きるでしょうが。

「このテンションが素だ、よって下げる気もない！しかもボーデヴィッヒには事前に事情説明をした上で麻酔で眠らせてあるだけだ！」

「ならいいです」

なんか心読まれた事には突っ込まない。話が進まないし。

「さて肝心の魔改ｚ……手術の事だが」

「今絶対に魔改造って言いかけましたよね」

まあいいけど。

「まあ簡潔に言うと、君達の専用機のために必要なんだ」

「へー」

搭乗者に手術が必要なＩＳってどんなだよ。

「君は模擬戦の時、『反応が遅い』といったらしいな」

「ええ」

確かに言いましたけど。

「そこで私は考えた、『皮膚通しての通信が遅いなら、脳に配線組んで直接やりとりさせれば良くね？』と！」

「わぁいとてもマッドな考え」

てかそれ何かＡＣ４系のＡＭＳに似てないか？この世界にもＡＣシリーズ自体はあったし。

「ちなみに参考にした、というかぶっちゃけ丸パクリしたのはクラリッサから借りたこのゲームだ。まあ私にはゲームスピード（機体速度的な意味で）が速すぎて全然進められていないがな！」

「もしかしてゲーム下手？」

「うるさい黙れ気にしてるんだ私も！」

似てるとかそういうレベルじゃなくて、まんまＡＣＦＡでした。というか元凶は、相変わらず変態加減がメーター振り切ってるあの人（淑女）か。あんた何処へ行く気だよ。

「まあそういう訳で、君たちに処置を施す」

「別にいいですけど、具体的にはどんなことを？あと僕が了承した瞬間目がギラギラさせんの怖いのでやめて下さいホントマジ怖いんでお願いですから！」

まっどさいえんていすとって怖いね。

「チッ仕方ない……内容としてはＡＭＳ用の脳内回線を作るだけだ。あ、ついでに『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』も付けるか？ボーデヴィッヒの瞳をメンテするついでだ」

「どうせ断っても『手が勝手に動いた』とか言ってやるつもりでしょ……」

「当たり前だ」

いやそんな『キリッ』とかされても。

「と言うかメンテなんてできるんですか？」

「脳内回線を配線するときに、以前のタイプの『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』だと一部邪魔になる箇所があるからな。」

いいのかそれ。もう一回『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』を搭載し直すんでしょ？

「理論上は可能だからいいんだ。瞳の色は治せない上に、『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』が本来持っている機能を最大限使うこともできないが、少なくとも制御不能状態からは抜けられるだろう。ただし本当にそうなる

かは一切保証できないがな！」

「だめじゃん」

本当にこんな人にリーダー任せて大丈夫か？
ドイツ軍よく雇ったな。

「まあいい、とっとと始めるぞ。」

「いやちょっとまっｔ「問答無用だ」はい……」

結局無理矢理押し切られる形で麻酔をかけられ、僕は眠りに落ちた。

＝＝＝＝＝＝＝

手術が終わり、僕はベッドの上で目覚めた。
話を聞く限り、二人とも手術は成功。
ラウラの『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』も、一応機能回復はしたそうだ。
そして僕とラウラの首筋には、ＡＭＳ接続用の端子が埋め込まれた。
手術前にも少し疑問に感じていたので、なんでラウラにもＡＭＳ端子を付けたの、とあの人に聞いてみると、

「手が勝手に動いた」

とドヤ顔をしやがったので、とりあえず投げ飛ばすことにした。
まあ頭を色々いじられたのかもしれないけれど、僕もラウラも無事なので、まあいいかなと妥協することにする。

……専用機、楽しみだなあ。
ラウラともちゃんと戦いたいし。

第七話　越界の瞳とＡＭＳ　（ドイツ軍変態研究者の本気）（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしてます。

そして『彼』の原作介入フラグが立った気がしないでもない。

第八話　ある日の訓練風景・そのいち（前書き）

お気に入り件数１３０件突破、累計ＰＶ４００００超え＆累計ユニーク８０００超えですって。

……皆さん本当にありがとうございますｍ（＿＿）ｍ

第八話　ある日の訓練風景・そのいち

§§§§§§§§§§

『誰だ』

「もしもし、『僕』ですよ」

『ッ！貴様か、我がドイツ軍を――――』

「僕に対して何て口の聞き方なんだい。一応、僕の方が立場が上なんだけどな？」

『クッ……。それで、今回はどんなご用件（脅迫）で？』

「何、そんな大した事じゃないさ。君達、礼衣に強化手術、確かＡＭＳと何とかの瞳だっけ？やったんでしょ」

『行いましたが、それが何でしょう？』

「まさか、『それ以外』の事もやってないよね？」

『ッ！……は、はい。やっております』

「ま、ここで嘘ついてもすぐ解るんだけどね。一応釘を刺しとこうと思って。――――――折角預けてやっているんだ。僕の大親友（観察対象）を下手に傷つけるような事があったら、許サナイデスヨ？」

『ヒッ、り、了解しました！』

「それじゃあ、またいつか。

――――――全く、道化も楽じゃないよ。まあ、親友（観察対象）の安全を守れるなら、それでいいけど」

§§§§§§§§§§

僕とラウラは、手術後の療養期間も終わったので、また訓練に復帰していた。

ＡＭＳはまだ使う機会が無いので使っていないが、越界の瞳の調子は上々である。

……というか裸眼で一キロ先見えるとか、やっぱり凄い。

そして専用機については、あのよくわからん研究者が

「よっしゃ後は最終調整だけだぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！」

と施設の屋上から叫んでいるのを前に見かけたので、多分もう少しなんだろう。というか今更だけどあの人頭大丈夫か？

さて、そんなことはさておき、今日も訓練の日である。

今回の内容は余り乗り気でないのだが、来てしまった物は仕方ない。

その内容とは、

？？？？？？？？『格闘戦』である。

＝＝＝＝＝＝＝

「今回のメインはトーナメント制にして、残りの待機中の隊員達は試合中の人たちを見て学習することにしましょう」

訓練を始める前、クラリッサさんがそう言った。
まあ確かに、訓練方法としては妥当だろう。割と皆さん熟練の人たちだし、練習のしすぎで下手にけがをするよりも、集団行動の時に活かせるよう他の隊員の動きを見てクセを把握しておいたほうがいいだろうし。
まあそんなこんなでトーナメント表が表示されたのだが、

「なんで僕だけ孤立してるんですか」

何と僕は決勝戦まで出番が無かった。

「多分礼衣さんとまともな勝負ができるのはこの隊でも極少数でしょうし、なにより実戦でもないのに男性と戦うのはちょっと……みたいな人が多いので」

「なら仕方ないですね」

確かに、ＩＳが登場した今もＩＳ無しだったら男性が強いし、同じ隊とは言えとても親しい訳でもない男性に体を触られるのは嫌だろう。

そんな訳で、僕は出番が来るまで試合観戦をすることにする。

……ラウラ以外誰も話掛けてくれなかったのが、地味に悲しい。

＝＝＝＝＝＝＝

「やっと出番が来たぜヒャッホウ！」

「何かテンションがおかしくなってないか？」

おっとこれは失礼。

ラウラに指摘されたので、テンションを修正。対戦フィールドへ向かう。

ちなみにラウラは準決勝でクラリッサさんに負けた。まあ身長差利用されて攻撃されてたから仕方ないね。

ということで、僕の対戦相手はクラリッサさんである。

対戦ルールは簡単。『相手の背中を地面につけられたら勝ち』だ。

「では、両者準備して下さい」

そんな合図と共にフィールドとなっている草むらに二人で向かい合って立ち、開始のブザーが鳴るのを待つ。

その間に『ヴィーグル』を起動し、『条件反射』でブザーが鳴った瞬間に踏み込んで一撃を加えられるようにプログラム。

「礼衣さん」

「何でしょう？」

「あの……（男性との戦いは）初めてなので、優しくして下さいね？」

そこでその台詞を言うか。括弧内なかったら意味が凄い変わってくるんだけど。

多少心拍数が上がったので、急いで修正。

丁度ブザーが鳴ってくれたので、僕はクラリッサさんに向かって突っ込むことにした。

＝＝＝＝＝＝＝

「負けた……」

「まあ仕方ない、クラリッサ隊長は強いからな」

結構粘ったつもりだが、結局負けてしまった。
クラリッサさん曰く、

「けいけんちが　たりない！」

らしい。何故口調がＲＰＧ風なのかは知らない。
というかあの人の超人的な動きは何だ。一瞬ビーム見えたんだけど。

……ま、世の中には知らない方がいいこともあるし、全力でスルーするとしますか。

第八話　ある日の訓練風景・そのいち（後書き）

相変わらず短えｏｒｚ

ご意見・ご感想お待ちしてます。

あと土日の少なくとも片方は更新できないかもです。

第九話　専用機（前書き）

昨日は投稿できずすみませんでしたｏｒｚ
その代わり今日は文章量多めです。いろんな意味で。

第九話　専用機

§§§§§§§§§§§§§

ずずず。

「ふう……」

ずぞぞぞぞ。

「はふ……今日は平和だ。茶がうまい」

§§§§§§§§§§§§§

ある日の朝、訓練に行こうと部屋のドアを開けると。

「待たせたな！」

「……」

バタン。

「どうしたレイ、遅れるぞ？」

「いや、ちょっとね……」

言えない。『ドアを開けたら目の前にサングラスとマントを羽織った変態がいた』なんて、幻覚のはずだ……。

「？……まあいい、行くぞ」

ラウラが不思議そうな顔をしながら、ドアを開ける。

ガチャ。

「やらないか」

「……」

バタン。

どうやらラウラにもアレが見えたらしい。無言ながらも全力で目線を逸らしながら扉を閉めていた。

「なあ」

「何？」

「今見たものを全力でスルーしたいのだが、何かいい案はないか？」

「正直僕もそうしたいけど、案がない」

「ならこの私が提案してやろうか？」

おおそれは助か……って。

「どっから入ってきたんですか貴女」

気がついたら知らないうちに部屋に侵入されてた。

「勘だ」

まっどさいえんてぃすとって凄いね。

「後私の名前をいい加減覚えてくれ、寂しくて泣くぞ？」

絶対嘘でしょ。まあいいけど。

「解りましたよ……ヘルマさん」

「よろしい」

僕とラウラの目の前にいるサングラスの変態、ぶっちゃけ前に僕らを手術したこの女性の名前は『ヘルマ・ハルフォーフ』。早い話がクラリッサ変ｔ……隊長の母親である。

ただでさえ『変態』のクラリッサさん相手に話していても疲れるのに、その母親である『変態の中の変態』ヘルマさん相手だと最悪こちらが死ぬ。主に精神的に。

そのため、あまり長く話したくはないのだが。

丁度よく、ラウラが用件を聞く。

「で、ヘルマ。用件は何だ。まさか暇潰しではあるまい？」

「そのまさかだ」

えー。

「嘘だ」

「なあ、こいつ殴っていいか？いいよな？」

ラウラが額に青筋を浮かべる。

まあさすがに殴るのはまずい、というかこのままだと話が進まないので、用件を聞き直す。

「まあまあラウラ落ち着いて。で、本当の用件は何ですか？」

「仕方ない本題に戻るか。簡単に言うとだな……

お前らの専用機ができた」

「「おおー」」

何かこの事実を聞くのにとても時間が掛かった気がしないでもない。

＝＝＝＝＝＝＝

「よし、フォーマットとフィッティングは完了したな」

あの後僕とラウラはヘルマさんに連れられ、渡されたＩＳを装着した。
ちなみに僕が渡されたのは『シュヴァルツェア・ヴォルフ』という名前の機体。
全体のカラーリングとしては黒地に青のラインが走っており、背部には中心の大きなスラスターと４つのウイングスラスター、非固定浮遊部位には羽っぽい形の実弾シールドが付いている。体を委ねるところには当然ＡＭＳ端子。
主武器は大型プラズマ手刀『ゲファーレン』と遠～近全距離対応双発型プラズマライフル『ナフトフォーゲル』、そして１６本のワイヤーブレード、ついでにＡＩＣ。
何でワイヤーブレードがこんなに多いのかヘルマさんに聞いてみたところ、

『大丈夫だ、お前にＡＭＳ接続したらやれるっぽいぞ』

『ぽい』ってなんだ『ぽい』って。
あと、『思考加速』が出来るようにと、生体補助機能も切ったらしい。
……アレって確かＩＳのシステムの根幹辺りにあるんじゃなかったっけ、どうやったんだろ？
まあいいんだけど。あの人なら何やってもおかしくないし。

ラウラの機体は原作通り『シュヴァルツェア・レーゲン』だが、ワイヤーブレードが上記と同様の理由で１０本に増え、プラズマ手刀が大型の『ブルーム』になっている他、レールガンがレールガトリングガン『５．８．１．』になっている。エネルギー効率の方は一応大丈夫らしいが、ガトリングガンの制御にはＡＭＳが無いときつ

いらしい。

以上簡単な機体説明終了。

今回はフィッティングついでにラウラとの再戦もやるつもりだ。

ヘルマさんも、

「お前ら戦うんだろ？適当にやってみろ。私としても機体の出来を見たい」

と言ってくれたので、今回は最後までやれるっぽい。

やったねたえｔｙ「おいやめろ」また思考読まれた……だと……？

＝＝＝＝＝＝＝

二人でＩＳ訓練用の戦闘アリーナ上に静止。

待機中、『条件反射』のプログラムついでにラウラに話掛けることにする。

『ねえラウラ』

『何だ』

『機体の調子どう？』

『上々だ。そちらこそ大丈夫か？』

『こっちも万全だよ』

『そういえば、何で個人間秘匿通信で通話している？』

『試してみたかっただけ』

『……そうか』

ため息つかれた。まあ仕方ないか、僕もやりたかっただけだし。

「そろそろ始めるぞ。３０秒前」

ヘルマさんの声でカウントダウンが始まる。

それと同時に『条件反射』の項目の最終調整を始める。試合開始と同時に『ナフトフォーゲル』をコール、一気に距離を離しながら遠距離モードで狙撃できるようにセット……完了。

試合開始まで残り１０秒。

『じゃあ始める？』

『そうだな』

５，４，３，２，１……０

「「あのときの続きを」」

試合、開始。

ラウラが『５．８．１．』を構えて撃ってくるが、初撃だけはあっ

たたものの急いで後ろに下がることで残りは回避。

十分距離を取ったら『ナフトフォーゲル』を遠距離モードにセットし、狙撃？？？？？？ヒット。
追撃はせずに、大きく左へ移動。
ラウラが『５．８．１．』で応戦してきたが、これなら回避できると予想。
しかし、

「予想以上に弾速が速いね……」

「ああ、私も驚いた」

いくらガトリングガンとはいえ、レールガンである。
普通のガトリングガンとは比べものにならないほど弾速が早い上、一撃の威力も高く、射程も長い。
仕方ないので『ナフトフォーゲル』を連射モードにしながら発射、ラウラに急速接近
『５．８．１．』での攻撃を受けるが、思考加速で体感時間を延長、回避できるだけ回避し、残りはシールドで防御。
すれ違いざまにワイヤーブレードで攻撃を仕掛けた後、一気に離脱する。

ラウラも負けじとスラスターの出力を上げ、一気に接近してきた。
急いでワイヤーブレードを４つほど出し攻撃を加えようとするが、ラウラもワイヤーブレードで応戦。全て防がれる。

「その程度か？レイ」

「んー、じゃあこれならどう？」

ワイヤーブレードを１６本全て射出。そのうち６本をラウラの後ろに回り込ませる。
ラウラも応戦しようとするが、ワイヤーブレードの本数が足りないため、一部を『ブルーム』で応戦。するが、対応しきれずだんだんと僕の方に近づいてくる。

ラウラの距離が十分近づいた瞬間、ＡＩＣを発動。ラウラの動きを縛る。

「なっ…聞いていたがこれほどまでとは……」

「やっぱり全然動けない？」

「ああ」

やっぱりつよいねＡＩＣ。
とはいえラウラの動きを縛ることが出来たので、このまま『ナフトフォーゲル』を近距離モードにセット、発砲。
ラウラのシールドエネルギーを５分の４程削り、このまま勝てるかなーとか思ったその瞬間、

「あれ、動けない」

「当たり前だ、私が掛けたのだからな」

ラウラにＡＩＣを掛けられた。
そして僕が一瞬集中を切らした瞬間、ラウラは『５．８．１．』を構え発砲。

こちらのシールドエネルギーを大きく削っていく。
何とかしてワイヤーブレードを射出、攻撃し、シールドエネルギーが0になる前にＡＩＣから抜けられた。
埒があかないので『ゲファーレン』をコール、そのままラウラの懐へ突っ込む。
「くっ！？」
「これで、決める？？？？！」
ラウラが急いで『ブルーム』を展開したのが見えた瞬間、
世界が、白く変わった？？？？？？？？？？？？？
＝＝＝＝＝＝＝ｗｏｒｌｄｓｈｉｆｔ
「……あれ？」
「ここは何処だ？」
戦闘中だったはずの僕とラウラは、何故かよくわからない白い空間にいた。
しかし、全てが白い訳ではなく、所々に本が散らばっている。
「この本は何だ？」

「何だろうね？見当が付かない」

まあ立ち止まっていてもどうしようもないので、二人で本を取ってみると。

「これ、ラウラの名前が書いてある」

「これはレイの名前が書いてあるな」

二人で互いのぱらぱら捲ってみると、その中にはそれぞれの相手が過ごした今までの人生が書かれていた。

ラウラの人生は、実験施設で生まれて兵士としての教育しか受けなかった人生。

僕の人生は、学校で人を＊し、その後この世界に来た人生。

「ねえラウラ」

「何だ」

「ここに書いてあることは本当？」

「そうだが、それはレイもなのか？」

「？？？？うん、そうだけど」

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：ラウラ

レイの人生は酷い物だった。

守ろうとした物を守れず、最終手段として殺しを働いた。
そして死ぬ間際、守ろうとした物に裏切られ、絶望の中殺されこの世界に流されて来た。
今まで誰も気がついてやれなかったレイのそんな暗い感情。

もしかしたら、私は少しおかしいのかもしれない。

だって、レイの心のどす黒い闇を見てしまったにも関わらず彼を受け入れようと思えるほどに、彼を好きになっていたのだから。

始まりは助けて貰ったときから。

そして私の生い立ちの事を話したときも、レイは特に何も言わず受け入れた。
私の訓練中にさりげなくサポートしてくれたのもレイである。

だから、レイが

「どう思った?僕の人生」

と言った時も、

「特に気にしないぞ？レイはレイだからな」

と答えられた。

彼の心を、少しでも軽くするために。

＝＝＝＝＝＝＝＝ｂｒｅａｋ　ｓｈｉｆｔ

「特に気にしないぞ？レイはレイだからな」

そう言われたとき、僕はとても驚いた。

てっきり、こんな屑みたいな人生を送ってきた僕を軽蔑するかと思っていたからだ。

そんな一言で大げさななんて思うかもしれないけれど、僕としてはとても嬉しかった。

そして、好きになってしまった。

こんな僕を受け入れてくれたラウラを。

＝＝＝＝＝＝　ｉｎｎｅｒ　ｐｓｙｃｈｏｌｏｇｉｃａｌ　ｗｏｒｌｄ：　ｅｎｄ

試合終了を告げるブザーの音で、僕らは元の世界に戻った。

結果はラウラの勝ち。

ギリギリで『ブルーム』が当たる方が早かったらしい。

戦闘後はそのまま宿舎に帰り、その日は休むことにした。

「あーあ、負けた」

「私もギリギリだったけどな」

「それでも、負けは負けでしょ。あ、ラウラが勝ったんだし、何か一つぐらいだったらお願い聞くよ？」

「なんでもいいのか？まずそんな約束はしてないが」

「いや、僕の出来る範囲だったらいいかなー、なんて思って」

「そうか、なら？？？？？？？？」

ラウラは僕に抱きつき、

「好きだ」

急に告白をしてきた。

だけど、

？？？？？？？？？？？？？そう言われたら、受け入れるしか無いじゃないか。

第九話　専用機（後書き）

相変わらずの急展開＆駄文クオリティ。
あまり成長しない作者をお許し下さい。
しかも次からかなり時間飛びそうです。具体的には中三のモンドグロッソ辺りまで。

……モンドグロッソって夏開催でしたっけ？あれ？

感想お待ちしてます。

補足：礼衣とラウラが飛ばされた白い空間について
一応はＩＳの特殊相互意識干渉により形成された世界と言う設定です。
「『相互意識干渉』なんだから二人の意識によって構成のされ方って変わるんじゃね？」みたいに思ったのでこうしました。

第十話　再会（前書き）

安定の急展開。
そして短い。

第十話　再会

§§§§§§§§§§§§§

「姉さん」

『何だ』

「ごめん、急用が入って決勝見に行けないかも」

『学校の用事か？』

「うん、同好会の用事があって。次は絶対見るから、本当にごめん」

『解った。次は絶対に来いよ』

「うん、じゃあまたね」

――――――という訳で、今年は決勝を見に行く羽目になった。
やはり誘拐のイベントは不可避なのだろうか。

……何か対策を練らなければ。

§§§§§§§§§§

さて、１４歳の冬である。
……え、何か時期が飛んでないかって？気のせいだ。

というかラウラが隊長になって僕が隊長補佐になった以外は大きなイベントが無いんだよな……
あ、ラウラとは恋仲になったけど、キスとかしようすると他の隊員にその都度見つけられるせいであまりそっち系の関係は進展していない。クラリッサさん爆発しろ。

まあそんなことがあって、今僕とラウラは『第二回モンド・グロッソの視察』という名目で日本にいる。
出発するときにクラリッサさん始め他の隊員から

「和菓子買ってきて」

「ラノベ欲しい」

「同人誌ぃぃぃぃぃぃぃぃーーーーーー！」

などいろいろ言われたが、面倒なので全スルー。
他にはヘルマさんから、

「どうせお前らいちゃついて来るんだろ？爆発しろ」

とありがたいお言葉をいただいたので、お礼としてラウラと二人で空の向こうへかっ飛ばしてあげた。

……さて、なぜ僕がこんな現実逃避をしているかというと。

「やあやあ久しぶりじゃないか。15年とかそのぐらいかな？」

モンド・グロッソの会場へ電車で移動中、僕らの目の前に突如『彼』が現れたからである。

全く状況が読めない。というか前もこんな流れあった気がするぞおい。

ちなみにラウラは僕の肩に頭を預けながら寝ている。かわいい。

まあラウラの可愛さで現実逃避していてもどうしようもないので、仕方なく話し掛ける事にする。

「いきなり出てきて来ないでくれないかな、＊＊。驚くじゃないか、まさか君も転生してるなんて」

「その割には落ち着いている様に見えるのは僕の気のせいかい？後この世界での僕の名前は織斑一夏だから、前世の名前では呼ばないでほしい。紛らわしいからね」

これでも十分驚いているんつもりだけど。

って、

「織斑一夏って、まさか」

「そのまさかさ、どうやら僕はこの世界の主人公らしい。全く、困った物だよ」

「君は人間観察が趣味なんだろ？むしろ主人公なんておいしい立ち位置、普通は喜ぶんじゃない？」

「その代わりに面倒が多すぎるんだよ、今回のことみたいにね」

ああ、そういえば『彼』は面倒事が嫌いなんだった。
前世でも僕をさんざんパシってたし。
あー、嫌な予感しかしない。『彼』がこんな雰囲気の時は、絶対に何か僕に頼むつもりだ。

「どうせまた面倒事の解決を僕にさせるんでしょ？」

「当たり前。で、内容は――――――――――――――

僕の護衛、ついでに誘拐犯の殲滅だ」

第十話　再会（後書き）

『彼』、介入。

あ、明日は人物＆ＩＳ紹介のみ上げます。
Ｊｕｂｅａｔでマチラン選択しまくる作業があるので。

……ダメ人間とか言わないでｏｒｚ

人物＆ＩＳ設定ｖ０．３１（前書き）

人物＆ＩＳ設定上げました。
多分これからも追記されます。
訳わかんなくなったときにでもどうぞ。

１２／３追記
あ、バージョン表記変わったら追記されてますので。

人物＆ＩＳ設定ｖ０．３１

人物紹介

御刻　礼衣（ミトキ　レイ）
性別：男
身長：１７３ｃｍぐらい
転生者かつ主人公。チート能力は『ヴィークル』。
髪の色は濃い灰色、眼の色は茶色。眼帯は左に着けている。
『シュヴァルツェ・ハーゼ』隊長補佐（名目上はラウラの専属機体整備担当兼アドバイザー）。
前世で通っていた学校で殺人事件を起こし、その後殺されてからＩＳの世界に来た。
上記の事件の影響で精神的に不安定な面もあり、多少感情の流れが乏しい。
ラウラに自分の事を理解し、理解してもらってからはラウラと恋仲に。
『彼』とは前世からの友人。
ネット上のＨＮは「零」。

ラウラ・ボーデヴィッヒ
性別：女
身長：１４８ｃｍ
ヒロイン。チート能力は無し。
原作との相違点は、
・１３～１４歳の時点で既に実力をつけ、『シュヴァルツェ・ハーゼ』の隊長に
・礼衣と恋仲
・越界の瞳の機能が一部回復

等。

織斑　一夏（＝『彼』）

性別：男

身長：１７８ｃｍ

転生者。チート能力は『他人の能力の完全なコピー』。

いろんな人たちのチート能力をコピーしているため、色々とパネェ事になっているらしい。

未確定情報だが、自身の記憶を別の所に保存している可能性も。

何百回と転生した影響で暇を持て余し、人間観察を趣味とし始める。

前世で礼衣に興味を持ち始め、礼衣が転生したことで更に興味を持つことになった。

前世での事件の一因はコイツ。

それに多少は責任を感じているせいかは解らないが、転生後のこの世界では礼衣を裏でいろいろサポートしている。

ネトゲ『ドリームフロウオンライン』のクラン『同好会』のマスター。

ネット上でのＨＮは「Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ」、呼称は「クラマス」「マスター」「Ｏ様」など。

ヘルマ・ハルフォーフ

性別：女

身長：１６５ｃｍ

変態。ついでに研究者。

クラリッサ・ハルフォーフの母親であることからも解るように、かなりの変態である。

しかし裏では、ラウラが以前に比べ態度が柔らかくなった事を純粋に喜んだりするような一面も。でもやっぱり変態。と言うかただの裏設定なだけなので全く本編には関係しない。というか裏設定なら

なぜ書いたし作者。
礼衣たちの専用機を魔改造したのはコイツ。
娘のクラリッサと良くつるんで訓練という名の悪ふざけをよくやっている。母娘仲は良好。

更識　簪
性別：女
一夏ヒロイン。
ちょっと壊れ気味で、自分のマイナス要因を全く考えずプラス要因を追い求める傾向がある。
ネット上でのＨＮは「ＫＮＺＳ．ＳＳ」。

ＩＳ紹介

シュヴァルツェア・ヴォルフ

御刻　礼衣の専用機。他のシュヴァルツェアシリーズと同様に黒をベースとしたカラーリングになっており、所々に青いラインが走っている。
ウイングスラスターを多数搭載しており、これにより時速１５００ｋｍ／ｈオーバーの超高速機動が（一応）可能。
非固定浮遊部位には羽の形を模した実弾シールドがついている。
操作方法にドイツ軍独自開発のＡＭＳを使用しているため、御刻　礼衣以外の人間が乗ろうとしてもＡＭＳ関連で拒絶反応が起きる。
さらに、御刻　礼衣の『ヴィークル』の能力と一部干渉したために

ＩＳの本来の機能である生体補助機能を撤廃。これとＡＭＳの影響で、御刻　礼衣以外が乗ることはほぼ不可能に近い。

オリ武装情報

遠～近全距離対応双発型プラズマライフル『ナフトフォーゲル』
モード切り替えにより、遠～近全距離へ対応できるようにしたプラズマライフル。
なぜ双発型なのかと言うと、ヘルマ・ハルフォーフが「そっちの方がかっこいいじゃん」と指示したため。

大型プラズマ手刀『ゲファーレン』
プラズマ手刀の大型版。なぜ大きくなったかというと、ヘルマ・ハルフォーフが以下略。

シュヴァルツェア・レーゲン

ラウラの専用機。
外観には大きな変更は無いが、主な操作方法がＡＭＳに変更されている。

オリ武装情報

レールガトリングガン『５．８．１．』
「レールガンをガトリングにしたら強いんじゃね？」というヘルマ・ハルフォーフの思いつきの元作成。
威力・弾速・射程・集弾性能共に申し分ないが、ＡＭＳによる制御

が必須。

大型プラズマ手刀『ブルーム』
プラズマ手刀の大型版。なぜ大きくなったかというと、ヘルマ以下略。
『ゲファーレン』と違い、手刀の大きさが調整可能。

シュヴァルツェア・ツヴァイク

クラリッサの専用機。
外観は大体レーゲンと同じだが、多少外観がぶっとい。

オリ武装情報

連射型プラズマカノン『エコーズ』
『プラズマカノンを連射式にしたら強いんじゃね？』というヘルマ・ハルｆ（ｒｙ
一発辺りの威力は低めだが、連射速度が地味に速い。
ＡＭＳ制御必須。

大型プラズマブレード『プルート』
ついにプラズマ手刀がブレード化。
と言うか外観がまんまＡＣｆａのＭＯＯＮＬＩＧＨＴ。
犯人は言わずもがな。

人物＆ＩＳ設定ｖ０．３１（後書き）

礼衣・ラウラの両ＩＳに関して言えること。

だいたいヘルマのせい。

あと武器名はＢＥＭＡＮＩの楽曲名を参考にしていたり。

『５．８．１．』とかほぼまんま。

第十一話　護衛ミッション・1（前書き）

どうも、昨日.ｊｕｂｅａｔに１０００円ほど貢いだにも関わらず欲しかった曲を手に入れられなかった偽桜です。

アクセス数見てみたら５００００ＰＶ突破してました。ありがとうございます。

１０万ＰＶ突破したら何かやるべきだろうか……。

第十一話　護衛ミッション・1

さて、『彼』こと一夏に護衛を頼まれた訳である。
一応軍の方に確認を取った所、

『お願いだから受けといてくれ。いやマジで』

と何故かお偉いさんからも泣きつかれたので、結局受けることにした。

「……ねえ」

「何だい？」

「もしかして、うちの軍脅していたりする？」

「さあ？見に覚えがないな」

この反応は多分、いや絶対にＨＥＩＷＡ的なＳＥＴＴＯＫＵをしたな。
口笛吹くとか怪しすぎる。
まあ僕としても前世の友人（笑）と話したいので、別にいいんだけど。

「で、護衛の具体的な内容は？」

「少なくとも決勝戦が終わるまでは僕の側に居て欲しい。多分誘拐犯の目的は姉さんの優勝阻止だろうし、狙うとしたら多分そこまでだと思うんだ」

「りょーかい。要は近くに居ればいいんでしょ？」

「まあ簡単に言うとそうだね」

その後も一夏と適当なことを話していたら、目的地の駅が近づいてきた。
流石にそろそろまずいのでラウラを起こすことにする。

「ラウラ、起きて」

「ふにゃ……？」

ラウラはゆっくりと目を開き、

「ふにゅ♪」

変な声で鳴きながら抱きついてきた。
その姿が可愛すぎたのでつい反射的に抱き返す&頭を撫でる。
撫でられて気持ち良さそうにラウラが「にゃ～☆」とか鳴いているのを見て、一夏は

「清々しいほどのバカップルぶりだね、全く」

と呆れていた。
おいバカップルとは何だバカップルとは。これでもまだキスさえして無いんだぞ。

「それが本当に不思議だよ。興味深いけど、それよりもとっとと爆発しやがれこのリア充」

「思考読んだ？」

一応そこら辺の訓練もしたんだけど。

「君のその緩みきった顔を見て考えていることが解らないほど、僕は馬鹿じゃないよ」

ああ顔が緩んでいたのか。

「次からは気を付けるよ」

修正はしないけど。

「……いや、修正しようぜ？」

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：一夏

いくら言っても行動を開始しようとしないバカップル二人をＳＥＴＴＯＫＵし、会場まで引き摺ってきた。

後ろで二人がガタガタ震えてる気がするけど気にしない。僕のＳＥＴＴＯＫＵにＫＡＮＤＯＵしただけだろう。

……この口調飽きた。素に戻そう。

さて、今回僕を誘拐してくるであろう犯人は『亡国機業』とか言うらしい。中二っぽい名前でいいね。
それで僕を狙わないんだったらもっと良かったんだけど。
それにしても、何で『亡国機業』とかいう団体（？）は僕を誘拐しようと考えたんだろう。姉さんの優勝阻止が目的ならもっとほかの方法もあるだろうし。
この世界の『原作』は礼衣から借りた分しか読んでないから、この辺りのことは全く解らない。
そこら辺が解ってればまだ楽なんだけど、無いものは仕方がない。
まあ、ここは礼衣たちに頑張ってもらうしかないか……。
面倒だなあ。まあ全部押しつける事なんだけどね。

？？？？？？？さて、二人にはそろそろ本気出してもらわないと。

＝＝＝＝＝＝ｂｒｅａｋ　ｓｈｉｆｔ

一夏怖い。
そんな結論をラウラと二人で身をもって体感した後、僕らは気がついたら会場にいた。

「そういえば」

「何？ラウラ」

「あいつは誰だ？」

「ああ、まだ言ってなかったっけ?彼は織斑　一夏。去年のブリュンヒルデ『織斑　千冬』の弟で、僕の前世の友人だよ」

「そうか……って、はぁ?」

をを驚いてる驚いてる。

まあ無理もないか。いくら以前に僕の人生を見たとはいえ、いきなりこんなことを言われて『はいそうですか』と頷く人はいない。

まあ、事実なんだから仕方がないんだけど。

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ？　‥???

「まだ誘拐できないのか」

『はい、ターゲットの周囲に情報にない人間が2人ほどおり、なかなか隙を突くことが出来ていません』

「嘘をつけ。ターゲットは一人で会場に向かったのが確認された筈だぞ」

『嘘じゃないんです!本当に得体の知れない2人が……』

「まあいい。とりあえず、何としてでも今日中に攫え。さもなければ、貴様らの命は無いぞ?」

『り、了解しました。直ちに任務を遂行します』

ビッ。

「……全く。ここに来てイレギュラーだと？」

「今回、もしかしたら失敗するかもしれんな……」

第十一話　護衛ミッション・１（後書き）

ニコニコで某ゲームのプレイ動画見ながらやってたらこうなった。

意見・感想お待ちしてます。

第十二話　護衛ミッション・２（前書き）

どうも、今度はボーダーブレイクに５００円ほど貢いできた偽桜です。
期末前なのになにやってんだかとか思ったら負け。
後他の二次創作のラウラが可愛すぎて辛い。

勉強？なんだっけそれ？

第十二話　護衛ミッション・2

「ねえ礼衣」

「なに？」

なでなで。

「君、僕の話聞いてたよね？」

「うん、聞いてたけど」

なでなで。

「じゃあ、何で君達はそんなことをしているんだい？そろそろ苛ついてきたんだけど」

「別に言われたことは守っているはずなんだけど。ねえラウラ」

「うむ。寧ろ何処に悪い所がある？」

「だからさ礼衣――――――――」

お願いだから観客席で自分の彼女を膝の上に乗せるのは止めてくれないかなぁ！」

＝＝＝＝＝＝＝

うるさいなあもう。ラウラを愛でて何が悪いんだか。
そう思って無視し続けてたら一夏の泣き真似がどんどんウザくなっていったので、仕方なく僕はラウラを膝の上から下ろして決勝の試合を見ることにする。
因みに僕とラウラは他の試合も見たが、一夏の姉である織斑　千冬さんが他を圧倒していたこと以外は特に印象に残っていない。というか千冬さんの強さが圧倒的すぎる。
当然この試合でも圧倒的な強さを誇り、開始十分の今も千冬さんのＩＳ『暮桜』はノーダメージである。相手はもう半分位しかないのに。

「そういえばさ」

「何だい？」

「君とあの人って、どっちか強いの？」

「全く、何を当然なことを。そんな事決まっているじゃあないか」

「ああやっぱり千冬さんの方が――――――」

「僕の方が強いよ」

「「え゛」」

それって、今回のミッション僕達必要なかったんじゃね？
そんな思いや純粋な驚きと共に、僕とラウラは固まった。

「まあ何百回も転生してたら、自然と強くなるでしょ。まあ姉さんもＩＳ着けて僕とほとんど同じくらいの強さだけど」

それって、千冬さんの人外加減と一夏の非常識加減の、どっちに驚けば良いのかな……。

＝＝＝＝＝＝＝

結局、

さすがブリュンヒルデだわー（棒

とか思っている間に試合は終了してしまった。
当然千冬さんの勝ちで。

そんな訳で一夏と僕達は、一夏の『ちょっと姉さんに会っていこう』という一言で千冬さんに会いに行こうと表彰式を見ず観客席を出たのだが。

「なあ」

「何だい？」

「道は解ってるのか？迷ってる気がするのだが」

「ソンナコトナイヨー」

「なあレイ、こいつ殴ってもいいか？いいよな？」

「まあまあラウラ落ち着いて」

なでなで。

「ふみゅっ！？い、いきなり撫でるなぁあ！」

ラウラを撫でて落ち着かせ、一夏に問いかけ直す。

「で、どうせ迷ったんでしょ？」

「まあそれ以前に姉さんの居場所を知らないんだけどね。適当にそこら辺のスタッフにでも聞いてみようかな？」

多分聞けないと思うけどな……。だって、よく解らない男が突然『織斑　千冬に会わせろ』とか言ったら不審極まりないだろうし。

そんな考えを知ってか知らずか、一夏が近くを通りかかった男性スタッフにニコニコ顔で声を掛ける。
何でいきなり猫被るんだよ……、いや別にいいんだけどさ。

「すいませーん」

「はい、何でしょうか」

「姉さんは何処にいるんでしょうか？」

「あ、それなら私が連れていけますよ」

いいのかよ。

「ついでに僕の友人達を連れていっても良いですか？」

「いえ、セキュリティの関係上、ご友人の同行はちょっと……」

「そうですか……。で、もう一つ質問しても？」

「ええ、いいですけど」

スタッフの人がそう言った瞬間、一夏がいきなり猫を被るのをやめ、表情を嘲りのそれに変える。

「何で僕は『姉さん』としか言わなかったのにぃ、すぐに何処かへ連れていこうとしたんでしょうねぇ？まるで、僕を連れていくのが目的みたいですけどぉ？」

「チッ――――――！」

元スタッフ・現誘拐犯が一夏に掴みかかろうとするが、

「ゲボァ！？」

「一夏、その口調ウザいからやめた方がいいと思うよ」

「まあ何となくやっただけだし。というか、そんな世間話をしながらそこの不審者をかっ飛ばした君も大概だと思うけれど？」

「鍛えてますから★」

「うわー星がきもーい」

掴みかかる前に誘拐犯を蹴っ飛ばして無力化。一応依頼なので、しっかりと仕事はこなす。

……こらラウラ。誘拐犯とはいえ一応人間なんだから、四肢を変な方向に曲げさせない。このあとのＯＨＡＮＡＳＨＩタイムにやることが減るでしょうが。

ちょっと言っていることが矛盾している？気のせいさ。

さて、何か追っ手みたいな奴らも来たので、『ヴィークル』を起動してラウラと一緒に対応を開始。

一夏は「きゃーこわーい」と棒読みしながら突っ立っている。

……少しは働こうよ一夏。

第十二話　護衛ミッション・２（後書き）

あれ、気がついたら一夏がネタキャラに……？
今更かｏｒｚ

意見・感想お待ちしてます。

第十三話　護衛ミッション・３（前書き）

どうも、弐寺をやろうとして人の多さに圧倒され諦めた偽桜です。

働け一夏。

第十三話　護衛ミッション・3

戦闘を行いやすくするため、僕らはわざと袋小路へ移動した。
今回みたいに少人数で特定の何かを守るような戦闘の場合、開けたところで戦うよりもこっちで戦ったほうがいい……はず。敵の戦力は集中するけど、その分一点にまとまってくれるし。幸い後ろのほうには通気口のような出入りできるものもないので、前方から迫ってくる追っ手のほうに意識を集中。

まずは先行して突っ込んできた3人の足にハンドガンで銃弾をプレゼント。
バランスを崩している間に接近し、両端の二人を手刀で黙らせながら、真ん中の奴の背中を蹴って跳躍。飛んでる途中で後ろにいた4人に発砲――――――――ヒット。
天井の照明にぶら下がり、勢いをつけてもう一度ジャンプ。一番後ろの敵集団へ突っ込んでいく。
着地ついでに一人を壁に叩きつけ、壁に手をついた反動で後ろへ移動、3人ほどを気絶させる。
ラウラのほうを見ると、向こうもこっちの集団まで辿り着いたらしい。ナイフ無双パネェ。

「一夏は大丈夫？」

「暇だからと言って後ろのほうでＰＦＰやってるぞ」

「よし後で叩き潰そう」

そんな話をしながらも3人ほど片づけ、周りが怯んだ隙にハンドガンを連射。敵をなぎ倒していく。

……なんかスタッフっぽい人多いな。どんだけ管理が甘いんだか。

まあ他人様の管理の甘さに口出しできるほど僕は偉くもないので、殲滅行動を継続。

さっきから「ば……化け物が！」とか「撤退だ！撤退する！」とかいってる声が聞こえるけれども、

「ちょいとおまちなさいな」

「ヒッ！」

逃がす気はあんまりなかったりする。

（組織的な意味で）オーバーキルは男のロマンでしょ、うん。

＝＝＝＝＝＝＝

3分後、周囲にはまともに動けるような敵がいなくなったので、一夏のほうへ声をかけることにする。

「一夏、無事かい？」

「ちょっと待ってもう少しでこの曲クリアできそうだｋ「「黙れ」」すみませんでした」

一夏が綺麗なジャンピング土下座をする。

そんなことやるんだったら初めからこんなところで音ゲーなんてしなければいいのに。

「まあいいや、一応全員殲滅したよ」

「うん、多分実行部隊はこいつらだけだろうし、後は念のため僕と一緒に行動するだけでいいよ」

「すげー面倒だから帰りたいんだけど」

「却☆下」

「うわー星がきもーい」

「君が先に言ったんだろう？」

「まあね」

そんな事を話していると、敵数人とＯＨＡＮＡＳＩしてきたらしいラウラがこっちに来た。

「なにか情報聞き出せた？」

「いや、あいつらがただの下っ端だったせいか、あまりいい情報は無かった。聞き出せたのは、依頼を寄越した集団が『機業』、依頼人の名が『Ｓ』という事だけだ」

「いやいや、それで十分だよラウラさん。ありがとう」

一夏がラウラの頭を撫でようとするが、その前にラウラが一夏をかっ飛ばす。

「レイ以外が私を撫でるのは許さん」

……拗ねた顔でそんなことを言われたら撫でずにはいられない。
死屍累々の中僕がラウラを撫でているシュールな光景は、結局一夏が復活するまで続いた。

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ？．．　？？？

「おいどうした、応答しろ！」

どこか暗い所で、誰かが叫んでいる。
しかし返ってくるのはノイズ音だけ。
それは、送り出した部隊の全滅と、作戦の失敗を示していた。

「あれだけの数を送ったにも関わらず全滅とは……」

誰かがぼやく。

「――――――――一体、何が起きた？」

第十三話　護衛ミッション・３（後書き）

そういや一夏のヒロインどうしようかな……。
一応簪にする予定なんですけど。
あとこのままだと箒の原作ログアウトフラグが立っちゃいそうです。

……いつかアンケートちゃんと取ります。

意見・感想お待ちしてます。

第十四話　護衛ミッション・４（前書き）

どうも、流石にテストが近づいてきて焦っている偽桜です。

キャラ崩壊上等。

第十四話　護衛ミッション・４

一夏復活後。
僕たちは、改めて千冬さんの所に行ったのだけれど。

「姉さ～ん☆」

「一夏！」

この猫被ってるバカとブラコンをどうにかできないものでしょうか。
何で出会った瞬間僕とラウラ全スルーで抱き合ってるんだよ、うん。
なんか見ているこっちが恥ずかしい（↑自分もさっき似たようなことをやってたの自覚してない）

「さて、挨拶は程々にして」

「そうだな」

いきなり素に戻りやがった。
突っ込む気力もないのでスルー。

「そういえば一夏、後ろにいるのはお前の友達か？」
やっと僕らに意識が向いた。

「ああうん、彼らはバカップル兼僕の友人だよ」

おいちょっと待て。
それどんな紹介だよ。

「ちょっと待て。私達はバカップルではないぞ」

「嘘ダッッッッ！」

「ひ○ぐらしネタは古いと思うぞ？」

「そうかい。というか良く元ネタが解ったね。そっちの方が僕としては驚きだよ」

「副隊長に昔借りた」

クラリッサさあぁぁぁぁぁぁん！

「で、お前達は一夏の友達なんだな。いつも一夏が世話になっている」

千冬さんが話を戻してくれた。ナイス。

「いえ、僕は今日久しぶりに会っただけですし、ラウラは一夏と初対面ですから」

「そうか、すまない。そういえば自己紹介がまだだったな。織斑千冬だ」

「御刻礼衣です」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

こらラウラ。年上なんだから敬語使いなさい。

ぺしっ。

「ふにっ！？」

「敬語使おうね」

「わ、わかった……」

「別に私は気にしないぞ。むしろ面白ささえ感じる」

その『面白さ』の結果何が起きるか解らないから怖いんじゃないですか……。

「そういえば、お前達さっき襲われたらしいな。大丈夫だったか？」

あ、やっぱり情報来てたか。

まあ結構派手にやったから、誰かに見られていても仕方がない。

「大丈夫、ただの誘拐未遂だったから安心して姉さん」

「誘拐未遂はかなり大きい事件だろうが。心配したんだぞ」

「というか礼衣たちに全員排除してもらったし」

「……お前も戦ったのか？」

「後ろでゲームしてた」

「馬鹿者」

「すみませんでしtギャアアアア！」

一夏が青筋を浮かべた千冬さんにかっ飛ばされた。

……本当にこいつ千冬さんより強いのか？

まあどうでもいいんだけど。

＝＝＝＝＝＝＝

一夏がどっか飛んで行ってしまったところで、千冬さんが謝ってきた。

「すまないお前たち。うちの愚弟が迷惑をかけたな」

「いえいえ、一夏には昔お世話になりましたから。気にしないでください。それよりも、今回僕達が関わったことを伏せておいてくれると嬉しいんですけれど」

あまり目立ちたくないからね。

「そんなことならお安い御用だ。今回は本当にすまなかった」

「だから気にしなくていいですって。では僕たちはこれで失礼します」

「ああ、ちょっと待て。失礼だとは思うが、一つ頼みたいことがある」

「いいですけど、何でしょう？」

僕がそう問い返すと、千冬さんはいきなり頭を下げ、

「一夏の接し方を見ている限り、あいつにとって本当に『友達』と呼べる人間は、多分お前達だけだ。だから、これからも一夏をよろしく頼む」

ああ、そういうこと。

確かに一夏、自分の興味対象じゃない人には上辺だけ優しくして心を開かない人間だからな……。

まあここは無難に、

「お安いご用です」

とでも答えておこう。後々面倒だろうし。

「すまない、本当に感謝する」

「だから別に気にしなくて良いですって。では、そろそろ帰りますね」

「ああ、またいつかな」

別れの挨拶をして、迷惑をかけないようにとっとと撤退。

……まあぶっちゃけとっとと帰りたかっただけだったりする。
決して千冬さんの後ろに縛られてる一夏が見えた訳ではない。

……深く考えないようにしよう。うん。

第十四話　護衛ミッション・４（後書き）

明日か明後日辺りにアンケート取ります。

後来週はテスト期間のため多分毎日は投稿できません。

頑張って二日に一本ぐらいになります。

第十五話　ある日の訓練風景・そのに（前書き）

どうも、期末前日なのに何やってるのかわからない偽桜です。

千冬さんはブラコンじゃないよ！ドSなだけだよ！

第十五話　ある日の訓練風景・そのに

§§§§§§§§

礼衣達が去った後のお話。

「あの……姉さん」

「何だ」

「何故に僕は縛られているのでしょうか？」

「聞きたいことがある」

「それ縛る必要ない気がするんだけど」

「気のせいだ」

「ええー……で、聞きたい事って？」

「あいつ――確か礼衣だったか？いつ、何処で知り合った？私の知る限り、全く覚えがないぞ」

「……別に良いじゃない、そんなこと」

「ほう、どうしても言わないつもりか。なら……」

「あれ何で姉さんなんかそんな怪しい物もって近づいてるのうわやめろ襲われｒギャアアアアアアアアァ！」

……何で助けてくれなかったんだよ、礼衣。

§§§§§§§

一夏の護衛をしてから、１週間後。

日本から帰ってきてからは、帰った直後僕らが同人誌を持ってこなかった事に絶望したクラリッサさんが暴れ、ヘルマさんの『私のコレクション貸すから落ち着け』という一言で落ち着くまでに施設が滅茶苦茶になった事件や、ラウラと一緒に寝るようになった事以外は特に変化がない。

というかラウラとの関係も他の隊員の妨害でキス以上に進まない。
クラリッサさんマジ消し飛べ。

そんなある日の朝。
僕は何故かいつもより早く起きた。理由は知らん。
まあでも、いつもほぼ同時に起きているラウラの寝顔を堪能できるのでよしとする。
それにしても、

「にゃぅ……すぅ」
……ラウラの寝顔が可愛い。
ちなみに今現在ラウラは僕に正面から抱きつく形で寝ている。流石に全裸ではなく下着（下のみ）とワイシャツ（提供：ハルフォーフ母娘）を着ているが、十分破壊力は高い。
そんなラウラを見ていたらちょっと衝動が押さえられなくなってきたので、まずはラウラを抱き返す。

「うにゅ……にぅ」

僕が抱き返した事に反応したのか、ラウラが身をよじる。

……やばい、僕のナニがラウラの腹に当たって反応し［以下自粛］。
しかもそんなタイミングで、

「ふぁ……」

ラウラが起きてしまった。
となると、当然僕の［自粛］なナニが当たっていることに気がつくわけで。

「れ、レイ……？」

「いやこれはしかたがないというかなんというかその」

ラウラが頬を真っ赤に染める。
そしてうまい言い訳ができない僕。

「……ふにゅぅ」

結局、ラウラが恥ずかしさのあまり目を回して倒れてしまった。反省。
ああ、そういえば、

「……残念、あと一歩でしたか」

「おいクラリッサ、声が大きいぞ」

「大丈夫ですよ母さん。これぐらいならばれｎ「ばれてますよクラリッサさん」あ、あら……」

「ほーら言わんこっちゃない」

何て会話をしながらクローゼットの中に隠れていた不審な二人にＯＨＡＮＡＳＩするのは忘れないでおいた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

朝食の間ずっと頬が赤かったラウラを落ち着かせ、何時ものように訓練に参加。一応この隊のリーダーはラウラだが、経験の多さからいつも訓練はクラリッサさん主導でやっている。

今回の内容はＩＳの点検・整備・調整。非常時には自分でできるように、ということらしい。

他の隊員達は隊所有のＩＳの、僕とラウラとクラリッサさんは専用機の整備等をする予定だ。

ちなみにクラリッサさんの専用機は『シュヴァルツェア・ツヴァイク』。製作者は当然のごとくヘルマさんである。

ＡＭＳ＆ａｍｐ；ＡＩＣ搭載で、主武器は連射型プラズマカノン『エコーズ』と大型プラズマブレード『プルート』、あと８本のワイヤーブレード。ヘルマさん曰く、『愛娘だから特に本気出した』らしい。僕とラウラの機体もそうだが、これでよくエネルギーが持つな、とか思ってしまう。ラウラの『５．８．１．』なんかかなりエネルギー食いそうなのに、どういう訳か全然減らないらしいし。

思考放棄。

まあそんな訳で、隊のみんなでＩＳを整備室に運び、作業を開始する。

内部アクセス用のケーブルをＩＳ本体に繋ぎ、コンソールを起動。

早速スラスターの出力でもいじろうと思ったのだが。

「イヤアァァァァァァホォォォォォォウ！」

何かヘルマさんが突っ込んできた。

「貴女普通の登場できないんですか……」

「無理だ」

さいですか。

「で、何かあったんですか母さん」

クラリッサさんが会話を進める。

「いや、コンソールでは操作しにくいと思ってな。これを用意した」

僕とラウラとクラリッサさんに渡されたのは、何だかよくわからない端末。何故かＡＭＳ端子っぽいのもついている。

「ＡＭＳ経由で直接ＩＳの調整を可能にする端末だ。パネェぞ」

パネェて何だ、パネェて。

まあせっかく渡されたものなので使ってみる事にする。

ケーブルを端末に繋ぎ、端末を僕の首の所にあるＡＭＳ端子にセット。今度こそスラスターの調整を始める。

何処かの偉い人が「当たらなければどうってことはない」とか言っていた気がするので、単純に出力を上げようとしたんだけれど。

「え、なにこの『ジェネレータの出力が足りません』って文字」

「私にも出たぞ」

「私もです」

え、みんな速度上げようとしてたの？

いやまあいいんだけど。

あとＩＳってジェネレータみたいなもの積んでないよね、確か？

まあどちらにせよ皆同じメッセージが出たのは変わらないので、開発者であるヘルマさんに目線を送ると。

「ああ、そう言えばＡＣｆａハマった時にそんなものを積んだ気がするな……」

え、マジ？

これ積めばほとんどのＩＳのエネルギー関連の問題解決するよね？

そんな僕らの考えを安心させようとしたのかは知らないけれど、

「ＡＭＳないとろくに制御できんがな、処理能力的な意味で」

と補足された。

人の脳を高性能コンピュータがわりに使わないでください。いや本当に。

まあそんなことがあった以外は特に事故もなく、今日一日は平和に

過ごせた。

……へいわっていいね。

＝＝＝＝＝＝＝

寝る前の一幕。

「うにゅ……」

「どしたのラウラ」

「今日私空気だった……」

「大丈夫、僕はちゃんとラウラのこと見てたから」

なでなで。

「ならいい……にゅう」

「じゃあ、おやすみ」

「にゃ……」

……バカップルとか言うな。

第十五話　ある日の訓練風景・そのに（後書き）

真ん中辺りかなりお粗末でも気にしない。
あと１０万ＰＶ突破しました。ありがとうございます。

意見・感想お待ちしてます。

……あ、明日アンケート取ります。
１２／２３追記

アンケ終了しました。回答して頂いた皆様、ありがとうございました。

【終了しました】アンケート

どうも、睡眠薬とカフェイン剤を取り違えて飲んだ偽桜です。
今日は昨日も予告したとおり、アンケートを取ります。

内容：一夏×？について

一夏のヒロインどうしましょう、と言うことについてです。
ぶっちゃけ全然考えてなかったので、どうしようか悩んでます。
一応作者としては簪にでもしようかな、と。

選択肢としては、

・簪　（野鳥獣さんが既に1票入れてくれました。感謝）

・セシリア

・シャルロット

・鈴

・箒

・その他（のほほんさんとか会長とかその辺り）

という感じです。
あ、あとジェットエンジントーマス　様からの提案で

・一夏『が』ヒロイン（要は礼衣×ラウラ＆一夏になる予定）

と言う選択肢もあります。

アンケートの回答に関しては感想欄の方にお願いします。
期限は十分に回答が集まったと作者が判断するまでです（この先原作突入までどのぐらいかかるか解らないので）。
今回のようにストーリー展開の一部を読者のアンケートに投げるほど発想が貧困な作者ですが、これからもよろしくお願いします&回答お願いします。

12／23追記

アンケ終了しました。回答して頂いた皆様、ありがとうございました。

第十六話　ある日の訓練風景・そのさん（前書き）

どうも、期末試験がやっと半分終わって今日は休みの偽桜です。

文章グダグダでもしかたない

きまつだもの（↑明後日の方向向きながら）

第十六話　ある日の訓練風景・そのさん

§§§§§§§§§§§§

ずずー。

「ふう……」

ずぞぞぞ。

「……え、このコーナーまだあるの？」

メタ発言は禁止です。

「解ったよ……。まあいいや、それなら適当に『アレ』のフラグでも立てますか」

§§§§§§§§§§§§

ＩＳ整備訓練があった次の日、朝起きると。

「ん……」

目の前にラウラの顔があった。

「うわっ！？」

「にゃっ！？」

思わず驚いて飛び退いてしまった。そのせいでラウラもバランスを崩す。そのままベッドから落ちてしまいそうだったので急いでラウラを支える。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫だ……それより、いきなり飛び起きるな。驚くだろう」

「起きたときにラウラの顔が間近にあったから、つい驚いて。何であんな所に？」

「たまたま私が先に起きてしまって、あと……」

ちら、とクローゼットの方を見る。なるほど、今朝はハルフォーフ母娘が居なかったのか。

「ごめんねラウラ」

なでなで。

「むぅ……な、なら……」

ん、とラウラが唇を突き出したとき、その物音は聞こえた。

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：ハルフォーフ母娘（バカ二人）

礼衣とラウラの部屋の天井裏で、蠢く影（バカ）が二つあった。その影（バカ）たちは、天井の穴からじっと中の部屋を見ている。

突如、その影（バカ）たちが小さな声を上げた。

「ああ惜しい。後もう一歩だったのだが」

「『いつ私達がいつもそこから出てくると言った』作戦は成功ですね。後はこっそりここから覗き続ければ、いつか二人は……。そういえば母さん、ちゃんと録画用のビデオカメラは用意してますか？」

「当然だ、ちゃんとここｎ「ヘーソンナコトシテタンダ」何、行動が速すぎる！」

「マッタク、貴女タチハ何ヲヤッテイルンデスカ」

「あのですね礼衣さん、これには深い訳ｇ「問答、無用！」ギャァァァァ！」

……結局、二つの影（バカ）たちは礼衣にＯＨＡＮＡＳＩされた。

これで訓練の時には復活しているのだから驚きである。

＝＝＝＝＝＝＝ｂｒｅａｋ　ｓｈｉｆｔ

さて、今は真冬である。
真ん中の冬と書いて真冬である。
が、何故か僕らは軍施設の無駄に広くて深いプールにいる。しかも屋外の。
このプール何と広さは２００m四方、深さは５mもある。半端ない。
まあでもプールである以上今日は泳ぐんだろうが、なぜこんな真冬に水泳なのか。まあ確かに実戦ではそんなこと言ってられないけどさ。
気のせいか他の隊員も不満顔だ。

……おい誰だ今ぼそっと『今日はニコニコしたかった』って言った奴。お兄さん怒らないから出てきなさい。
この隊にまともな女性は居ないのか……あ、ラウラがいた。

「礼衣さん、バカップル的思考はいい加減にして下さい」

「だが断る」

ラウラ可愛いし。

「で、副隊長。今日の訓練内容は？」

隊員Ａ（名前知らない）が質問をする。
何で名前を知らないのかって？だって必要以上に他人の名前覚える気がしないし。ぶっちゃけ邪魔。
まあそんなことはいいとして、クラリッサさんが説明を始める。

「今日はですね、皆さんの予想通り着衣泳――――――」

ああやっぱりか、と思った矢先、

「だと思ったか！これだよ！」

何かプールの水中から変態と共に大量の水に浮かぶ足場が出てきた。
どこにこんな物を隠すスペースがあったんだろうか。

「――――――はい、ということで今日は『ドキッ！？女子だらけの水上乱戦！ポロリ？ねえよ！』です」

「「「「「ナ、ナンダッテー！」」」」」

何かいきなりよくわからない闘いが始まりそうになっていた。後クラリッサさん、星黒くなってるから。
まあ『女子だらけの』なら僕は除外だろうから、安心できる。

「何言ってるんですか、礼衣さんもですよ」

……ゑ？

＝＝＝＝＝＝＝

『これ訓練なの！？』とか『本当にヤリタカッタダケーじゃないですよねぇ！？』とか非難が噴出したが、結局全員が渋々用意を開始した。

ちなみにルールは簡単。水の中に落ちたら負け。制限時間は十五分で、終了後生き残った人以外はヘルマさん特製『なんかパネェランニングマシン』を５０分間やらされるらしい。殺す気か。

武器はゴム弾入りの銃器全般、刃を潰したナイフのみ使用可。ＩＳ含めて今までに結構銃器は扱ったが、何だかんだで扱いやすい拳銃が僕には合っていたので迷わず拳銃を選択。

……うぉいラウラ。いくらＩＳで使っているからってガトリングガン選ぶのは無謀でしょ。

というかよくあったなゴム弾ガトリングなんて。

「私が作った」

解りましたからヘルマさん、ドヤ顔はやめてください、ウザいから。

「ではみなさん、それぞれ指定の位置に着いて下さい」

クラリッサさんの指示で、全員それぞれに割り振られた浮島に乗せられた。

ヘルマさんの号令でスタートらしいので、ヘルマさんが一定以上の声の大きさを出したら動けるように『ヴィークル』で条件反射をセット。

ヘルマさんが大声を出そうと息を吸い、

「では、スタート……とでも言うと思ったか！」

「のわっ！？」

あ、やばい。
今の大声で体が反応してしまった。
と思ったときにはもう遅く、

「あーーーーー！」

ざぱーん。

「レイーーーーー！」

プールに落下してしまったよ、うん。
真冬の水って冷たいね。本当に。

……当然、その後僕は風邪を引いた。
いや、ラウラに看病して貰ったのは嬉しかったけどさ。

第十六話　ある日の訓練風景・そのさん（後書き）

最後の方特に力抜いた

アンケート途中経過。
簪　６票
のほほん　２票
一夏がヒロイン　１票
シャルロット　１票

結構多く集まってます、ありがとうございます。
この調子でいけば今週末には締め切るかもしれません。

引き続き、アンケートの回答と意見・感想お待ちしてます。

第十七話　前触れ的なアレ（前書き）

どうも、期末最終日の偽桜です。

今回は短めです。昨日ちょっと結果が悲惨だったので（オイ

第十七話　前触れ的なアレ

§§§§§§§§§§§§

『誰だ』

「お久しぶりです、僕ですよ」

『また貴方ですか。今度はどんなご用件（脅迫）で？』

「そんな大した事じゃないですよ。

――――――ちょっと礼衣とラウラさんを借りたいだけです」

§§§§§§§§§§§§

朝起きると。

「やあ」

何故かベッドの横に一夏がいた。

状況が全く掴めない。流石に日本からドイツに来た理由が『来ちゃった☆』とかではないだろう。一夏ならやりかねない気もするが。

「……何でいるの一夏」

「まあちょっと頼み事があってね。それよりも、僕としては君たちのバカップルぶりに突っ込みたいのだけれど。何で一緒抱き合ってに寝ているんだい？」

「え、普通じゃないの？」

むしろラウラがいないと何処であろうが自然に眠れない。いやまあ『ヴィークル』で脳波の調整やれば眠れるけど、５Ｈｚ以下だと意識飛び飛びになるから調整面倒なんだよ。まあどうでもいいけど。

「相変わらず君の恋人関連の神経がブッ飛んでて安心したよ」

「さいですか。……で、頼み事って？」

そういえば『さいですか』と『サイゼ〇ヤ』の語感が似てると思うのは僕だけだろうか。……僕だけか。

「大丈夫、君だけさ。……で、まあ頼み事の内容を説明するけれど、まずはラウラさんを起こした方がいいと思うよ？二度説明するのは面倒だ」

「りょーかい」

ナチュラルに思考読まれた気もするが無視。だって一夏だし。
とりあえずラウラを起こす事にする。

「ラウラ、起きて」

つんつん。

「ふにゅぅ……ぃ」

くてーん。

「やっぱり頬をつつくだけじゃ駄目か……」

「いや普通そうだからね？」

全く一夏は何を言っているのだろうか。無理矢理起こしたら可哀想でしょうに。
そんな呆れ顔をしていると、

「……ナア礼衣」

「何？」

「スコシ……オハナシシヨウカァァァァ！」

「えちょっと待って何か一夏キャラ変わってｎヴボァ！」

ラウラと共にかっ飛ばされた。

……いちかってこわいね。わすれてたよ。

第十七話　前触れ的なアレ（後書き）

アンケートの回答は１１日に締め切ります。

回答・意見・感想お待ちしてます。

第十八話　殲滅戦・ブリーフィング的なアレ（前書き）

どうも、期末終わった直後ＤＤＲやって足を痛めかけた偽桜です。

年末だしそろそろ年賀状作らないとな……

第十八話　殲滅戦・ブリーフィング的なアレ

一夏のＳＥＴＴＯＫＵを受けラウラを起こした後、やっと僕らは本題に入った。

「で、頼み事とは何だ？」

「解ったラウラさん、説明しよう。遠回しな発言をさらにオブラートにつつんだ説明と単刀直入な説明、どちらがお好みかな？」

「短い方がいいと思うけど？」

話進まないし。

「解った、なるべく短くしよ「三行で纏めろ」それは無茶振りだぜラウラさん……」

何でラウラがそのネタ知ってるんだろう。いやまあ大体検討はつくけどさ。

「まあいいや、三行で言うよ」

そして君も乗るのかい一夏。

「前の誘拐未遂事件の黒幕グループの居場所が解ったので

潰しにいくよ

できる限りに

あ、君たちは囮ね」

「「四行じゃん！」」

しかも最後が一番聞き捨てならないし。

まあ、一夏の狙いは解った。要はこれからの面倒事の種を排除したいんだろう。

「ああ、そういえばどっかから強奪されたＩＳのコアの存在も確認されてるから、ついでにそれも奪うつもり」

「ＩＳ戦闘があり得るのか？」

「いや、まだ未完成みたいだ。フレームさえも設計段階らしいよ。まあ完成したら面倒だし、今のうちに叩き潰す」

とことん不安要素は排除したいらしい。

「それと、原作通りなら僕もＩＳを動かせる筈だからね」

「そうなのか？」

一応僕らの事を知っているが、原作関連についてはよく知らないラウラが僕に聞いてきたので頷き返す。

それにしても、ＩＳのコアを奪えるほどの組織となると、流石に三人だと危ないのではとか思ってしまう。まあどうせ一夏がなにか考えてるんだろうけど。

「じゃ、作戦の詳細な流れを説明するよ。『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』に地形デー

タを送るから」

一夏の言葉と共に、『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』にデータが送られる。

……てかこれこんなこと出来たんだ。初めて知ったよ。

まあそんなことはいいとして、データを開いて作戦区域の３Ｄマップを見る。

「まず、敵本拠地はロシアの端にある寂れた街の地下全体を使っているらしい」

マップ全体の地下が黄色く光り、地下の複雑な構造が浮き出る。

地上と接している大きな入り口は西と東に二つある。他の入り口はとても細いので、多分非常用だろう。

「それで、今赤く光っている点が君たちが突入する予定の入り口」

マップ上の東にある、廃墟じみたビルの一つが光る。どうやらそこが入り口になっているらしく、拡大すると拠点内部への侵入ルートが表示された。

「結構頑丈な隔壁があるらしいけど、ただのパスワード認証だけっぽいからこれ打ち込めば大丈夫だと思うよ」

またファイルが送られてきたので開くと、４０字ほどの文字列が表示される。

「まあ侵入に成功したら、そのまま暴れちゃって構わない。むしろ目を引きつけておいて欲しいからね。確認されている兵力はこんな

感じ」

マップ上に表が出る……よし、ＩＳ部隊は居ないみたいだ。

「ＩＳは使用しても良いのか？」

「なるべくなら避けた方がいいと思うよ？特に礼衣はね」

「当たり前でしょ」

いつ何処で下手に情報が漏れるか解らないので、ＩＳは元々使わないつもりだった。

対ＩＳ戦でもない限り、大体何とかなるだろうし。

「まあ僕が作戦を終えて指示を送るまでは行動し続けておいて。あくまでそっちは陽動だしね。さて、何か質問はあるかな？」

「特には無いかな」

「私もだ」

一夏の動きが伝えられてないけど、どうせ勝手に動くんだろうし聞いても仕方がないだろう。

……あ、質問が一つあるにはあった。

「ねえ一夏」

「何だい？」

「これらの情報ソースは？」

「ｇｏ○ｇｌｅだよ」

すごいねｇ○ｏｇｌｅ。

「まあ冗句だ。適当にハッキングしたんだよ」

なら良かった。

第十八話　殲滅戦・ブリーフィング的なアレ（後書き）

ｙａｈ○ｏよりもｇｏ○ｇｌｅの方が凄いよね、多分。

意見・感想お待ちしてます。

第十九話　殲滅戦・移動中１（前書き）

どうも、昨日は投稿できずすみませんでした、偽桜です。

アンケートの結果、一夏のヒロインは

簪　６票

のほほん　３票

一夏がヒロイン　１票

シャルロット　１票

鈴　１票

楯無ｏｒスコール　１票

で簪になりました。

回答して頂いた皆様、ありがとうございました。

第十九話　殲滅戦・移動中1

§§§§§§§§

姉さんはＩＳ操縦者を辞めた。

今後はＩＳ学園の先生になるらしい。

……そのせいで僕の仕事の重要度が増した。

あー面倒くさい。

§§§§§§§§

＝＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：ラウラ

前に会った、レイの友人らしい人物である一夏から朝いきなり作戦説明を受けた後。

私達は、ロシアの作戦区域まで専用のバスで移動し始めた。

手元でタブレット端末をいじりながら、一夏が私に問いかける。

「それにしても、ラウラさんが作戦を何も言わず受けてくれるとは正直意外だったよ」

「レイが諦めた様な顔をしていたからな」

こいつと親しいはずのレイでも敵わないのなら私が敵うわけがない。

「あっそ」

興味を失ったらしく、一夏はまたタブレット端末に目を落とした。

……それにしてもこいつ、妙だ。

私とレイは顔を知られてはまずいので、フェイスマスク付きの専用のスーツを持ってきている。今回は基本的に出会った敵は全員殺す予定だが、万一、ということも有り得るので着ることになった訳だ。あのスーツ着ているとレイに抱き付きにくいのだが……って、それは今考えることではない。

スーツの件は後でヘルマに要望を出すとするか。要求される対価が怖いが。

思考投棄。

まあそんな訳で私とレイはきちんとした装備を持っているのだが、目の前のこの男はあろうことか持ってきている装備が今着ている私服オンリーなのである。しかも上はセーターで下はジーンズ。動きにくい事この上ない。

こいつは本当に戦闘を行うつもりだろうか？

まあ私としては、作戦後もレイに甘えられればそれでいいのだが。

ぶっちゃけ、最悪の場合作戦は成功しなくてもいい。レイと一緒に居られるかどうかが最優先だ。

……そんなことを考えていたらレイに甘えたくなった。膝枕でもしてもらおう。

だーいぶ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ｂｒｅａｋ　ｓｈｉｆｔ

ラウラが唐突に僕の膝へ頭を預けごろごろしてきたので、撫でることにする。

なでなで。

「ふぁ……落ち着くぞおぉ……」

ラウラも満足したみたいだ。僕もラウラの銀色の綺麗な髪いじるの好きだし。

こういうのが一石二鳥とか言うんだよね。

「いや、僕には何か違う気がしないでもないよ？」

「別に良いじゃないか」

思考読まれたけど全スルー。

「そういえば、何で君はさっきからずっと端末を弄っているの？作

戦の確認にしては、少し不自然だけど」

何か操作している量が多いし。

「ああ、ネトゲやってるからね」

「すげー緊張感無いね」

これでも作戦区域に移動中なんだぜ？驚きだろ？

おっと口調が変わってしまった。

「移動中はとても暇だから、暇潰しにでもと思って」

「暇になるなら移動手段に車を選ぶべきではないと思うのは僕だけかな？」

しかもこのバス、最新式の自動操縦である。

そんなもの使う金があったら、飛行機で移動したかった。

「自動で動くバスって、何か男のロマンを感じないかい？」

「いやまったく」

「男ではないから解らん」

「それは残念。暇なら君もネトゲやるかい？端末は用意してあるよ？」

「遠慮しとく、一応作戦中だし」

「同じく」

というか僕とラウラがやる前提で端末を用意するな。

「僕が運営に頼んで最初から全パラメータカンストとかできるけど？」

「生憎俺ＴＵＥＥプレイには興味がないんだ」

あとネトゲ専門用語っぽい単語使わないでよ。ラウラが頭上に？マーク浮かべてるでしょうが。

「しかも何で運営に頼めるのさ」

「運営会社の株主だからね。そこが小さい頃に大量に買っといた」

パネェ。

「まあ気が向いたら僕に言いなよ、ある程度優遇された環境でプレイできるから」

「はいはい。気が向いたらね」

多分永遠に向かないだろうけど。

そんな話をしながら、その日は終わった。

……緊張感がないとか言うな。

＝＝＝＝＝＝＝

翌日。

「なあ」

「何だいラウラさん？」

「何時になったら着くのだ？」

「んー、三日後ぐらい？」

僕らはまだ目的地についていない。というかバスなんだから時間が掛かるのは当たり前か。

……さて、

「ねえ一夏、そろそろ聞いてもいいかい？」

「いいよ」

一夏が微笑む。

僕も笑い返し、

「いや、僕としてはどうでもいい事なんだけれどさ、

――――――今回の作戦、本当の目的は何？」

一夏の笑いが、より一層深くなった。

「その質問を待っていたよ」

第十九話　殲滅戦・移動中1（後書き）

意見・感想お待ちしてます。

第二十話　殲滅戦・移動中2（前書き）

どうも、最近ヘミシンクに凝ってる偽桜です。

今回は今後の流れには余り関係がない可能性が高い部分なのに、かなり無理矢理です、すみません。

第二十話　殲滅戦・移動中2

「さて、理由としてはこんな所かな」

「「いやまだなにも説明してないでしょ（だろう）」」

「ををナイスツッコミ」

誤解の無いように言っておくけれど、一夏はまだ一言もこの作戦の真の目的を言っていない。

「とっとと目的を吐け」

「まあまあラウラさん落ち着いて。クイズに答えるときはそう答えた理由を言う必要もあった方が楽しいだろう？」

ラウラが警戒した目で一夏を見るが、一夏は全く動じていない。

『そう答えた理由』というのは多分、僕がさっきの質問をした理由の事だろう。別にそこまで確証を得て質問した訳では無かったんだけど。

「じゃあ質問した理由を言っていい？」

「どうぞ。むしろ歓迎するよ」

歓迎された。だからどうって訳では無いんだけれど。

「まず今回の作戦は最初から少しおかしかったんだよ」

「何が？」

話を促す一夏。

「だってさ、ただ単に拠点を破壊したいんだったら、僕とラウラ、いや戦力的にはラウラのＩＳだけでも大丈夫でしょ？コア強奪も含めてさ」

「それで？」

「それが今回は、こういう事が嫌いなはずの一夏がわざわざ出てきているじゃないか。しかも僕らには囮だけさせて、さらに僕だけでなくラウラのＩＳ使用まで避けてほしいとまで言って」

「確かに言ったね」

「ＩＳは威力が高すぎるからね、それこそ拠点を吹き飛ばせるぐらいに。だから一夏、もしかしてだけれど、拠点を奪う方を重要視しているの？」

それなら今回の違和感に納得がいく。

かなり無理矢理な想像だし、一部こじつけっぽいが、僕ではこれが限界だ。

「……最後の理由推測以外は大体正解、理由推測は半分正解かな」

残念、全部正解ではなかったか。

まあでも一夏の笑いを見るに、及第点ではあるんだろう。

「今回の目的だけれどね、施設を欲しいってのもあるけど、一応もう一つあるのさ」

まあそっちの回答は期待して無かったけどね、と付け足し、

「ちょっと某ＴＢＮさんに対して先制攻撃というか、何というか。あと、姉さんに対する不安要素の排除とかもあるかな」

「そんなの解るわけ無いじゃん」

ノーヒントにも程があった。

しかも某ＴＢＮさんとかほとんど誰のことか言ってるし。

「まああれだ、満点阻止問題的な？」

「酷いにも程があるな。私など全く予想できなかったぞ？」

「一応ラウラさんにも怪しく見えるような行動はしていたんだけどね。と言うか礼衣が異常なだけだよ、なんでこんなまだヒントが少ない状態で正解に近い答えを出すのさ」

「んー、妄想力？」

というかわざわざ時間の掛かる方法で移動している辺り、なんかやるつもりじゃないかなーとは思ってたし。

でも、一夏は制圧した施設を何に使う予定なんだろうか？まさか『自分で軍を作るＺＥ』とかじゃないとは思うんだけど。

……でも一夏ならやりかねないから困るんだよな、うん。

「で、礼衣達は解答を得たわけだけど、それを知ってどうする予定だい？」

「どうもしないよ」

「どうもしないのか？」

ラウラがきょとんとする。

別に僕は一夏が何を考えていようとどうこう言う気はない。それが僕とラウラにかなりの難題として降りかからない限りはの話ではあるけれど。

僕が一夏に何かとやかく言う権利はないし、それを使って何か脅しとかをしようとするのはほとんど無意味である。

と言うか、いちいちそんな行動を起こすのが面倒くさい。別に知ったとして何をするんだろうか。

そんな僕の思考を読んだのか、

「そうか、なら良かった」

一夏も安心したらしく、またネトゲを始めた。

……え、ネトゲは続けるの？

第二十話　殲滅戦・移動中2（後書き）

しりあすなんてぼくにはむりだったよ。

意見・感想お待ちしてます。

第二十一話　殲滅戦・1（前書き）

どうも、最近体感執筆速度が遅くなってきた偽桜です。

ｓｔｅｐｍａｎｉａ５楽しすぎワロｔ（殴

第二十一話　殲滅戦・1

今回の一夏の目的を知ってから2日後。
僕たちは、やっと目的地に着いたのだが。

「大丈夫一夏？」

「だ……大丈夫に見えるかい……？」

バスの中で連日ネトゲをやっていた一夏は、車酔いを起こしたみたいだ。とても気持ち悪そうにしている。
まあ自業自得ではあるけれど。

「もう作戦を開始してもいいか？」

既に作戦行動用の服に着替えたらしいラウラが一夏を急かす。一夏が可哀想だからもっとやれ。

「礼衣……、本音……うう……出てるよ……」

「別に良いじゃないか。じゃ、行ってくるね？」

「え……ちょっ」

「ではな」

「そりゃないよ……うえ」

一夏が何か言っていた気がするけれど無視。僕とラウラは侵入予定

地のビルまで急ぐことにした。

＝＝＝＝＝＝＝

「このビルか？」

「そうっぽいね」

特に何の障害もなく目的のビルに到着。建物の屋上を伝っていったお陰で、監視用センサーの量も少なく、対処しやすかった。

……街の外を歩いている人たちの目つきが皆凄まじかったのは少し怖かったけれど。街丸ごと拠点化しているだけはある。

『じゃあそろそろ突入してくれないかな。屋上の端の方に入り口があるはずだから』

「「了解」」

僕らの移動中に一夏も復活したらしく、いつもの口調で通信を入れてきた。

情報通り、屋上の端に床に偽装したハッチを発見。ラウラが電子ロックを解除し、蓋を開ける。

そこにあったのは、

「登り棒……？」

「その様だな」

小学校の時によくやったアレっぽい奴が地下に向かって延びていた。
何か正式名称があった気がするけど忘れた。

「何だっけこれの正しい名前？」

「ではないか？」

「そうそれ」

まあ確かに侵入者が来たときの嫌がらせには最適だろう。長いのだと降りるの妙に面倒だし。
仕方ないので『ヴィークル』を起動、握力を微妙に調整しながら一気に滑下。
降りる途中にセンサーでもあったのか、警報が鳴り響く。暫くしたら敵が大量に寄ってくるだろうが、ラウラがまだ降りてきていないので待機、ついでに早速来た数人をマシンガンで排除。
さらに何人かの足音が聞こえたので、通路の曲がり角から手榴弾を投擲。爆発後に角を曲がり残りを排除。
それと同時にラウラの到着を確認。

「大丈夫か、レイ」

「余裕だよ」

『二人とも侵入したみたいだね。じゃあこのエリア以外を適当に動

いといてくれないかな』

僕とラウラの『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』に転送されたマップの一部が光る。どうやら中心部と西側エリアの一部には入らないほうがいいらしい。

……さて、じゃあ本気でも出しますか。

第二十一話　殲滅戦・1（後書き）

終わり方中途半端だけど気にしない。

意見・感想お待ちしてます。

第二十二話　殲滅戦・2（前書き）

どうも、冬休みが近づいてきて割と鬱な偽桜です。

家にいたくないよぅ。

第二十二話　殲滅戦・2

「あー面倒」

「仕方ない、相手も死にたくはないだろう」

一夏の連絡から15分後。
僕とラウラは北側エリアに移動していた。
流石に敵も完全に迎撃準備を終えたようで、こちらに来る奴らは大体防弾チョッキみたいな物を着ている。お陰で倒すのが面倒この上ない。

「レイ」

「何？」

「ナイフ戦をしたい。埒があかないからな」

銃とナイフは相性が悪い筈だけど、確かにこのままだと弾切れの危険もあるしそっちの方が良いかもしれない。

「了解。サポートするよ」

「うむ」

ラウラが敵集団に突っ込んでいく。当然銃を向けられるが、発砲される前に僕がマシンガンを発砲。銃を無力化、もしくは照準を大きくずらす。

その間にラウラが敵集団に到着、一気に喉をかっ切って行く。その間もサポートは忘れない。
ラウラが先に進んだので、僕も先の角を曲がり、ラウラが殺り残した警備員数人を発見。どうやら怯んでいる様である。
……全く、その隙が命取りなのに。
一気に距離を詰め、サバイバルナイフで一人の首を切る。血が吹き出て僕に掛かるが無視。そいつを踏み台にして一気に加速、残りの奴らをかっ切る。
「ラウラ、殺り残してたよ」
「む、すまない」
「大丈夫大丈夫、僕は気にしてないから。それよりも、怪我はしなかった？」
「少し殴られた程度だ、怪我はない」
「よしそいつ殺そう」
ラウラを殴る事は万死に値するよ、うん。
「もう殺った」
「あらら」
じゃあ仕方ない、仕事を続けますか。

そう気合いを入れ直し、僕らはまた作戦（作業）行動に戻った。

……そういえば、今一夏はどんな感じなのかな？

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：一夏

あ、そういや礼衣たちはどんな感じなんだろうね？あの二人殺しに抵抗がなさそうだから変に暴走してないといいけどな。特に礼衣が。

そんなことを思ったのは、僕が適当にたまたま出会った敵を気絶させている時だった。

何処かに連絡を入れようとした人もいたが、その前にＣＱＣをキメるか電波妨害（ジャミング）して対処。流石に何百回もいろんな世界に転生しているので、このくらいは楽勝。

ちなみに僕の転生者能力は他人の特別な能力のコピー。コピー後はいつでも何度でも何個でも使えるのが売りさ。電波妨害（ジャミング）もどっかの世界でゲットしたものだけれど、どこの世界でかは忘れた。いちいち記憶を自分の脳に保持するのはアホらしいし。

……誰に話すでもなく語ってしまったね。お陰でもう目的地に着いてしまったじゃないか、もう。

誰にも向けられない理不尽な怒りを誰かに向けるために、目の前の

ドアを開ける。

「はろーはろー、いや初めまして、ですかね？」

そういえば何で僕って興味対象以外には丁寧語なんだろうか？
まあどうでもいいんだけど……って、これは礼衣の十八番か。

どうやら僕のいきなりの登場に中に居た人達は驚いてるみたいだし、
とりあえず話題放棄。

「誰だ貴様……警備は何をやっている！」

「はいはいそんな無駄なことは言わないでくださいねー。というか
あなたたちから見れば不審者である僕がこの幹部会議室にいる時点
で察してくれると嬉しいです」

中にいた一人が叫んだので、とりあえず先手を打ってみた。

……ここに襲撃情報が行かないようにしておいて助かったよ。自
爆スイッチとかいろいろあるみたいだしね。
ちなみにさっき言った通り、ここは亡国機業幹部会議室。なんか碇
ゲン○ウみたいな人がたくさん居る。流石幹部だね。
そんなことを思っていると、幹部のトップっぽいお爺さんが口を開
いた。おいおい発言は手を挙げて先生に当てられてからでしょうよ。

「……で、何の用だ」

「何で貴方達みたいな組織のお偉いさんは自分達より優位な位置に
ある人にもそう偉そうに接することが出来るんでしょうね？それだ

から老害なんて言われるんですよ。あとここに来たのはお願い事があるからです、簡単でしょ？」

「くっ、餓鬼がぬけぬけと……で、お願い事とは何だ」

こいつ五月蝿いなぁ。まあ別にいいや、だって、

「だから簡単なことだって言ったでしょう？

皆さん、黙って頂けません？出来れば永遠に」

今から全員消えちゃうしね。

第二十二話　殲滅戦・2（後書き）

礼衣君達はこれがデフォ。

意見・感想お待ちしてます。

第二十三話　殲滅戦・3（前書き）

どうも、『ｗｅｂパワードール』とか言うブラゲのβテストに参加してみた偽桜です。
累計３００００ユニーク突破しました。ありがとうございます。

なのに今回は短め。

第二十三話　殲滅戦・3

一夏から作戦の完了報告と撤退命令が出たのは、僕とラウラが大体の敵を排除し終えたときだった。

「一夏が目的を達成したみたいだね」

「その様だな。直ぐに撤退しよう」

「居心地悪いもんね、そうしようか」

ぶっちゃけ地面とか壁一面の赤色とか紫色のモノの臭いが鼻にキツい。なので急いでマップを検索、最短の脱出ルートを割り出す。どうやら近くに非常用の脱出口があるらしいので、そこへ急ぐことにした。

……あ、戦闘後の後片付け忘れた。一夏があの拠点使うらしいのに。

ま、いいや。依頼はちゃんとこなしたし。

＝＝＝＝＝＝＝

「やあやあお帰り。どうやら無事だったみたいだね、よかったよ」

僕らが地上に上がると、そこには一夏と行きに使ったバスが居た。

「これが無事に見える？身体中血だらけなんだけど」

「私もだぞ。気持ち悪くて早くシャワーを浴びたい」

「君達のそれは全部返り血だろ？何言ってるんだか」

一夏は僕らの訴えを華麗にスルーし、言葉を続ける。

「さて、今回はお疲れさま。何か報酬でも支払おうと思うんだけど、何が良いかい？」

おお珍しい。一夏がそんなことを言うなんて。
さて、何が良いだろうか？ぶっちゃけ現金とかは必要十分持っているので、あまり欲しくはない。
かといって貰う物が思いつくわけでもないので貰わない、となると絶対に今後もパシられる。
さて、どうしようか。

「どうするラウラ？」

「レイは思いつかなかったのか。なら？？？？？？」

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ　：ＴＢＮ

何処に人知れずある研究室。
その薄暗い部屋の中で、一人の女性がモニタをじっと見ていた。

ふいに、その女性がモニタから目線を外し、天井を見上げるように椅子の背へだらーっともたれ掛かった。
さっきまでその女性が見ていた画面には、何処かを写している地図上に表示されている赤いポイントと、そこから伸びる線の先にある『反応消滅』の文字。

「あーあ、消えちゃった。まさかこんなに早く行動するなんて、やっぱりいっくんだね」

手だけを動かして画面を操作し、もう一つのマップを表示。
そちらのポイントから伸びる文字は『正常』と表示されている。

「でも、こっちの潜水艦は残しちゃったのかな？まあ確かに、私もこんな残党に成り下がった奴らには興味ないけどね」

マップのポイントが拡大され、そこに潜水艦が表示される。
しかし彼女の視線は天井に固定されたまま。

……不意に、その顔が歪んだ笑みを浮かべる。

「？？？？？？？だから大好き」

この人もまた、どこか壊れていたのだった。

第二十三話　殲滅戦・3（後書き）

なんか束アンチの流れになりそう。

意見・感想お待ちしてます。

……ちなみにブラゲのユーザー名もこっちで使ってる名前と同じだったｒ（宣伝自重

閑話　『ある日のチャットログ』（前書き）

どうも、今から陣馬山登ってきます、偽桜です。

突発的にやりたくなって書いた。反省はしていない。

閑話　『ある日のチャットログ』

ｓｙｓｔｅｍ：Ｏ．ｓｕｍｍｅｒさんがログインしました

ｓｙｓｔｅｍ：零さんがログインしました

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　やあ礼衣。結局君もこのゲームを始めたんだね。嬉しいことだよ

［密談］零：　クラリッサさんにちょっと話したらこうなったんだよｏｒｚ

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　おや、あの人もやっているのかな？

［密談］零：　いや、ネトゲ自体もう引退したみたい。詳しくは知らないけど、『金が、金がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』とか叫んでた

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　へー。そういえばラウラさんは？

［密談］零：　僕の隣でたれラウラ化してる

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　このリア充が！まあいいや、じゃあ君だけ僕のクランに入れるよ

［密談］零：　もう決定事項なの……？

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　当たり前じゃないか。じゃあ入れるよー

ｓｙｓｔｅｍ：クラン『同好会』にメンバーが追加されました。
『同好会』メンバー人数：7→8

［クラン］ｓｉｄ：　クラマスまたメンバー追加したのかよｗ定期オフ直前だってのにｗ

［クラン］サキ@紳士勢：　前はＫＮＺＳ．ＳＳさんだっけ？

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　呼びましたか？

［クラン］サキ@紳士勢：　いや呼んではないけどさｗ何かこのクランの招待基準が謎過ぎてｗ

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　あれ、皆さんも招待されたんですか？

［クラン］ｓｉｄ：　そうだけど？まあクラマスがランキング最上位の人だし、と思って入った

［クラン］ｓｉｄ：　そういえば新入りの挨拶マダー？

［クラン］零：　おっとついＲＯＭってました。新入りの零です、クラマスのＯ．ｓｕｍｍｅｒに引き摺られて入りました。よろしくお願いします

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　よろしくお願いします

［クラン］サキ@紳士勢：　よろろ～

［クラン］ｓｉｄ：　よろ　　ってか何で新しく入ったクラメン達みんな丁寧語ｗ何か申し訳ない気分になるからやめいｗ

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　だが断る

［クラン］零：　だが断る

［クラン］ｓｉｄ：　ちょお前らｗ

［クラン］サキ@紳士勢：　で、ＫＮＺＳ．ＳＳさんと零さんは早速だけど定期オフ来る？まだ２人とも入ったばかりだけど、別に私らは気にしないよ？

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　多分零は来ないだろ？海外在住だしｗ

［クラン］サキ@紳士勢：　クラマスいきなり出てくんな驚くだろうがｗ

［クラン］ｓｉｄ：　やせいの　クラマスが　あらわれた！

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　というか零さん海外在住なんですか？

［クラン］零：　そうですよー

［クラン］零：　ドイツ在住です

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　凄いｗ

［クラン］ｓｉｄ：　もしかして：ドイツ人

［クラン］零：　いえ、日本人ですｗ

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　仕事とかですか？

［クラン］零：　↑学生　まあちょっといろいろありましてドイツにいます

［クラン］サキ@紳士勢：　じゃあ留学とかかな？どちらにせよ凄いけど

［クラン］零：　いえいえ、別にそんなに凄いことはしてませんよ

［密談］零：一夏ちょっと話題転換してくれない？回答するのきつくなってきた

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　わかったよ、確かにこの話題は辛そうだもんね

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　で、ＫＮＺＳ．ＳＳさんは来るのかな？

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　行きます。面白そうですし

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　ｏｋ、了解。あとで集合場所・時間をメッセで送るから確認しといてね

［クラン］サキ@紳士勢：　といいつついつも姿を現さないクラマ

スであった

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　いつも参加してるじゃないか

［クラン］ｓｉｄ：　何処にも見あたらねえじゃねーかよｗ

［クラン］サキ@紳士勢：　そのくせ支払いとかはちゃんとされてるし……。一度ぐらいちゃんと姿現してくれません？

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　気が向いたらいつかそうするぜぃ。じゃあ落ちるノシ

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　乙彼です

［クラン］サキ@紳士勢：　乙～

［クラン］ｓｉｄ：　乙

［クラン］零：　じゃね～

報告：Ｏ．ｓｕｍｍｅｒさんがログアウトしました

［クラン］ｓｉｄ：　じゃあ俺はどっかのルーム入ってくる

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：　私は落ちます

［クラン］サキ@紳士勢：　私はショップの更新見てくる

［クラン］零：　みんなどっか行ったか……

［全体］ＴＴＮ．ＳＳ：　誰かＫＮＺＳ．ＳＳさん知りません？

［全体］零：ついさっき落ちましたよ

［全体］ＴＴＮ．ＳＳ：　ありがとうございます

［独り言］零：　……今の人、ＫＮＺＳ．ＳＳさんの知り合いかな……？

閑話　『ある日のチャットログ』（後書き）

一部ＨＮはどれが誰だか解るかも。
あ、あと２人ほどモブ混じってます。
見た目も少しチャットっぽくしてみました。

え、『今こいつら出して良いの？』みたいな奴が居る？そんなの気にしたら負けｄ（殴
あと明日投稿できないかもです、すみません。

第二十四話　デートっぽい日そのいち（前書き）

どうも、山頂での部の後輩のマナーが悪すぎて危うくそいつらを山頂から突き落としそうになるレベルまで苛ついていた偽桜です。
山頂だろーが何処だろーが必要最低限のマナーは必須ですよ。
陣馬山頂で芝生の整備していた人本当にすみませんでした。

……あれ、ここで言っても意味無くね？
そして安定の短文。

第二十四話　デートっぽい日そのいち

§§§§§§§§§§§§§§§

「転生についての簡単な考察

『前世の記憶を持つ』という転生者の話は、実は以外と色んな所で耳にする。皆様も時々怪しい出版社がそんな話を扱う本を出しているのを新聞広告とかで見る事があるだろう。確証はないが。

まあその話がすべて事実ではないは解りきっているが、この話たちの興味深い点は、二人以上の転生者が同じコミュニティに存在する場合『前世からの～』の関係が異様に多いことである。それこそほぼ１００％で。

しかも、その場合の多くでその『前世からの～』のグループの内最低一人以上が複数回目の転生なのである。こちらは少し確率が低く、僕の調べた全ケースの約七割ぐらいに留まる。

ここで仮説なのだが、『転生』とはいわばねずみ講の様なものではないか。

どこかの世界で『親』となる転生者に深く関わると、その人は『子』となり『親』の転生先に付いていく。しかもその『親』には誰にでもなれる可能性があるから性質が悪い。

しかし、そうなると転生者はどんどん増えていってしまう。ここで例外が考えられｒ「ちょっと待て」何かな姉さん」

「それを夏休みの自由課題作文にするつもりか？」

「そうだけど？」

「やめろ」

「えーでもこれ自信作ｎ「却下だ」ハイハイ解りましたよ止めますからその拳を下ろしてくださiギァァァァァ！」

§§§§§§§§§§

「これとかどうかな？可愛いしラウラに似合いそう」

「それだとレイに似合わないだろう。こちらの方が良くないか？」

「それだとラウラの顔に浮いて写るよ？」

「「ん～～？」」

時の流れは速く、１５歳の夏になった。
今日は休みを貰い、ラウラと一緒に買い物に来ている。というかクラリッサさんに「このルートで行ってくださいね～★」とか紙を渡され追い出された。
ちなみにその紙は最後にアッチの方のホテルが行き先に指定されていたので速攻で破り捨てた。当たり前だ。

あ、そういえば前に一夏に貰った報酬だが、『誰の監視も受けない部屋』という名案をラウラが出したのでそれに決定した。今はその部屋でラウラと毎日ニャンニャンしｔ……ゲフンゲフン。

ハルフォーフ母娘涙目。

そんなわけで僕らは、近場のショッピングセンターにあったアクセサリーショップで適当に眼帯を見ている。
隊にいるときは、ラウラ曰く『変色した目が恥ずかしい』らしいのでラウラのみ眼帯をしているのだが、今回ラウラが買い換えるついでにお揃いの物を買うつもりでいる。
しかし、さっきからなかなか良い物が見付からない。髪の色は二人とも似ているのだが顔つきが（まあ当然だが）全然違うので、二人ともに似合うものとなるとかなり厳しいものがある。
「多分黒色がオーソドックスで良いんだろうけどね……」

「だが、それだとどうも似合う物がないな」

うーん。

また膠着状態。
そんなとき、店員らしき人が声をかけてきた。

「何かお探しですか？」

海外でも日本語が通じるよ！やったねたえちゃん！

「おいやめろ」

ラウラに突っ込まれた。うぅ。
仕方ないので店員にオススメを聞く事にする。

「僕達二人共に似合う眼帯ってありますかね？」

「え」

あ、店員固まった。まあ当然か。
普通男女二人で眼帯買おうって人いないだろうし。

「あ、ええっと……これとかはどうでしょうか？」

たっぷり3秒ほどフリーズされた後、片方は黒、もう片方は藍色の割とシンプルな物が渡された。どちらも縁が青色で塗られており、とても綺麗である。
とりあえず僕は藍色の方を着用。

「どんな感じかな？」

「うん、似合ってるぞ」

ラウラに感想を聞いてみると、良さげな反応を得られた。
ついでにラウラにも黒い方を着けてみる。

「どうだ……ってうにゃぁっ！？」

「すごく似合ってるよラウラ」

すりすり。

「だ……だからって頬擦りするなぁ！」

ラウラが抵抗してきたので解放。顔を真っ赤にしているが可愛いので気にしない。

「どちらも同じデザインですので、お二人にはピッタリだと思いますよ」

微笑む店員。すげーースルースキルですね。

結局、僕らはそれを買うことにした。
ちょっと高かったけど気にしない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：変態二人

「おい、まだ居場所は掴めないのか！」

「無理です母さん、発信器からの応答もありません」

「畜生、どうしろってんだ！」

「ちょっと隊の通信班任務放棄させて全員呼んできます！」

「よし、急げ！」

……きょうもドイツはへいわです。

第二十四話　デートっぽい日そのいち（後書き）

そういえば眼帯の話一切してなかったよね、的な話。
あと最初の方の転生云々はただの創作ですので、あまり気にしないでください。

意見・感想お待ちしてます。

第二十五話　デートっぽい日そのに（前書き）

どうも、ちょっと今からカラオケ行ってきます、偽桜です。

ｗｅｂパワードールｏｐβ始まったぜヒャッハー！

そして安定の礼衣変態化。

第二十五話　デートっぽい日そのに

§§§§§§§§§§§§§

「ねえ姉さん」

「何だ」

「本当に夏休みの自由課題作文どうしよう？」

「あれ以外思い付かないのか……」

「いや一応ＩＳ関連の新しい理論とか色々あるんだけどさ」

「おいやめろ」

「んー、なら『ガ〇リ〇ュウを美味しく食べる方法』とかは？」

「私はお前が解らなくなってきたよ……」

§§§§§§§§§§§§

眼帯を購入し、取り敢えず店から出た。

「どこ行く？」

「思い付かないな」

二人とも余り基地の外に出ないので、何処に行こうか全く候補がない。
まあ確かに僕は元外部の人間だが、ラウラ以外の事が割りとどうでもよくなってからは外の事を結構忘れてしまった。反省も後悔もしてないけれど。

「もう戻ろうか？」

「いや、クラリッサ達に何をされるか解らんのでまだ帰らない方が良いだろう。それに、」

「それに？」

そう僕が促すと、ラウラがいきなり抱き着いてきた。

「ま、まだレイと二人で居たいし、こういうのは初めてだからな……」

顔を真っ赤にしてそう言われる。……うう、可愛すぎる。まあ僕も顔真っ赤だけど。
堪えきれず、ラウラの頭を撫でる。
「じゃあもう少し見て行こうか」
「う、うにゅ……」
照れるラウラ。顔がさらに赤くなる。
そうして暫く、僕とラウラはそのままの状態でいた。
……周りの視線が痛い気もしたが全力でスルー。
＝＝＝＝＝＝
暫く適当にショッピングセンター内を歩いていると。
にゃー。
「む……」
にゃおー。

「むむむ……」

にゃーん。

「うう……」

ラウラがペットショップの店先にある『ふれあいコーナー』みたいな所にいた子猫の視線に捕まえられた。

フェンス越しにラウラをじっと見つめる子猫、そしてその視線から逃れようとするも子猫の構ってオーラのせいでどうも逃げにくいラウラの攻防が続いているが、どうもラウラ劣勢の様だ。さっきからゆっくりとそのコーナーに向かってしまっている。

と、その様子に気がついたらしい店員が声を掛けてきた。

「あの子と少し遊びませんか？」

「だ、だが……うう」

ラウラが顔を不安げにしながらこちらをちらちら確認するように見てくる。

「別に良いと思うよ。僕も少し見てみたいし」

了承した途端、ラウラの顔がぱあっと明るくなる。

「うむ、なら行くぞ！」

早速柵の中に入り、ラウラは目的の子猫に近づいて抱き上げる。

にゃーお。

「よしよし、落ち着け」

子猫の頭を撫でるラウラ。
子猫の方も気持ち良さそうにごろごろ鳴いている。

「彼氏さんもどうですか？」

「いや、僕はラウラを見てれば十分なので」

店員が勧めてくるが、動物が特に好きなわけでもないので丁重に断り、ラウラの方に向き直す。

うにゃー。

「ん？……うにゃ？」

にゃ、にゃーにゃ。

「うにゃ、にゃ」

うにゃーご。

「にゃん」

なんかカオスな状態になっていた。人間に理解できない言語で喋られても困る。

「ラウラそれ意思疎通できてるの？」

「にゃ？……ああ、なんかそれっぽいのはできた」

……パネェ。

第二十五話　デートっぽい日そのに（後書き）

明日喉の調子によっては投稿できないかもです。

意見・感想お待ちしてます。

第二十六話　デートっぽい日そのさん（前書き）

いつ私が毎朝9時に投稿すると言った

……別に遅れた訳じゃないですよ？偽桜です。

ティッシュ注意報の発令タイミングが解らん

第二十六話　デートっぽい日そのさん

§§§§§§§§§§§§§

「そろそろ本格的に作り始めようかな――――――

――――――専用機をさ」

「一夏お前何言ってるんだ？」

「いえいえ、弾君には関係ないですよ」

§§§§§§§§§§§§

「うにゃー」

「いやもう猫いないからね？」

「このアイスが美味しいのが悪いのだ」

さっきの謎状態から離脱し、適当にアイスクリームショップに入った。
アイスの中でも割と特殊な部類のようで、アイスとイチゴ等の果物、他にも色々な物を冷たい鉄板の上で混ぜ、それを盛り付けるといったものだった。
こういうのは初めて見たが、意外と美味しかったのでまあ満足。

「レイ」

「ん？」

ラウラが顔を赤くしながらアイスをのせたスプーンを突き出してくる。

「あ、あーん……」

どうやらカップルがよくやる『はい、あーん』をやってみたいらしい。
応じない理由もないし、僕もやってみたいのでラウラの突きだしたスプーンを口にくわえる。……うん、美味しい。

僕もお返しに、ラウラにスプーンを近づける。

「あーん」

ぱくっ。

「うむ、美味いぞ」

満足顔のラウラ。

「ならお返しをしなければな。あーん」

こうして僕らは、互いのアイスが無くなるまでずっと食べさせあいをしていた。

……お前ら食ってるの同じ種類のアイスだろとか言うな。

＝＝＝＝＝＝＝

だんだん日も暮れかかってきたので、仕方なく基地に戻ることにした。

当然買った眼帯は着用している。

「意外とすぐに時間経っちゃったね」

「うむ、でも楽しかったぞ」

「僕もだよ」

なでなで。

「うみゅ……」

そんな感じで基地の近くへたどり着くと。

「「う〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ」」

なんか変態二人が地面で伸びていた。

「何してるんですかヘルマさんとクラリッサさん」

「「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ」」

ずしゃー。

いきなり飛び起きたかと思うとつかみかかろうとしてきたので急いで回避。

ついでにラウラが二人を縛り上げる。縄どこから持ってきたとか思ったけど気にしない。

「で、何してるんですか」

「畜生お前らの盗さｔ……成長記録取ろうとしたのになんでお前らはぁぁぁぁ……」

「映像が高く売ｒ……隊の皆で楽しむ予定だったのですよ！？」

「「お前らなにやってんだ」」

しかも最初に本音言いかけてるし。

「別に良いだろう」

さいですか。

第二十六話　デートっぽい日そのさん（後書き）

意見・感想お待ちしてます。

第二十七話　オフ会前のこと&ご都合主義回避用ご都合フラグ（バカップル抜き

どうも、今日『一目惚れしました！』とリアルで告白され反応に絶賛迷走中な偽桜です。

短め&何か簪がちょっとアレになりましたすみません。

反省はしてませんけど。

第二十七話　オフ会前のこと&ご都合主義回避用ご都合フラグ（バカップル抜き

§§§§§§§§§§§§

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　で、本当に来ないのかい？＞オフ会

［密談］零：　オフ会のためだけに外国から日本に行く変人なんか何処にもいないと思うけど？

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：ノ

［密談］零：　……えっ？

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　まあいいや、結局君は来ないっつーことでＦＡ？

［密談］零：　まあいいけど。でその君も外国からってどういう意味？

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　説明面倒だから察してくれないかな。じゃあ落ちる、爆発しろ

［密談］零：　ちょっと待て爆発しろってどういう意味だよ……
って、もう落ちてるし

§§§§§§§§§§§§§

私は劣等感溢れる家から逃げ出すように、少し早めにネットゲームのオフ会の待ち合わせ場所である駅前のオブジェに着いた。

「ふう……」

今回私が参加するのは、たまたま始めたネットゲーム『ドリームフロウオンライン』のクラン『同好会』の定期オフ会。
確かにネット上の知らない人と実際に会うのは危険だし、当然家族に反対もされた。

……でも、それが一体なんなんだろうか。
いつも優秀な姉と比べられ、劣等感という『損失』に押し潰されそうな私には、もう私に起きる『損失』なんてどうでも良くなってしまった。
だから私は少しでも逃げ場という『利益』を得るため、リスクの上にある『損失』を無視する。最初から無かったものにする。

……それの何がいけないのだろう？

だから私は、その怪しい男に気がついても、普通に声を掛けた。

「あ、あの、『同好会』の方ですか？」

……別にどもってなんかない。

＝＝＝＝＝＝＝side shift：一夏

「あ、あの、『同好会』の方ですか？」

その青髪の女の子が声をかけてきたとき、僕は非常に驚いたと共に興奮した。

……いやはや、まさか礼衣以外に隠れている僕を見つけ出す人がいるとは。これだから観察（趣味）はやめられないね。

「僕をよく見つけられたね。君、消去法でいくとＫＮＺＳ．ＳＳさんかな？」

「は、はい、そうですけど」

「いやいや、敬語じゃ無くてもいいよ。気に入った人にいちいち気を使われるのは嫌な性質でね」

取り敢えず相手の緊張を和らげることにトライ。

「う、うん……気に入った人？」

おや、そういやそう言ってしまったか。こりゃ失敗。僕も興奮しすぎているようだね。

まあいいや、説明しよう。
今度は間違えないように。

「長い間生きてると、非常に暇になるからね。気に入った人以外には興味を失うんだよ」

「まだ貴方は若そうだけど？」

「いやいや僕は――――――

――――――転生者だからね」

……礼衣の二の舞は、なるべくなら避けさせてあげたいからね。

第二十七話　オフ会前のこと&ご都合主義回避用ご都合フラグ（バカップル抜き

続くぜぃ。

意見・感想お待ちしてます。

追記

あ、これ明日の分です。
用事があるのでちょっと早めに上げときました。

……あ、予約投稿にしときゃ良かったｏｒｚ

第二十八話　オフ会前のこと＆ご都合主義回避用ご都合フラグ（バカップル抜き

どうも、ｗｅｂパワードールのリーゼが可愛すぎて辛い偽桜です。

簪さん病みそう。良い意味で。

第二十八話　オフ会前のこと&ご都合主義回避用ご都合フラグ（バカップル抜き

§§§§§§§§§§§§

「あれ、ヘルマさんは？」

「私は知らないぞ」

「私も知りませんよ？母さんどこに行ったんでしょうか？」

――――――ヒーーーーーーーーーーハーーーーーーーーーーー！

「「「（なんか別に大丈夫っぽいな）」」」

§§§§§§§§§§§§

「いやいや僕は――――――転生者だからね」

彼の口から出た言葉は、俄には信じられないものだった。
だから、こんなことを言った私の選択は間違ってないだろう。

「……痛い人？」

「いや違うから。というか礼衣以上にキツい反応をするね君は」

礼衣って誰？とか思ったけど無視。不要そうな情報なので。

「まあ、そんな感じの反応をされるのは予想してるからね。今は無視してくれて構わないよ」

「う、うん？……」

何だろうかこの人との会話でそこはかとなく感じるこの嫌悪感は。
まあ只の『損失』でしか無いので無視するが。

「で、その雰囲気を見るにやっぱり君には何か『悩み事』でもあるのかい？」

「え……えっと……」

少し答えるべきか迷う。これで起こりうる、更識家の情報漏洩という『損失』は、私以外にも降りかかるかもしれない。

「別に具体的な事なんて言わなくていいよ。いちいち聞くのも面倒だしね」

彼はそう追加してくれたが、さりげなく『言わない』という選択肢も潰してきた。

……そうか、さっきの嫌悪感は、この人の性格がなんとなく姉に似ているからか。

この人も姉の様になんやかんや私に嫌がらせをするのだろうか。だとしたらここで答える『利益』は無い。黙っていた方がいいだろう。

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：一夏

「……」

うん、どうやら完全に警戒されたみたいだね。まあ仕方ないけどさ。
やっぱり転生云々は言わない方が良かったかな？下手な警戒を招くだろうし。

……どうしようね？折角こんないい人物（観察対象）なのにさ。

「んー、どうしたら言ってくれるのかな？ジャンピング土下座大会でもした方が良い？」

「何でそこまで拘るの……？」

よし、ここで誤解されそうな言葉でも言っておきますか。

「んー、簡潔に言うとさ。君が必要なんだ。替えも効かない、他でもない君がさ」

……かっこ、観察的な意味で。
心の中で、そう付け足しながらさ。

＝＝＝＝＝＝ｂｒｅａｋ　ｓｈｉｆｔ

「んー、簡潔に言うとさ。君が必要なんだ。他人の替えも効かない、他でもない君がさ」

そう言われた時、私は正直耳を疑った。
姉よりも劣っている筈の私を、その私だけが必要とされる？
そんな希望、とっくの昔に捨て去ったのに。

「……何で？」

「まあ詳しくは言えないけどね。要は君の存在自体が必要なんだ」

「……？？」

よく解らないが、取り敢えず彼が真剣であることは解った。
怪しい人からではあるが、私が必要とされたことは純粋に嬉しい。

「さて、自己紹介が遅れたね。僕のＨＮはＯ．ｓｕｍｍｅｒ。『ドリームフロウオンライン』のクラン『同好会』会長さ」

……失礼。クラマスだった様だ。

第二十八話　オフ会前のこと&ご都合主義回避用ご都合フラグ（バカップル抜き

意見・感想お待ちしてます。

第二十九話　ある日の訓練風景・そのよん（前書き）

どうも、告白してきた女子を昨日振ったら『諦めないから』と言われ困惑気味の偽桜です。

三次元女子怖い。

第二十九話　ある日の訓練風景・そのよん

§§§§§§§§§§§§

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　三ヶ月後の四月になったらしばらくネトゲやれないかも

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　突然だね。何で？

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　ＩＳ学園に入る可能性が高いの。これでも日本の代表候補生だし。

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　それで？

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　あそこ全寮制だから、そこで果たしてゲームが出来るか微妙なの

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　んー、なら仕方ないけどさ。取り敢えず学校が楽しいものになるのは保証するよ

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　何で？

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　さあ、何でだろうね？まあいいや落ちるよノシ

ｓｙｓｔｅｍ：Ｏ．ｓｕｍｍｅｒさんがログアウトしました

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　待って……って、もう落ちちゃった

［独り言］ＫＮＺＳ．ＳＳ：．．．．．．．．．．そんな希望、持っても良いの？

§§§§§§§§§§

朝いつも通りラウラと一緒に起き（詳しく言うと［検閲により削除］）、朝食を食べてクラリッサさんの所へ行った。
そこで急にクラリッサさんが頼み事をして来たのだが、

「ちょっと母さんの研究所手伝いに行ってくれませんか？」

「「おい待てぃ」」

何でそんなことをしなければいけないのか。
だってあのヘルマさんの研究所だよ？毎朝、

『お前らの求めるものは何だぁ！』

『一に浪漫、二にビジュアル、三にスピード！』

『実用性はぁ！』

『悪魔の囁き！』

『よーし！』

みたいな叫びか聞こえてくる研究所だよ？
ほらラウラも怯えて震えてるし。

「こわいこわいこわいこわいこわいこわい」

「落ち着いてラウラ」

なでなで。

「ふみゅぅ……」

途端にくてーとなるラウラを抱き止め、ラウラの髪を撫でるのを継続。

「取り敢えず一言言って良いですか？」

「良いですけど」

「バカップル爆発しやがってください」

はて、バカップルとは誰だろう。

「誰ですか？」

「貴方達の事に決まっているでしょう……」

「え、そんな事ないよね？」

「うむ。クラリッサは何を言っているのだ？」

ラウラも同意の様だ。

確かに少しだけいちゃつき過ぎな気もするが、バカップルまでではない気がする。何か前に一夏にも言われた気もするが、まあ気のせいだろう。

「はあ、もういいです……準備は、出来たようですし」

クラリッサさんの顔が呆れから邪悪なそれに変わったと気がついた時にはもう遅い。

僕とラウラは縛られ、沢山の隊員たちに運ばれ始めた。

「「ぎゃーーー！？」」

「じゃ、頑張ってくださいね～★」

……クラリッサさん、お願いですから★のなかに『消し飛べ』って書かないでください。

＝＝＝＝＝＝＝＝

「ふむ、来たようだな！」

運ばれた先は案の定ヘルマさんの研究所。
部屋の所々に『火力！』とか『見敵必殺』とか書いてある紙が貼られているけどスルー。

「で、これは何ですか」

「まあまあ落ち着いてまずはこれでも食え」

差し出されたのは大量のスティック状をしたサクサクしてそうなお菓子。
ヘルマさんの眼力が怖かったので一口食べると。

「これ……」

「う○い棒だな」

「スライスする奴を買ってきた。なかなか面白いぞ」
あれか、何か某巨大掲示板とかで『１０円のもので遊ぶために７０円かける意味がわからん』とか『形状がち［検閲により削除］こみたい』とか言われてた奴か。そんな事を思っていると、ラウラが袖を引っ張ってきた。

「レイ」

「何？」

「ちょっとやってみたいんだが、レイもやらないか？」

どうやらう○い棒スライスに興味があるらしい。ラウラの目が期待で満ちている。

「やってもいいですか？」

「構わないぞ」

わーい。

ラウラと一緒にう○い棒で遊び始める。スライスしたあとは当然ちゃんと食べた。

……結局、終日それをやっていた。

ヘルマさんの手伝いしてないけど気にしない。

第二十九話　ある日の訓練風景・そのよん（後書き）

このシリーズオチがずさんですねすみません。
あと割と急ですが次から入学編入ります。
やっとかよとか言わない。

意見・感想お待ちしてます。

ＡＣＶ早くでないかな……。

第三十話　年度末にやられた事・１（前書き）

どうも、休日でテンションだだ下がりな偽桜です。

あくまで『入学編』なのでまだＩＳ学園には入らないぜぃ。

第三十話　年度末にやられた事・1

§§§§§§§§§§§§§§

『こんにちは』

「おおお前か！久し振りだな！」

『ええ久しぶりですね。それで、あれは完成しましたか？』

「ああ、もう佐〇急便でそっちに送っておいたぞ！」

『どうでも良いですが僕は日本〇運派なんで次からはそっちで送ってください。それにしても、よく依頼を受けてくれましたね。若干諦めてたんですが』

「私は国の規律より面白さを重視するからな。この程度の手伝い、どうってことはない」

『おいそれダメだろ』

「まあ安心しろ、これに使った技術はまだ公開しないし、してもつまらんからな。こんなオーバーテクノロジー、『今はまだ』公開には危険すぎるだろう？」

『ですね。タイミングは僕が指示しても良いですか？』

「むしろそうしてほしい。自慢じゃないが、私にはそういう時機を読むのは無理だからな！」

『了解です。公開後は礼衣達の機体に使っても大丈夫ですよ』

「解った。ではまた何かあったら言ってくれ。ではな！」

『はいはいではまたいつか。

……なんと言うか、あの人あのテンションをよく維持できる

ね？まあ自分の限界を知る頭の良い天才程、頼りになるものはないけどさ』

§§§§§§§§§§

朝である。

「おはようラウラ」

「うゅ……おはよ」

ぎゅーっ。

まだ目覚めたばかりでぽわぽわしているラウラを抱き締め、ゆっくりと起こす。

「困ったぞレイ」

「どうしたの？」

「あったかくてレイから離れたくない」

「じゃあしばらくこうしてる？」

「うむ」

たっぷり五分ほど抱き合った後、二人でベッドから降りる。
机の上に置かれていた不審物に気がついたのは、丁度その時だった。

「何これ」

「ｉＰｈ○ｎｅだな。自信はないが」

取り敢えず誰のか解らないので、スリープ解除ボタンを押すと。

『やあ』

画面にいきなり一夏が表示された。

「ああ一夏か。後ピンボケしてるよ」

「何の用だ？」

『君たちのスルースキルはどれだけ高いんだい？普通ここで突っ込むだろう』

「面倒だからに決まっている」

ピントを直しながら一夏が僕らの事を責めてくるがスルー。

「で、本当に何の用なの？」

『わかったよ仕方無いなぁ。じゃあ、ＶＴＲスタート』

「「は？」」

どういう事か聞こうとしたら、いきなりムービーが始まる。

『ミッションの概要を説明しましょう』

「ＡＣネタ自重しろよ！」

前にもう出さないっていってたじゃんか！しかもインテリオルのミッション紹介ネタとか一部の人しか解らんでしょう！

……おっと、何か電波を受信してしまったようだ。

しかし、

『ミッション・オブジェクティブは日本にあるＩＳ学園への入学です。』

「おいちょっと待て」

ラウラはともかく、僕は大丈夫なのか？

一応ＩＳは女性しか使えないことになってるし。

『まーぶっちゃけ細かいことは僕が大体調整するので、とりあえず二人とも入学して下さい。僕が暇です』

「本当に本音しか言ってないね」

というか一夏も入るのか。

『僕、織斑一夏は、僕の暇つぶしと、僕の周辺の世界の面白さを望んでおり、その要となるのがこのミッションです。ちなみにどうで

もいいですが、ラウラさんは入学が決定したので礼衣に拒否権はありません』

おいおい。
ラウラをダシに使ったね？
別に理由はどうでもいいけど、それだけは許せない。

……後でぶっ○しとくか。

『で、受けてくれるかい？』

「拒否権もないし、当然だよ」

「私もレイが行くなら良いぞ」

『なら良かった、じゃあね』

その言葉と同時に画面がブラックアウト。
マイクが動いていないことを確認し、ラウラに問いかける。

「ねえラウラ」

「何だ」

「なんて言うか、楽しみだね。学園生活」

「浮気するなよ？只でさえ女子が多いからな」

冗談めかしてラウラが微笑む。

「当たり前。

？？？？ラウラのことが大好きだからね。僕は」

だから僕も、笑いながらそう答える。

自分の気持ちのままに。

第三十話　年度末にやられた事・1（後書き）

あれ、気がついたら礼衣君病んでました。
そしてまだドイツから出てないという。

意見・感想お待ちしてます。

第三十一話　年度末にやられたこと・２（前書き）

どうも、前々から欲しかったヘミシンク『Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　ｐｒｏｇｒａｍ』を手に入れられてテンション上がってる偽桜です。
昨日は帰ってきた期末試験の大☆反省会があったので投稿できませんでした、すみません。

でも今回も短め。

第三十一話　年度末にやられたこと・2

§§§§§§§§§§§§§§§

「ふむふむ、何か私の予想外の行動を起こしてくれたみたいだね、いっくんは」

電子音が鳴り響く。

「おやおや、調べてみれば、前にいっくんを守ってくれた人たちじゃあないか。前はあまり気にしてなかったけど、これは面白い事になりそうだね。ちょっと調べようか」

「私が致しましょうか？」

「いや、くーちゃんがやらなくてもいいよ。私の方が速いもん」

「解りました」

「それはそれとしてくーちゃん、束さんはお腹が空いてしまったの

だー、くるくる」

「解りました、今すぐ食事をお作りします」

「うんうんありｇ「出来ました」何か異様に速いよ！人類の限界でも超えたのくーちゃん！？」

「そろそろお腹が空くかなと思ってたので」

「すごいよくーちゃんありがとう束さん大感激だよ！

――――――あれ、何この情報？何でいっくん以外に男性がＩＳを動かせるなんて有り得ない情報があるのさ」

§§§§§§§§§§§

一夏からの連絡を受けてから約一日半後。
僕とラウラは、羽田空港に着いていた。やっぱり首都圏に近いのは嬉しい。

「で、あいつは何処だ？」

「えーと、確か出口で待ち合わせのはず」

適当に渡された地図に沿って歩く。

「それにしても」

「何？」

「何故道行く人々が私たちを見て振り返ったりしているのだ？」

「軍服だからじゃない？」

「それもそうか」

まあラウラが可愛いってのもあるだろうけど。さっきから変な目を向けてくる奴には男女問わず全員睨み返している。ラウラに嫌な下心持って近寄る奴はデストロイ。

「この下の出口か？」

「多分そうかな」

エスカレーターを降りると、すぐ近くに一夏の姿を確認。

「やあ来てくれた――――――おいおい危ないじゃないか」

一夏の位置を確認したと同時に一気に距離を詰め、隠し持っていたナイフを首に突き立てようとしたが、残念ながらよく判らない能力で動きを止められてしまった。

「ラウラをダシにするのは許せなかったからね。ちょっと警告をしたかったんだ」

「『ちょっと』にしてはやりすぎじゃないかい？ラウラさんも後ろで構えてるしさ」

「でも大丈夫だったでしょ？」

「まあね」

これ以上攻撃を加えても、こんな人目のつきやすい場所では僕とラウラの立場が危うくなるだけなので諦め、一夏から離れる。

「にしても、君達も危険なことをするねぇ。まあ予測できたけどさ」

「さいですか」

まあ予測されて当然か。

気のせいか、一夏が悲しそうな顔をした気もするがスルー。

「で、これからどうするのだ？」

ラウラが問いかける。

一応四月初めまでのホテル（ラブホではない、決して）はとってあ

るけれど、依頼内容の説明は本当にあのＶＴＲしか無かったのだ。
一夏も頷き、ラウラに答える。
「うん、まあそれらの話は移動中にでもしようじゃないか。
――――――僕の専用機とかの話も、ちょっとしたいからね。自慢的な意味で」
「「は？」」
……ただし、超のつく爆弾発言を添えながら。

第三十一話　年度末にやられたこと・2（後書き）

礼衣君闇度加速中。

意見・感想お待ちしてます。

第三十二話　年度末にやられたこと・3&専用機（一夏の）（前書き）

どうも、冬期講習を嫌いになれない偽桜です。

まだまだ入学はしない。

第三十二話　年度末にやられたこと・3&専用機（一夏の）

§§§§§§§§§§§§

結局、僕はただの道化なのだろうか。

礼衣にとっても、僕にとっても。

§§§§§§§§§§§§

「――――――という訳さ。解ったかい？」

「それ前もやってなかった？」

「いい加減飽きたぞ」

「ウワーカナシイナー」

「「うぜぇ」」

言っておくがまだ移動用の車の中に入ったばかりで、一夏は一切何も説明していない。……誰に言ってるんだか。

「まあいいや入学までの流れを簡単に説明するよ」

「三行でまとめろ」

こらラウラ、それも前やったでしょう。

なでなで。

「にゃぅ……」

「おいこら礼衣思考と行動が矛盾してるよ」

五月蝿いなあもう。別に最初からこうするつもりだったんだから、矛盾なんかしてないんだけど。

「ここに病院を建てよう」

「ここに建てた病院が逃げたぞ」

仕方ないね、一夏いるし。

「話進まないから進めていいかい？」

「いいと思うよ」

全く、誰だよ話をこじらせたのは。

「じゃあ三行で言うね。
取り敢えずわざと
ＩＳ学園と藍越学園を
僕と礼衣で間違えてくる
あ、ラウラさんは待機ね
」
「了解した」
「解ったけど、僕の藍越学園受験票みたいなのは？」
「いや、モンド・なんとかの時の事もあったし、護衛で話を通したよ」
ダウト、明らかに無理矢理過ぎる。この程度のイベントで護衛をつける必要があるなら、それこそ日常的に護衛つけないと怪しまれる。多分裏で調整してくれてるんだろうけど、迷惑を掛けられるのはなるべくなら御免だ、いやまあ別にいいんだけど。
「まあいいや、作戦説明はこれでいい？というかせっかく四行で纏めたのに君達が突っ込んでくれなかったから次の話いくよ」
どうやら一夏は少しいじけたようだ。あたたかい目でスルーしてあげるけど。

「取り敢えず、僕の専用機の話ｄ「三行で（ｒｙ」泣くぜ僕？まあ当然嘘泣きだけどさ」

ラウラの無茶振りで一夏が泣き真似を始める。ぶっちゃけウザいが気にしない。

「で、一夏の専用機って完成してたの？」

前の制圧戦の目的にコアの強奪があったのは知っているが、あのときは結局うやむやになってそこら辺のことは詳しく知らない。依頼の内容上、別に知る必要もなかったし。

「技術者の某ＨＲＭさんにも手伝ってもらって、奪ったコア使って造ったんだ。結構イイ感じたよ」

そのＨＲＭさんが誰か見当がつくのは僕だけでしょうか。

ラウラも誰か解ったらしく、不安そうな目を向けている。

「あ、ちなみに待機状態はこれね」

左手に着けていた、緑がかった白色をしたブレスレットを見せてくる。

何か色がどこぞの危険な粒子に似ている、不安だ。

まあ知ったこっちゃないんだけどさ。

「そういや礼衣の専用機、待機状態は何さ？僕が見たことがない気がするんだけれど」

「ああ、ラウラと大体同じだよ」

ラウラと反対側の左腿に、青色の装飾がついた黒いレッグバンドがある。それが僕の専用機の待機状態だ。目立たない上にラウラとペアルックなので気に入っている。

「そうか、バカップル消し飛べ」

何でその結論になるのさ。

「で、まあただの性能自慢だけどさ。言うならば『第ｎ世代』みたいになっちゃったんだよね、僕の専用機」

「はあ？」

「まあ、入学後に詳しくは見てくれよ。説明面倒だからさ」

なら言うなよ。

第三十二話　年度末にやられたこと・3&専用機（一夏の）（後書き）

中途半端な終わり方をしましたすみませんｏｒｚ
そして一夏君が不穏。

意見・感想・糾弾お待ちしてます（オイ

第三十三話　年度末にやられたこと・４（前書き）

どうも、冬期講習が眠い偽桜です。

簪ルートだとのほほんさんが微妙に優遇されるかもしれないことが判明。

第三十三話　年度末にやられたこと・4

§§§§§§§§§§§§§

幾度もの転生で、僕は何を得た？

――――――チートにも程がある能力や、ある意味永遠の命。そしてそれによる圧倒的なアドバンテージ。

じゃあ、何を喪った？

――――――幾多の無意味な道徳観、他人からの虚しいくて儚い友人関係、その他『ニンゲン』として大切なもの沢山。

気のせいじゃないよね？喪ったものの方が、圧倒的に多い気がするのはさ。

礼衣に襲われるまで、こんなこと考えたことが無かったんだけどな。

やっぱり観察対象とはいえやっと見つけた同類（転生者）の友人にあんなことをされたからかな？

ははっ、何でだろ？こんなにも哀しいのに、涙も何も出ないよ。誰だよ人の生涯に流せる涙の量決めた奴。なるべくなら今すぐ上限を上げて欲しいんだけどな。

……独りだな、僕は。
もう今更だけどさ、本当に。

誰か、助けてよ。

§§§§§§§§§§

日本到着翌日。
予定通り僕と一夏は藍越学園とＩＳ学園の試験会場を間違えようと、目的の建物の中に入った。ラウラは拗ねつつもホテル待機。
僕は場所を知らないので、取り敢えず一夏の隣に着いていく。

「そういえばさ」

「何だい？」

「何でわざわざＩＳ学園に入ろうとしたのさ？」

一夏なら面倒だとか言って無理矢理藍越学園に行くと思ってたんだけど。某ＴＢＮ博士の策略完全に無視して。

「まあ、無理矢理舞台から降りたら、監督に何をされるか分からず

かなり面倒だろ？それならいっそ、飛び入りのキャストと共に舞台の上で堂々とシナリオを破壊した方が楽しいに決まってる。大勢の客もいるわけだし、監督もどうしようもなくなるだろうさ」

「抽象的な例えだね」

まあしょーもなく纏めると、

『こっちの方が楽だしいーじゃん』

という事だろう。少々纏めすぎた気もするけれど。

「ああ楽しみだなあ。あの思い上がった愚かな天才を叩きのめせるなんて。そう思わないかい？」

同意を求めてきたが、僕としてはどうでもいいのでスルー。

「天才が嫌いなの？」

「いや、ああいう自分が何でも動かせると思っている天才が嫌いなだけだよ。君のところのヘルマさんとかはむしろ好感を持っているさ、あの人がＩＳを発明していたらとか思う程に」

えー、あの変態が？

あの人確かにでしゃばりはしないけどさ、なんというか、こう、アレじゃん。

これ以上は可哀想なので自重。何だかんだ言って嫌いじゃないし。

「さて、着いたようだね」

『試験会場』と書かれたドアの前に立つ。

「別に礼衣は引き返しても良いんだよ？強制はしないさ」

何故か、いつになく一夏の言葉が弱気だ。いつもなら問答無用なのに。

まあどうでもいいけどさ。

「今さら引き返せないでしょ？それに、一応前世からの仲だし、拒否はしないよ」

「そうか、ありがとう」

一夏が微笑む。

「気味悪いね」

「酷いな全く」

そんな軽口を叩きあいながら、僕らはドアをくぐった。

それを全ての始まりとして。

第三十三話　年度末にやられたこと・４（後書き）

一夏君鬱モード。
次から学園編。

意見・感想お待ちしてます。

第三十四話　入学初日のはじめのほう　（前書き）

どうも、最近書きためてたせいで文のクオリティが下がってきていた偽桜です。
正月辺りに旅行行くんでその間書けないんですよ……それで書きためてたら酷い文に……。
次からは気をつけます。

文章元々酷いよねとか言われても泣かない。

そしてやっと入学。

第三十四話　入学初日のはじめのほう

新学期である。

……そう、新学期になってしまったのである。

入試会場に入った後当然のようにＩＳを起動して見せた僕と一夏は、当然ながら騒がれた。
僕がドイツ軍所属な事で何かとドイツを批判しようとする奴らも居たが、全員が『不幸な』事故や事件に遭い組織ほぼ壊滅ｏｒ死亡ｏｒ黙るかした。

……ちなみに『ならもう一人の男子はうちの国所属な！』とかほざいた某Ａ国は当然のように国際社会と一夏、ついでに一夏を捕られることを警戒したらしい某ＴＢＮ博士からどぎつい制裁を受け、半月で以前の国際社会のリーダーとしての姿は見る影も無くなり、ただの国際統治の偶像に成り果てた。まあ自業自得である。流石にやり過ぎな気もしないではないけど。
そういえば僕の所にも、中学の時僕を隔離した親が『縁を戻そう』とか明らかに金目当ての事を言ってきたが、正直邪魔なので速攻で断った。その後も言い寄ってきたらしいが、僕は関わっていない。

僕と一夏の専用機は『たまたま』余っていたものをそれぞれに割り

当てた、という事で落ち着いたらしい。かなり無理があったが、幸い二人とも二次移行までは行っていなかったので、無理矢理納得させる事ができた。一夏とクラリッサ母娘に感謝。
まあ一夏の専用機は何処の国にも所属していないので、今後色々とあるだろうけど僕には関係ないのでスルー。

そんな訳で、今僕らは入学式を終えて、教室で先生を待機している状態である。
僕、ラウラ、一夏は全員一組だ。

「……」

「ふにゃ」

当然というかなんというか、視線が僕と一夏に集中しているのが分かる。誰だ男子の座席を最前列中心に固めた人は。僕は怒らないから出てきなさい。

「いやー視線が痛いね。兵器に転用できるんじゃないかい？」

そんなことを言いつつも、平然としている一夏。

「確かに痛いね。すごく疲れるよ」

「君も平然としているのは気のせいかい？まあ殺気が向けられてないだけ、確かにマシだけどさ」

「そんな物騒なこと言わない方が良いと思うけど。周りの女子が聞いてるよ？」

「うに」

「別に構わないさ。君も気にしないだろう？」

「まあね」

「うにうに」

そんな話をしていると、教師らしき人が入ってきた。

「皆さん揃ったみたいですね。それではＳＨＲを始めますよ――――って、御刻さん、ボーデウィッヒさんを膝の上から下ろしてくれませんか？」

「わかりました」

いきなり涙目で頼んできたので、さっきから膝の上に乗せていたラウラを隣の席におろす。

「ううー、もう少し乗っていたかった」

「仕方ないよ」

ラウラを撫でる。

「……思うんだけどさ」

「何？」

「さっきから注目浴びてた原因って、絶対それもあると思うよ」

「無いな」

ラウラが答える。

「無いね」

僕も返答。

「（いや、そっちのほうがねーから）」

クラスメイトたちの声はスルー。

「あの、続けて良いですか？」

涙目になる先生。お疲れ様です。

第三十四話　入学初日のはじめのほう　（後書き）

気がついたら某A国を酷い扱いにしていました。
某大統領魂とかのおかげで嫌いではないんですけど。

……よし、何かの伏線にでも使うか（え

意見・感想・攻撃お待ちしてます（オイ

第三十五話　入学初日の自己紹介辺りのほう（前書き）

どうも、冬期講習がやっと終わった偽桜です。
ちょっと体調崩してます。

第三十五話　入学初日の自己紹介辺りのほう

前に立っていた先生（名前は山田真耶らしい。今原作思い出した）が自己紹介し、皆に向かって微笑む。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「「「「「……」」」」」

「よろしくお願いします」

「よろしく頼む」

「４６です」

何故か反応しないクラスメイト一同。一応先生なんだからノッてあげようよ。そして一夏。ネトゲスラングをここで使わないでみんな引くから。

「じゃ、じゃあ皆さん自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

反応が殆ど無かったことにうろたえたらしく、山田先生は涙目で話を進めた。

「先生、ここは僕らが先に自己紹介してよろしいですか？皆さん気になってるみたいですし、先生も進めやすいでしょうから」

一夏が少し助け船を出す。というかやっぱりこいつが丁寧語使っていると気持ち悪い。

「あ、はい、そうですねそうしましょう！」

山田先生が一夏を救世主でも見るかのような目で見る。ヤベェ。

「じゃあ僕から。――――織斑一夏です。趣味はまあいろいろ、好きなことは家事とかその辺りです。これから暫くよろしくお願いします」

おおー、とクラスメイトから声が上がる。今一夏何も言ってないに等しいよ？

「カッコいい……」

「でもすごい丁寧そう……」

「そのギャップがイイ……」

「っ……ふぅ」

おいなんだ最後のは。

というか皆イイ感じに誤解してるね。いやまあどうでもいいんだけどさ。

「次は御刻さん、どうぞ」

山田先生が話を振ってきたので立ち上がる。……うん、少しだけ

緊張するね。

「御刻礼衣です。趣味は特にないです。よろしくお願いします。……あ、一応百合趣味の人のために一言」

皆が注目してくる。

僕は大きく息を吸い、

「ラウラは渡さないからナッッッ！！！！！」

ガッ。

クラスメイトがラウラと一夏除き全員コケる。何で？

「何を言ってるんですか御刻さんんんん！？！？！？」

慌てる山田先生。いやだから何でですか？

「いつも通りで安心したよ。そのいつもがかなり可笑しいけどさ」

「そう？」

普通に過ごしてるつもりなんだけど。

「あの、二人に質問良いですか？」

クラスメイトの一人が手を挙げる。

「どうぞ～☆」

「その口調やめた方がいいと思うよ一夏」

「☆」

「今どうやって発音したのさ」

クラスメイト達が笑う。

「二人は前から友達だったんですか？」

「はい、まあそうですよ」

「最初に会ってから十年以上は有るよね」

「だね」

ちゃんと質問にも回答。そして一夏の口調の変わり方が半端ない。

「二人の間だけタメ口……？」

「詳しい関係を洗い出すのよ！今すぐに！」

おいやめろ。というか最後の発言さっきの女子じゃないか。

「というか礼衣にはラウラさん居ますし何も出ないと思いますよ？」

一夏の助け船、ナイス。

「僕はラウラ以外興味ないから。本当に」

ラウラを後ろから抱き締める。

歓声が上がるが気にしない。

「れ、レイ」

「何？」

「なんというか、その、恥ずかしい」

「別にいいじゃん」

「よろしくないぞ」

後ろから声が聞こえたので振り返ってみると。

「何をやっているんだ、御刻……？」

修羅と化した千冬さんが何故かいました。

……その後何をされたかは、よく覚えていない。

強いて言うなら、目覚めたら一時間目が始まっており、一夏がニコニコした目でこちらを見ていた、という事ぐらいだろうか。

第三十五話　入学初日の自己紹介辺りのほう（後書き）

今回の反省点。
・会話文多すぎ。

意見・感想お待ちしてます。

第三十六話　入学初日の授業辺りのほう　（前書き）

どうも、あけましておめでとうございます、偽桜です。
今年もよろしくお願いします……のはずが、なんかちょっとだけ箒アンチ要素が入った文をあげてしまいました。
箒スキーの方は注意するか飛ばして下さい。

第三十六話　入学初日の授業辺りのほう

千冬さんの攻撃を受けた僕とラウラが復活後、なんやかんやで一時間目終了。
特にすることもないので座ったままボーッとしている。

というか周りの女子が送ってくる視線が邪魔だ。向こうとしては珍しいＩＳを動かせる男子を見に来て『ちょっと貴女話し掛けなさいよ』『こんな抜け駆け禁止の中ではそんな勇気ないだろＪＫ』とかやっているんだろうが、見られる側としては迷惑なだけだ。
全く、さっきの授業中に教室内でのラウラへの抱きつきも禁止されたし、することがないじゃないか。

「そう思うでしょ？」

「だな。こんな中途半端な時間では何もできん」

「時間があったら何をするつもりなんだいとは怖くて聞けないよラウラさん……」

呆れる一夏。一夏も暇らしく着席している。

「ちょっといいか」

おや、誰かが一夏に話しかけてきた。
黒髪きょぬーポニテの女子だ。名前は確か……あれ、篠ノ乃までしか思い出せない。原作読んだのも２０年前近く前だし、まあ仕方ないか。
『モッピー』って単語は思い出せたんだけど、なんか違うんだよな

あ……。

「おやおや箒さんじゃあないですか。お久しぶりです」

あ、下の名前は箒か。

「話がしたい。廊下でいいか」

一夏の挨拶にも答えず、自分の要件だけを伝える箒さん。いいのかそれで。

「んー、まあいいですよ。あまり状況に変わりはないと思いますけどね」

一夏は席を立ち、箒さんについていった。

さて、後は。

「「「「「……」」」」」

目の前に広がる、この『質問したいです！』みたいな女子の大群をどうしようか。いや本当に。

「ラウラ」

「何だ？」

「道連れ～～～」

「なっ、うにゃあああああっ!?」

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：一夏

さて、呼び出されて廊下に来たわけだ。

いやー周りからの目線＆聞き耳がうざったいったらありゃしないね。
なんかむしろ数が増えたみたいだし。
しかも呼び出した本人は、

「……」

この通り無口だからね。
だったら最初から呼ぶんじゃないよ。僕を視線に晒してストレス死させたいのかい？
まあいいや仕方ない、こっちから話を振ってあげるとしますか。

「そういえば」

「な、何だ」

「去年の剣道全国大会優勝、おめでとうございます」

どうでもいいけど丁寧語って疲れるね、吐き気がするよ。
やめる気はないけどね。

「何でそんなことを知っている」

「新聞見てたらたまたま見つけました」

「な、何で新聞なんか読んでいるんだっ」

相変わらず面倒な性格だね、理不尽過ぎて帰りたいよ。

まあ人付き合いとか、大体そんなものだけどさ。

「そういえば、そのポニテそのままだったんですか？お陰ですぐに見分けがつきましたけど」

嘘だけどね。

実際、興味対象以外は外見うろ覚えだし。こんなことを言えたのは、ついさっき脳内アルバム（家族判別用）の中に姉さんと一緒に写る彼女の姿があっただけなんだよ。

というかこの子は他人から話を振られないと会話が出来ないのかい？非常に面倒だね。

「よ、よく覚えているものだな……」

まあ全く覚えてないけどね、残念ながら。

「普通忘れないでしょう、幼い頃の知り合いは」

普通はね。

「……」

おや、睨んできた。

……あ、そういえばこの子僕に恋してるんだっけ。忘れてた忘れてた。

小学校の頃にいじめっ子から助けた時だっけか？残念ながらもう忘

れたよ。

「そ、そう言えば聞きたいことがある」

おや、リカバリーが速いね。

「何でしょうか？」

「御刻、だったか？あいつと何処で知り合ったのだ？私は今まで一度も会ったことがないぞ」

あらら、スルーしてくれたと思ってたんだけどね。やっぱり気がつくか。

「箒さんには関係無いですよ」

「おい、ちょっと待て――――」

おっと、チャイムが鳴ったみたいだ。急いで戻らないと。

＝＝＝＝＝＝＝ｂｒｅａｋ　ｓｈｉｆｔ

第三十六話　入学初日の授業辺りのほう　（後書き）

意見・感想お待ちしてます。
特に文章の書き方についてとかの問題点の指摘していただければ嬉しいです。

第三十七話　入学初日のセシリアさん登場辺りのほう（前書き）

どうも、三日間ほど旅行行ってきます、偽桜です。
１／２～４は完全予約投稿なので、感想とかにも返信できません。
あらかじめご了承下さい。
あと、３０万アクセス突破しました。ありがとうございます。

……また原作ヒロインアンチっぽくなってしまいました。すみません。
なんで僕が書くとこうなってしまうんだろうか……。

第三十七話　入学初日のセシリアさん登場辺りのほう

僕とラウラが女子たちの質問を受け流した休み時間が終わり、二時間目。

「――――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が――――」

すらすらと教科書を読んでいる山田先生。お疲れ様です。

「うー……」

しかし、この辺りの内容は軍でさんざん習ったので、ノートはとってるけどぶっちゃけ暇だ。

右隣のラウラを見る。

「みゅう……」

ラウラも同じ感じだった。

すごーく暇＆眠そうである。抱きつきたいけどまた千冬さんにキングクリムゾンされるのは嫌なので自重。放課後に本気出す。

次は左の一夏。

「……」

ぴしっと背筋を伸ばして椅子に座っている。

良くないところと言えば、教科書とノートを机の隅に積み上げ、手は膝の上に置いていることぐらいだ。……って、ダメじゃん。

「あ、あの織斑くん？解らないところがあるんですか？」

ほら山田先生も困ってるし。

「いえ、むしろ全部覚えてるんで暇なんです」

「ほう、なら確認してやろう」

千冬さん登場。一夏大丈夫？

「この教科書に『ＩＳ』という単語は何回出てきた？」

理不尽だ。

「んー、２４３８５回かな？」

「正解だ」

しかも正解答えちやったよ一夏。

「次だ、この教科書たち全部の中で、一回も使われていない漢検二級相当以下の漢字の数は？十個ほど例も挙げろ」

「えーと確か――――――」

その後も理不尽な質問&解答が続き、その授業は終わった。
……あれ、僕ら何も教わってない気がするんだけど。
まーいいよねー。

＝＝＝＝＝＝＝

二時間目終了後の休み時間。

「すげー暇なんだぜ礼衣ー」

「そーなのかー。はいラウラ」

ぱくっ。

かりかり。

「うむ、やはりホ○ッキーはうまいな」

「だよねー」

「おいラウラさん半濁点しか隠せてないよ？あと早弁はやめようか、姉さん的な意味で」

「だってこれお菓子だし」

校則で禁止されてないと思ったけど、確か。
取り敢えずさっきホ○ッキーくれた女子に感謝。

「確かにそうだけどｓ「ちょっと、よろしくて？」突っ込み中だったのでよろしくないです」

うわー酷い。まあいつもの事だけど。

「まあ！なんですの、そのお返事？わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

この女子もこの女子だ。
金髪ロールの……あれ、名前なんだっけ？原作忘れって怖いね。
セなんとかまでしか思い出せないよ。

「すみませんねぇセ……セアシリさんか網走さんでしたっけ？」

「セシリア・オルコットですわ！！！！」

おお切れた。というか一夏後者は絶対あり得無いから。というかどうやって間違えた。
まあ、一夏達は放置しよう。別に僕には関係ないからいいよね。

「ラウラ、はい」

「あーん」

ぱくっ。

かりかり。

「うむ、次は私の番だな。あーん」

ぱくっ。

かりかり。

「そちらのお方！なぜ私をスルーしますの！？」

え、だって面倒だし。

「礼衣、道連れってかなりイイよね」

おいこらどういう意味だ。

そんな感じで僕が一夏と共に面倒事に巻き込まれそうになったとき、丁度良くチャイムが鳴ってくれた。

「くっ、あとでまた来ますわ。くれぐれも逃げないことね！」

「二度と来ないで頂けると嬉しいです」

「まあまあ一夏落ち着いて。僕も同意見だけど」

「あ、あなたたちねえッ……！」

オルコットさんは後ろに気がつかないみたいだ。

「ほう、チャイムが鳴ったのにまだ立っているとは良い度胸だ」

「へ、織斑先ｓ……キャアァアァ！」

オルコットさんは当然の如く出席簿で殴られ、ダウンした。合掌。

……ああ、これの強化版をさっき喰らったのか。そりゃ記憶も飛ぶよ、うん。

第三十七話　入学初日のセシリアさん登場辺りのほう（後書き）

意見・感想お待ちしてます。

そういえば箒アンチは良くなかったみたいですね……。
今直す時間無いのでもしかしたら何日か後で直すかもです。

第三十八話　入学初日のクラス代表決め辺りのほう

三時間目である。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

さっきまでとは違い、千冬さんが講師をやり、山田先生がノートを取っている。生徒はともかく、山田先生がノートをとる必要は有るのだろうか。一応教師やってるんだから、こんな初回でやる内容ぐらい知っておかないとおかしい気がするけど。

「先生」

「なんだ織斑」

一夏が手を挙げた。なんかすごーく嫌な予感がするけど気にしない。

「各種装備って、某Ｍ○○ＮＬＩＧＨＴさんとかそんな感じのものですか？」

聞こえる、一夏？それ全然隠せてない。
しかもそれ強いけどさ、ＩＳに積めないでしょ。
消費ＥＮ的な意味で。

「……」

ほら千冬さんも一夏の頭に出席簿降り下ろして……えっ、上に出席簿が吹き飛んだ？

「あちゃー、姉さんどんな勢いで降り下ろしたのさ」

「それを真上に受け流したお前も大概だと思うのは私だけか……？」

出席簿は天井に深々と突き刺さっている。というかなんでそんな威力で振ってぶつかっても壊れないのさ、特注品なの？

ほらクラスメイトの皆さんドン引きしてるし。

「それと、織斑先生と呼べ。一応業務中だ」

「えー、だって姉さんは姉さんだし」

今度はチョークを投擲。……天井の出席簿が真っ二つに割れた！？

どうやったらそんな事が出来るんだろうか。というか天井に刺せる強度の出席簿を破壊する強度のチョークってどんなだ。

ほらクラスメイトの皆さん顔真っ青にして「これは夢なんだ、目を覚ましたとき、私はまだ十二歳で……」とか何処かのコピペっぽいこと言ってるし。

「まあいい……ああ、そういえば大事な事を忘れていたな」

千冬さんは一旦仕切り直し、正面を向いた。

「再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければならない」

ああ、そのイベントか。

ラウラと一緒に代表になれるんなら良いんだけど、確か無理でしょ。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会へのｓ「「「こいつを推薦します」」」織斑と御刻、それにボーデウィッヒ、お前らは何をやっているんだ……」

あ、一夏とラウラと行動が被った。

ちなみに僕とラウラは一夏、一夏は僕を指差している。わーい勝った。

というか明らかにやりたくないだけだよね、一夏。

「織斑くんがいいかなー……」

「いや、ここはあえての御刻くんも……」

ああ、女子陣も僕と一夏のどちらか二人に意見がシフトしてしまったよ。

いやまあ多分何もしなくてもこうなりそうだったけどさ、

「では候補者は織斑一夏、御刻礼衣以外にいないか？自薦他薦は問わないぞ」

千冬さんが話をまとめる。このまま行けば平和的な多数決になりそうだ。

まあ、

「待ってください！納得がいきませんわ！」

このまま行けば、の話だけど。

第三十九話　入学初日のセシリアさんとの戦い決定辺りのほう（前書き）

お知らせ。
セシリアアンチ要素微妙にありますので苦手な方は気をつけて下さい。

第三十九話　入学初日のセシリアさんとの戦い決定辺りのほう

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：一夏

「待ってください！納得がいきませんわ！」

あー、やっぱり邪魔が入るか。
まあ確かにそこまで期待してなかったけどね、穏やかに事が進むなんてさ。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア――――――」

もういいやこいつうざったいからスルーしよう。
自分を制御できないイギリスの淑女（笑）よりドイツのバカップルを見ていた方が面白いよ。
だってほら、

「ラウラ、二人で代表なれるならやらない？」

「む、それは良い考えだ。織斑先生、駄目ですか？」

「残念ながら代表は一クラスにつき一人だ」

「むぅ……」

「まあまあ仕方ないよラウラ」

何か姉さんまで巻き込んでオルコットさんをスルーしてるし。

というか姉さんはこの状況をスルーして大丈夫なのかな。授業の停滞にもなるし、クラスの雰囲気も悪くなると思うんだけど。
まあ別に良いや、そこら辺は姉さんの裁量だし。

「わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――って、聞いてますのッ！？」

あれ、まだ何か言ってたんだ。飽きないねえ。
まあ一つ要望があるとすれば、その下らない演説を聞くことを強制しないで欲しかったけどさ。

「ん、聞いてないよ？」

「私もだぞ」

「僕もです」

「あなたたち、人をどれだけ馬鹿にすれば気がすみますのッ……！」

別に馬鹿にはしてないんだけれど。ただ聞く価値が無いと判断しただけだしさ。

「一夏、どうしようか？」

そこで僕に判断を振るのはよそうぜ礼衣。僕だって考えるのは面倒なんだしさ。

「言わせたいだけ言わせれば良いんじゃないかな？別に僕らがそれ聞いてどうこうする訳でもないし」

というかそれ以前に、自分の意見に囚われてる人は他人に迷惑を掛けるべきじゃないと思うんだよ。まあそれが無理だから囚われてるんだろうけどさ。
というか本当にどうしようね？今の僕の発言でオルコットさん完全にキレちゃったし。

「あなたたち、というか特にそこの貴方！」

おや、礼衣を指差したね。
ここで指差すなら僕だと思ったんだけどな。

「さっきから私を無視した上、何でそこまで他人に判断を丸投げ出来るんですか！？しかも外見からしてそんな悪趣味な眼帯をそこの女子と二人で――――」

「馬鹿じゃあないですか貴方」

性別の次は外見オンリーでの意見か。
気がついてないのかな？段々とクラスメイトの君を見る視線が冷たくなってる事にさ。

「貴方、何を言って――――」

「大体、オルコットさん貴女さっきから自分の意見を押し付ける事しか考えてないでしょう？後で僕が公の場でぽろっと『イギリス最悪だわー、特にあの代表候補生』とか言ったら、危ういのは貴女の祖国と立場ですよ？」

「あ、あぁあ……」

青ざめるオルコットさん。本当に気がついてなかったとは意外だな。てっきりそれ覚悟で言ってるのかと思ってたよ。

「まあそんなこと面倒なだけだししませんけどね。で、どうする姉さん？このままだとクラス代表決まらないけど」

「オルコットは結局立候補するのか？」

「は、はい、参加しますわ」

おや、結局参加するのか。まあ確かに、引き下がれないところまでは十分に行っていたけど。

「さて、候補者は全員専用機持ちか。……模擬戦でもするか？」

うぉい対戦フラグは回避できないのかよ。

「ね、姉さん、それは流石に……」

「オルコットは大丈夫か？」

「大丈夫ですわ！」

僕はスルーですか姉さん。

まあいいや、どうせ礼衣が止めてくれるでしょ。

「御刻は大丈夫か？」

「別に構いませんよ」

「そうか。なら授業の一環として模擬戦を来週の月曜日午前、第三アリーナで行う。織斑、御刻、オルコット各名は遅れるなよ！」

裏切ったな礼衣いいいいいいいいいい！

第三十九話　入学初日のセシリアさんとの戦い決定辺りのほう（後書き）

別に作者原作ヒロインが嫌いな訳じゃ無いんです、書いてたらこんな流れになってしまっただけで。
ごめんなさい。

意見・感想お待ちしてます。

第四十話　入学初日の昼食辺りのほう（前書き）

どうも、旅行から帰ってきました、偽桜です。

旅行から帰ってきたらいつの間にか溜まっている学校の仕事の量に絶望してます

何個かサボっても良いよね……？

第四十話　入学初日の昼食辺りのほう

適当に授業をやり過ごし、ついに昼休みになった。
何故か一夏が拗ねていたので、ラウラと二人で食堂まで移動。後ろについてきた女子は全スルー。

「ラウラはなに頼むの？」

「たくさん種類がありすぎて迷うな……無難に『日替わり定食』にでもするか」

「なら僕もそうしようかな」

食券機のボタンを押して購入。
おばちゃんに食券を渡し、料理をのせたトレイをもらって空いている机に移動する。

「困ったぞ礼衣」

「どうしたの？」

「和食だ」

確かに今日の日替わり定食は白米と味噌汁、おかずは豆の煮物と焼き魚と、完全に和食である。
……あ、

「箸うまく使えなかったけ？」

「うむ」

前にちょっとだけ使う機会があったのだか、その時も箸をうまく使えず困っていた気がする。
特に豆類。つるつるして掴めず、涙目になっていた。
まあこんな状態なら仕方無い。遅れて叱られるのも嫌だし。

「どれ食べたい？」

「まずは白米だな」

僕が適当な大きさを箸でつまむ。
ラウラの口元に持っていき、

「はいあーん」

「うむ」

……周りからのぎょっとした目線が痛いが無視。ラウラの要望に従い、食べさせていく。というかラウラが小動物みたいで可愛いにも程がある。

「なぜかな、私にはあそこだけ背景がピンク色に見えるよ……」

「大丈夫、私もだから」

「夏に薄い本が出るな」

外野がうるさい。というかまた最後の人何やってるんですか表出ろ。

その時たまたま、トレイを持ったまま迷っている様子のオルコットさんを見つけた。どうやら人がこの食堂に密集したせいで、座席が見つからないらしい。
そういえば四人用のテーブルで二人分しかスペースを使っていないので、僕らの席は空いている。

「オルコットさん、ここ空いてるよ」

「はい？」

こちらに気がつくオルコットさん。
と同時に、何故か驚愕の表情をされる。

「何をしていますの……？」

「食事だが？」

「ならなんでボーデヴィッヒさんは御刻さんの膝に乗っていますの!?」

え、別にいいじゃん。食事はできているわけだし。
教室で抱きつけなくなったし、ここで補給しないと後が持たない。
マジで。
オルコットさんは理解できていない様なので、仕方無く、本当に仕方無く食べる様子を実演する。

「はいあーん」

「うみゅ」

「この状況、突っ込んでよいのかどうかわかりませんわ……」

呆れられたけど気にしない。

どうやらセシリアさんも色々と諦めたらしく、同じテーブルに座ってきた。

「それにしても、意外でしたわ」

「何が？」

「わたくしがさっき、その、外見について罵りましたのに」

ああ、その事か。

別に僕もラウラも他人からの評価は割とどうでもいいと思ってるんだよね、大きな危害さえ加えられなければ。

だから眼帯の事をイギリスの一代表候補生にどうこう言われようと、別に気にはしない。流石にそう言っちゃうとまたバカップルとか言われそうだしやめるけど。

「んー、別に困ってるのに助けない必要性もないし。別に気にしなくてもいいと思うよ」

「それでも、さっきは言い過ぎましたわ。申し訳ございませんでした」

頭を下げるオルコットさん。なんで急に謝ってきたかはわからないけど、最初に思ったよりもそんなに悪人ではなさそうだ。

これは言っとかないと。

「だからそんなに気にしなくても良いのに。こっちも言い過ぎてたし。

――――――ねぇ、一夏？」

「別に言い過ぎではない気がするんだけどな。というか礼衣、気付いていてスルーは酷くないかい？」

さっきから気配を消してた一夏にさ。

第四十話　入学初日の昼食辺りのほう（後書き）

すげーどうでもいいですが、
二人分のスペース→ラウラは礼衣君の膝の上→あれ、一人分空いてない？→そこには何と一夏が！
という伏線にも満たない何かが張ってありました。

……本当にどうでもいいですねごめんなさい。
後セシリアの口調がよくわからないｏｒｚ

意見・感想・絶叫お待ちしてます。

第四十一話　入学初日の一夏乱入辺りのほう（前書き）

どうも、一昨日から昨日にかけて風邪で寝込んでました、偽桜です。

ちょっと最近体調が悪い……。

第四十一話　入学初日の一夏乱入辺りのほう

「ど、何処から出てきましたのっ?!」

突然の一夏登場に驚いてるオルコットさん。
そりゃまあ僕も、何もいない所から突然人が出てくれば驚くけど、今回は最初から見えてたのでリアクションはパス。

「さっきからそこに居たぞ?」

ラウラも気がついていたみたい。何か嬉しいのですりすり撫でる。

「うゅゅ……」

「なんかもう礼衣たちへの突っ込みは疲れたから飛ばすよ。というか二人とも気がついていてスルーとか、本気で泣いていいかい?」

「まあ別に一夏だし良いかなーとか思ったし、ねえ?」

「うむ。周りの人間は完全に気がついていなかったしな」

一夏は気配を消して僕らが気付くかどうか楽しんでいるんだろうけど、こっちとしては周囲に変人と思われるのは嫌なので反応していいのか悪いのか判断に困る。まあ判断する前に取り敢えず食事を最優先したけど。
そんなことを考えていたら、一夏の泣き真似がまたウザくなったので仕方無く話を進める。

「で、何か用事でもあるの？」

「ああ、代表決めのルールとというか、組み合わせ表でも作ろうかと思ってね。あ、姉さんに脅された訳じゃ無いよ。うん、本当に」

絶対嘘だ。

何か異様に震えてるし、後ろによくわからない黒い影も見える。

……黒い影？

「ほう、織斑は後でＨＥＩＷＡ的なＨＡＮＡＳＨＩＡＩをしたいようだな……？」

まさかの千冬さん登場。どこから出てきた。

ちなみに一夏は完全に凍っている。さっきもナニカサレタみたいで、目のハイライトも消えた状態で必死に現実から逃げているようだ。

『ボクハナニモシテイナイボクハナニモシテイナイボクハナニモシテイナイ……』とかぶつぶつ呟いてるし。

前に千冬さんより強いとか何とか言ってた気がするし、実際さっきの出席簿は結構凄かったけど、すごく不安になってくる。

……はっ、これがギャグ補正！？

「違うと思うぞ？」

残念、違ったみたい。

「さて、組み合わせ表をとっとと作りたいから、何か意見言ってく

れないかな？」

おや、一夏が復活した。
千冬さんの姿も気がついたら消えてるし、さっきのは幻覚だったんだろう。うん、多分そうなんだ。いちいち反応していたらツッコミがしきれないじゃないか、うん、絶対にさっきのは幻覚だったんだ！
思考放棄。

「はい」

「何かな礼衣」

「僕は一夏に投ｇ……任せるよ」

「オイ今絶対に投げるって言いかけただろ」

別に良いじゃない、ねえ？
どうせ戦うだけしか内容はないわけだし、いちいち細かいことを考えるのは余り慣れてない。
しかも只の試合なんだから、別に死ぬわけでもないし。

……さてと、一夏に判断は任せたことだし、昼食（いちゃつき）を再開しますか。

第四十一話　入学初日の一夏乱入辺りのほう（後書き）

意見・感想お待ちしてます。

第四十二話　入学初日の……もうなんでもいいよね、うん（前書き）

どうも、日中の頭痛はデフォ、偽桜です。

今回短め。

第四十二話　入学初日の……もうなんでもいいよね、うん

＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：一夏

「僕は一夏に投ｇ……任せるよ」

「オイ今絶対に投げるって言いかけただろ」

そんな僕の言葉も虚しく、礼衣が完全に使い物にならなくなった。
……うん、完全にラウラさんと二人の世界に逝っちゃってるね。
だってほら、

「にゃー」

「うにゃ？」

「にゃにゃー」

「にー」
以下略。

こんな感じで会話してるんだぜ？読心術でも使わない限りわけがわからないよ。まあ使えるけどさ。
というか礼衣、男がネコの真似すると気持ち悪いと思うよ？何か妙に似合ってるけど。
まあそんなことはいいや、とりあえず組み合わせをとっとと決めちゃおう。礼衣にも投げられたし。
こういうときに判断を任せられると困るよね本当に。一応ちゃんと『どーでもいい』という希望を取った、ということにはなるんだろ

うけどさ、ちょっと気を遣ったりしないかい？僕はしないけどさ。
……って、誰に話してるだか。

「さてオルコットさん」

「なんですの？」

あー、やっぱり少し態度が硬い。
まあ仕方ないね、さっき結構酷いこと言ったし。今後の僕の平穏のためにも、ここは一応謝っておくべきなのかな。
そうと決まったらとっとと謝っとこう。面倒だしね。

「さっきの時間中は少し言い過ぎました、ごめんなさい。」

「え、ええ、こちらこそ言い過ぎましたわ」

あれ、何か戸惑われた。
そんなに僕って適当かな、自分ではそんなつもり無いんだけど。

「さて、時間もありませんし急いで対戦方法を決めましょうか。普通に総当たり戦にします？」

「あら、別にあなたたち二人で掛かってきても構いませんわよ？」

U☆ZE☆E。絶対にこいつ礼衣相手にも負けるよ、能力的に。
だってあいつ、ＡＩＣをたいした集中無しで使いこなしてるんだぜ？しかも威力は下がるけど複数対象にもやれるらしいし。
『ヴィークル』すごいねホントに。今度礼衣にコピーさせてもらおうかな？お礼にラウラさんにもコピーさせてさ。
昔どっかの世界で『他人に能力を与える』的な奴コピらせて貰った

からね。便利だよアレ。
まあいいや、適当な返事で流しとこう。

「そうすると僕らが勝ったとき決めるの面倒なので、普通に総当たりにしませんか？」

「あら、勝つおつもりなのかしら？」

「一応専用機持ちなんで」

いやーホントにU☆ZE☆E。どうにかならないのかなこの人の性格、マジで今後が心配になるよ。

「にゃー」

「うにうに」

そして礼衣達、何か雰囲気壊れるからやめてくれないかな、お願いだから。

「みゃー？」

UZEEEEEEE！！！

第四十二話　入学初日の……もうなんでもいいよね、うん（後書き）

何かオチがずさん。
あと１０日から学校が始まるのでテンションが急上昇。

意見・感想お待ちしてます。

第四十三話　入学初日の部屋決定辺りのほう（前書き）

どうも、以前僕に告白してきた女子が闇化しそうになってきた偽桜です。
僕の学校とその子が接点無い上、その子に渡した住所は偽物なんでまあいいんですけど。

そして初日長げえ。

第四十三話　入学初日の部屋決定辺りのほう

昼休みと午後の授業をやり過ごし、もうすぐ放課後である。

「はい、では今日の授業は終わりです。あ、織斑くんと御刻くんは……ってあれぇ！？」

「先生、一夏はもう何処か行きました」

具体的には『授業は～』の辺りで。どうせ何処にいるのかは把握できているのでスルー。

さっきノートに魔方陣みたいなものを書いてたし、また何か怪しい能力でも使ったんだろう。深くは突っ込まないけど。

「あの馬鹿が……。まあいい、取り敢えず解散だ。御刻は連絡事項があるので残れ」

「了解です」

ラウラと僕除く他のクラスメートは皆自由行動を始める。取り敢えず僕らもとっとと休みたいので千冬さんに用件を聞く。

「で、話って何でしょうか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました。御刻くんは織斑くんと同室……ひぃ！」

おかしいなあ。今『ラウラと同室じゃない』みたいな事が聞こえたんだけど。

ラウラもそう聞こえたみたいで、僕と同じように山田先生にナイフを向けているし。
集団幻聴って怖いね。

「もう一度言ってみろ」

「は、はひぃ……」

「何をやっているんだお前らは……」

ゴスッ。
出席簿を投げられた、痛い。
というか復活したんだ、出席簿。

「これは予備だ」

思考読まれた、少し悲しい。

「政府から直接命令が来たので、しかたないんですよおぉ……」

涙目の山田先生。この人はこの顔になることが多い気がする。きっと苦労が多いんだろう。
政府相手に戦うのは面倒だから、まあ仕方ない。ラウラとの同室は諦めることにしよう。

「あ、質問いいですか先生」

「何だ」

「『たまたま』『偶然』僕とラウラが一緒の部屋で眠って『しまう』

のは良いですよね？」

「許可できん「良いと言ってくれますよね？良いに決まってますよね？良いとしか言いませんよね？良いと」許可するから黙れ御刻……」

わーい。

やっぱり交渉って大事だよね。

「ねー？」

「うむ」

「お前らは何をやっているんだ……」

あきれる千冬さん。何で？

「で、部屋は何処ですか？」

「あ、鍵の番号と同じです。はいどうぞ」

そう言って先生方は去っていった。

荷物のこととか聞いてないけど、どうせ移動されてるんだろうし無視。

さて、じゃあ部屋に行こう。

……あ、そういえば。

「もう良いと思うよ一夏」

「君は本当に無視が好きだね、本当にさ」

気配消してた一夏に声を掛けるのを忘れてた。

さっき教室に帰ってきたし。

「何処に行ってたの？後部屋の安全は確保されたっぽいよ」

「ちょっと近くのゲーセンまで。あと『安全』ってことは、礼衣と同室かな？」

「うん。ラウラも来るけど気にしないで」

「オイこらちょっと待ってくれよ」

嫌だ。

ラウラとの添い寝は絶対に譲れない。

重要な作戦の前でも本当に眠れなくなったし。

「じゃあラウラ、部屋行こうか」

「うむ」

「ちょっと待てよォォォォォォォォォ！」

一夏、キャラぶれてる。

第四十三話　入学初日の部屋決定辺りのほう（後書き）

最近更新を週1～2に減らした方が少しはクオリティがマシになるんじゃないかと思い始めたり。

そこら辺含めて意見・感想お待ちしてます。

第四十四話　入学初日の終わりのほう（前書き）

どうも、学校が始まってテンションが上がってる偽桜です。

家にいなくて済む……！

第四十四話　入学初日の終わりのほう

「礼衣、こっちフォロー回って！もう限界だ！」

「ちょっと無理、こっち押さえるのに手一杯！」

「仕方ない、誰か行ける人は！？」

『無理です、こっちも押され……きゃあぁ！』

『こっちも無理だ、メインブースターが完全に逝ってやがる』

『無理だぜこんなの！マッハで撤退する！』

「くっ……ここで果てるのも、まあ悪くない。見たかったですね、宇宙を……」

「一夏ァァァァ！」

誤解のないように言っておくけれどさっきの台詞たちはネトゲのクラン内ＣＯＯＰ戦（要は多人数対コンピューター戦）でのボイスチャットの様子である。何かネタが混じってカオス極まりない気がするが気にしない。

部屋の用意も終わり、ラウラも割り振られた部屋に夜まで一時移動していたら、一夏が暇を持て余し僕を巻き込んでこんなことになった。

ちなみに僕と一夏は両方とも本名バレしている。『そのせいでクラン加入申請を拒否る作業が大変』とは一夏のぼやき。そりゃ有名人が二人いるし、何でも良いから繋がりを持とうとする組織もいるか

ら申請も多いだろう。僕には関係ないからいいんだけど。

「そういえば一夏」

「何だい？」

「何で僕ら自前の端末でプレイしてるのさ。そこの部屋据え付けのPCでもスペックは足りるだろうし、別にこのぐらいの情報、盗まれてもいいと思うんだけど」

さっきこの部屋を調べたら、一時期某夜神さん家の息子さんの部屋に仕掛けられた量並みに盗聴機とかがあったのは若干驚いた。何処のハルフォーフ母娘だよ、とか若干思ってしまったのは秘密。

「ああ、そんなことか」

「何か理由でもあるの？」

一夏は一拍間を開け、

「なんかヤじゃん」

一番簡単かつわかりやすい理由を述べられた。いや何かヤなのには同意するけど。

「そういえば、明日クラメンの一人に会いに行ってくるけど、礼衣も来るかい？」

「遠慮しとく。面倒だし」

「なら仕方ないね」

そのまま二人でチャットに戻る。

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　乙でしたー、残念

［クラン］√Ｎ：　仕方ないね。後でクラマスだけ罰ゲームな

［クラン］ｓｉｄ：　ＩＳ学園の女子の写真うｐしやがれ！あ、零は彼女（ッレ）の写真な！

何か嫌な流れをつけられた。
ラウラの写真晒しは絶対に回避しないと。

［クラン］零：　絶対にあげません

［クラン］√Ｎ：　うｐ！うｐ！

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　恋人一筋な零にそんなこと言ってると、最悪死ぬけどいいの？

［クラン］ｓｉｄ：　女子校に入ったお前らが悪い（キリッ

おいこらｓｉｄさんちょっと後でお話ししようか。

その時、隣の一夏が立ち上がった。
え、本当に写真撮りに逝く……じゃなかった、行くの？
といて

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：　まあいいや、僕があげるから待っ

［クラン］√Ｎ：　さすがクラマス、話がわかるな

［クラン］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　隣の部屋の幼馴染に凸ってくるから、実況は零よろ

幼馴染ってことは、箒さんか。
一夏はとっとと部屋を出ていってしまった。

［クラン］零：：　死なないでね一夏、いやマジで

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　そんな怖い人なんですか？

おや、ＫＮＺＳ．ＳＳさんが入ってきた。たぶん今までの紳士トークについて行けなかったんだろう、どうやら女性らしいし。

［クラン］零：：　多分隣のここまで音が聞こえてくるぐらいには。ちょっと僕のだけマイクつけますねー

そう言いながらマイクをオンにした直後。

ズドーン。

『この、変態がァァァァァ！』

ああやっぱり……。

［クラン］零：：　クラマス死亡のお知らせ

［クラン］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　当然ですね

［クラン］√Ｎ：：　あいつは星になったんだ……

［クラン］ｓｉｄ：　サヨナラ＊クラマス

第四十四話　入学初日の終わりのほう（後書き）

今回ちょっと会話とチャットの移り変わりが荒かったかも。
意見・感想お待ちしてます。

第四十五話　一夏（朝）（前書き）

どうも、最近ｋｉｎｄｌｅから投稿したくなった偽桜です。
でもｋｉｎｄｌｅって日本語入力できないんですよ。残念なことに。

第四十五話　一夏（朝）

§§§§§§§§§§§§§§§

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　ＫＮＺＳ．ＳＳさんＫＮＺＳ．ＳＳさん

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　何か用事なの？

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　明日放課後に会いに行くから、何処にいるか教えて

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　急すぎ……。明日は第三整備室にいると思う

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　了解。何か作業なら手伝うよ？

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　あれは私がやらないといけないから無理

［密談］Ｏ．ｓｕｍｍｅｒ：：　そりゃ残念。まあいいや、そろそろクランチャットに戻ろう。また明日

［密談］ＫＮＺＳ．ＳＳ：：　わかった、また明日

パタン。

「少しぐらい食い下がって欲しかったな……って、私何言ってるんだろ」

「どうかしたのか？」

「な、なんでもない……」

「そうか、なら私はレイの所に行ってくる。ではな」

「もう就寝時間近いけど、いいの……？って、行っちゃった」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝ｓｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ：一夏

入学式翌日の朝になった。

すげー寝不足である。礼衣とラウラさんのせいで全く眠ることができなかった。

だってあいつら、僕が居るのに［ピー］してたんだぜ？こっちとしては五月蠅くて眠れなかったよ。

ちなみにその一部始終をボイスオンリーで振り返ると……って、それをやると１８禁（ノクターン行き）になりかねないからパスしよう。回想したら余計疲れそうだし。

欲情しなかったのかって？残念ながら礼衣達の声たちを聞いても五月蠅いとしか感じなかったよ。その事がちょっと哀し……いや、別に大丈夫だと信じよう。

「……」

さて、取り敢えずはこの状況を何とかしようか。

目の前には昨日侵入した部屋の持ち主、箒さん。すごい勢いでこっちを睨んできている。

うん、まさかあの時着替え中だとは思わなかったんだ。お陰で今凄く気まずいよ。

なのに、何でこの娘は僕を誘ったんだろうね。こんな雰囲気で食事

するぐらいなら、向こうで背景ピンクワールドを展開してる礼衣たちと一緒にいたほうが遥かにマシなんだけど。
よし、なら移動しよう。

「ではちょっと向こうの方で食べてきますね」

と同時に席を立ち移動しようとしたけれど、箒さんに止められた。
やっぱり面倒だねこの娘、この場から今すぐ離脱したいよ。精神が削られそうだ。

「ま、待て」

「何ですか箒さん」

「何故席を離れようとしたんだ」

愚問だと思うんだけれどな。

「ああ、この場にいると凄く居心地が悪いので」

「も、元はと言えばお前が……」

「罰、とかですか？」

「そ……そうだ、罰だ！」

それは昨日さんざん叩かれたりしたからもう済んだ気がするんだけれど。このままの流れで『罰として結婚しろ』とか言われそうな気がするよ。まあこの娘にそんな度胸はないだろうけど。

「なら僕が食べ終わるまでは居ますよ」

「そ、そうか！なら「ごちそうさまでした」はあぁっ！？」

完食。

いやーやっぱりここの食堂の定食はおいしいね、あんまり味わってはないけどさ。

「ではまた授業で」

「おいちょっと待て――――」

何か言ってるけど退避。

取り敢えず教室へ急ごう。

……あ、いろいろとエスカレートしてた礼衣たち止めるの忘れたな。

第四十五話　一夏（朝）（後書き）

原作のシーン再現しようとしたらなんか変な方向に箒がアンチされました。
どうしてこうなった。

意見・感想・粛清お待ちしてます（ぇ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5945y/

IS -隊長補佐の憂鬱-

2012年1月11日09時48分発行